# 山陽新幹線関係
# 埋蔵文化財調査報告

鞍手郡若宮町・福岡市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査

第 13 集

1979

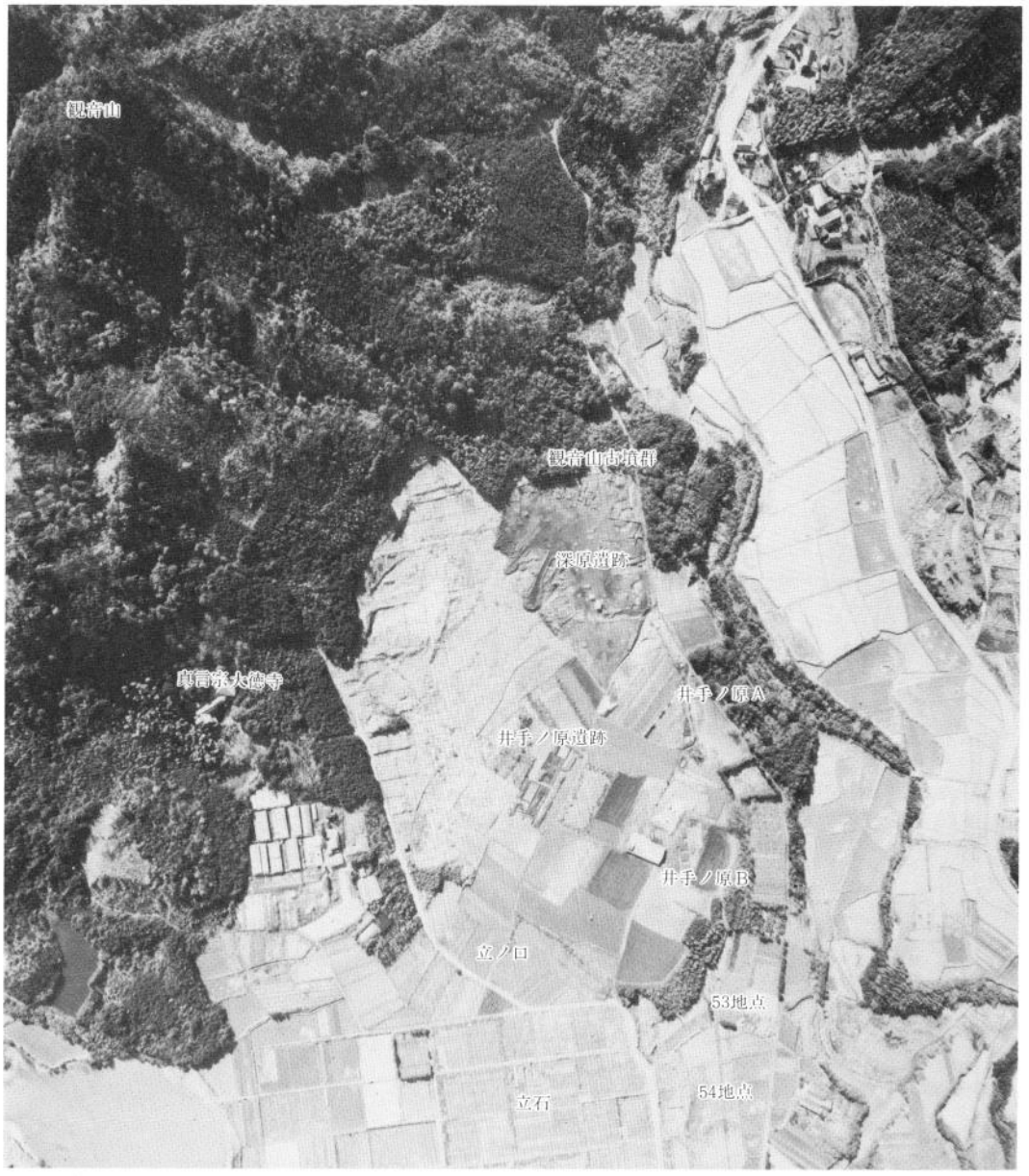
福岡県教育委員会

# 山陽新幹線関係
# 埋蔵文化財調査報告

鞍手郡若宮町・福岡市・筑紫郡那珂川町所在

遺跡群の調査

第 13 集




観音山山麓　遺跡群垂直航空写真(昭和48年２月)　　南西航空提供

# 序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車輛基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は，鞍手郡若宮町・福岡市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群についてのもので，『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第13集として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが，本報告書が文化財保護の一助となり，学術・研究にも活用いただければ，望外の喜びとするものであります。

なお，調査に対して御協力いただいた調査員，地元の方々をはじめ関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊することができましたことを，心から感謝申し上げます。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　浦　山　太　郎

# 例　　言

1. 本書は，昭和47年5月29日から昭和52年6月15日までに福岡県教育委員会が，日本国有鉄道下関工事局から委託されて，山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した13冊目の報告書である。

2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ—1……井上裕弘
Ⅰ—2……小池史哲
Ⅱ……柳田康雄
Ⅲ……小池史哲
Ⅳ……松本勗・林弘也・井上裕弘
Ⅴ……井上裕弘・荒武麗子
Ⅵ……橘昌信
Ⅶ……櫻井康治・木下修
Ⅷ……井上裕弘
Ⅸ……井上裕弘・荒武麗子
Ⅹ……井上裕弘
Ⅺ……井上裕弘・荒武麗子
付　録……小池史哲

3. 久保遺跡出土の木材同定・執筆には九州大学農学部松本勗教授・林弘也助手，鳥ノ巣B地点遺跡の調査・執筆には別府大学橘昌信助教授の協力を得た。

4. 掲載の写真の撮影，実測図の作成および製図は，図版目次と挿図目次に示すとおりである。遺物写真撮影は九州歴史資料館石丸洋・岡紀久夫の協力を得た。巻頭図版は南西航空提供。

5. 本書の編集は，井上裕弘があたった。

# 本　文　目　次

Ⅰ　序　　文

1. 調 査 経 過 …… 1
2. 周辺遺跡の遺物 …… 5

Ⅱ　竹原八幡塚古墳の調査 …… 9

1. は じ め に …… 9
2. 古墳の位置と環境 …… 10
3. 古墳の調査と出土品 …… 11
4. お わ り に …… 19

Ⅲ　井手ノ元遺跡（第18―3地点）の調査 …… 21

1. は じ め に …… 21
2. 遺 構 と 遺 物 …… 23
3. お わ り に …… 23

Ⅳ　久保遺跡（第32―2地点）の調査 …… 25

1. は じ め に …… 25
2. 遺 構 と 遺 物 …… 26
3. お わ り に …… 28

Ⅴ　鳥ノ巣A地点遺跡（第34―1地点）の調査 …… 29

1. は じ め に …… 29
2. 遺 構 と 遺 物 …… 29
3. お わ り に …… 34

Ⅵ　鳥ノ巣B地点遺跡（第34―2地点）の調査 …… 35

1. は じ め に …… 35
2. 層　　序 …… 35
3. 遺　　物 …… 37
4. お わ り に …… 39

Ⅶ　立石遺跡（第35地点）の調査……41
1. はじめに……41
2. 遺構と遺物……44
3. おわりに……74

Ⅷ　立ノ口の石碑（第36地点）の調査……49
1. はじめに……49
2. 遺構の概要……49
3. おわりに……94

Ⅸ　井手ノ原A地点遺跡（第44地点）の調査……51
1. はじめに……51
2. 遺構と遺物……51
3. おわりに……57

Ⅹ　井手ノ原B地点遺跡（第52地点）の調査……59
1. はじめに……59
2. 遺構の概要……59
3. おわりに……62

Ⅺ　第34・53・54・54—1地点の調査……63
1. はじめに……63
2. 調査の概要……65
3. おわりに……66

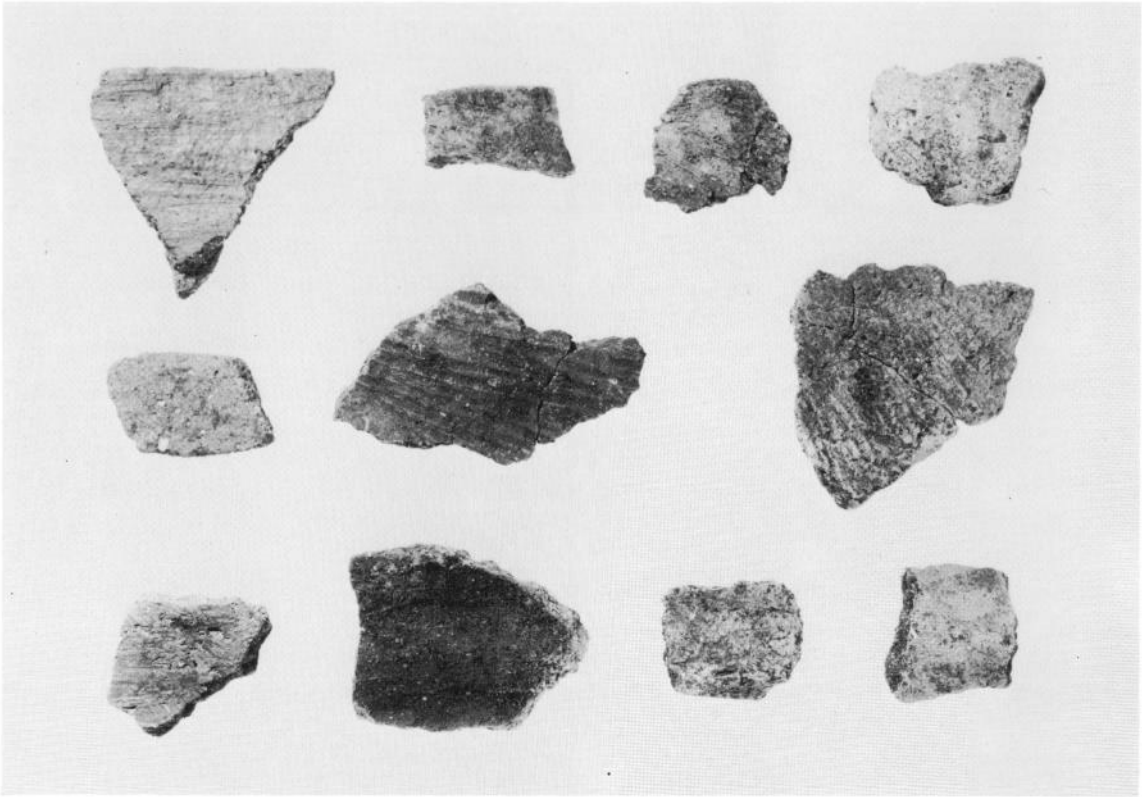
付　録　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告総索引……67

# Ⅰ　序　　文

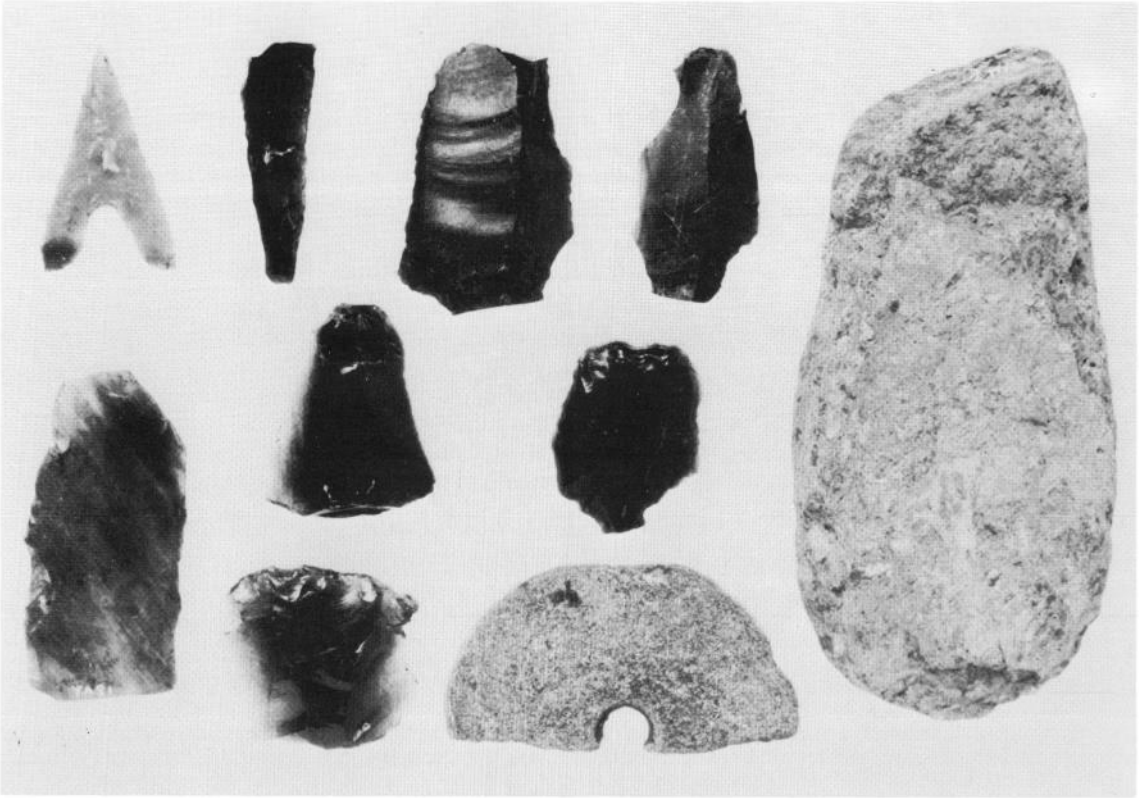
# 図　　版

1　発掘前の観音山山麓航空写真

2　発掘前の観音山山麓航空写真近景



1　藪ノ内遺跡出土の縄文土器



2　藪ノ内遺跡出土の石器

# 本　文　目　次

1.　調 査 の 経 過 …… 1
2.　周辺遺跡の遺物 …… 5

# 図　版　目　次

本文対照頁
図 版 1　(1)　発掘前の観音山山麓航空写真（井上裕弘撮影） …… 1
(2)　発掘前の観音山山麓航空写真近景（井上撮影） …… 1
2　(1)　藪ノ内遺跡出土の縄文土器（岡紀久夫撮影） …… 5
(2)　藪ノ内遺跡出土の石器（岡撮影） …… 6

# 挿　図　目　次

第 1 図　山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置（佐々木隆彦作成） …… 4
第 2 図　山陽新幹線関係主要遺跡と調査地点分布図（井上裕弘作成） ……折込み
第 3 図　山陽新幹線博多総合車輛基地付近地形図及び遺跡分布図
（日本国有鉄道原図　木下作成） ……折込み
第 4 図　籔ノ内遺跡出土土器拓影（小池史哲拓影） …… 5
第 5 図　籔ノ内遺跡出土石器実測図（小池実測，製図） …… 6

# 表　目　次

表　1　山陽新幹線関係遺跡一覧表…（井上裕弘作成）……折込
表　2　籔ノ内遺跡出土石器一覧表…（小池史哲作成）……7

# I 序　　文

## 1. 調査の経過

本書は，山陽新幹線建設に伴う事前調査として実施された鞍手郡若宮町・福岡市・筑紫郡那珂川町に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。

各遺跡の所在地・調査期間は下記の通りである。なお，鳥ノ巣B地点遺跡（第43―2地点）は別府大学考古学研究室に委託し，調査していただいた。

第34地点の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字坂口

調査期間　昭和47年5月29・30日

第54地点の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

調査期間　昭和47年5月31日～6月2日，6月24・27日

第53地点の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

調査期間　昭和47年6月2日～6月10日，8月12日～8月16日

鳥ノ巣A地点遺跡（第34―1地点）調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

調査期間　昭和47年6月14日～6月26日，8月15日～8月17日

竹原八幡塚古墳（第6―3地点）の調査

所 在 地　福岡県鞍手郡若宮町大字竹原

調査期間　昭和47年9月11日～9月20日，昭和51年3月7日～3月20日

井手ノ原B地点遺跡（第52地点）の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原

調査期間　昭和47年9月18日～9月29日

井手ノ原A地点遺跡（第44地点）の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原

調査期間　昭和47年9月26日～10月13日

立石遺跡（第35地点）の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字立石

調査期間　昭和48年1月16日～2月10日

立ノ口の石碑（第36地点）の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字立ノ口

調査期間　昭和48年8月14日

鳥ノ巣B地点遺跡（第43―2地点）の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

調査期間　昭和49年2月17日～3月18日

第54―1地点の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

調査期間　昭和49年3月27・28日

久保遺跡（第32―2地点）の調査

所 在 地　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字久保・浦田

調査期間　昭和51年3月1日～3月26日

井手ノ元遺跡（第18―3地点）の調査

所 在 地　福岡県福岡市南区大字上曰佐字井手ノ元

調査期間　昭和52年6月1日～6月15日

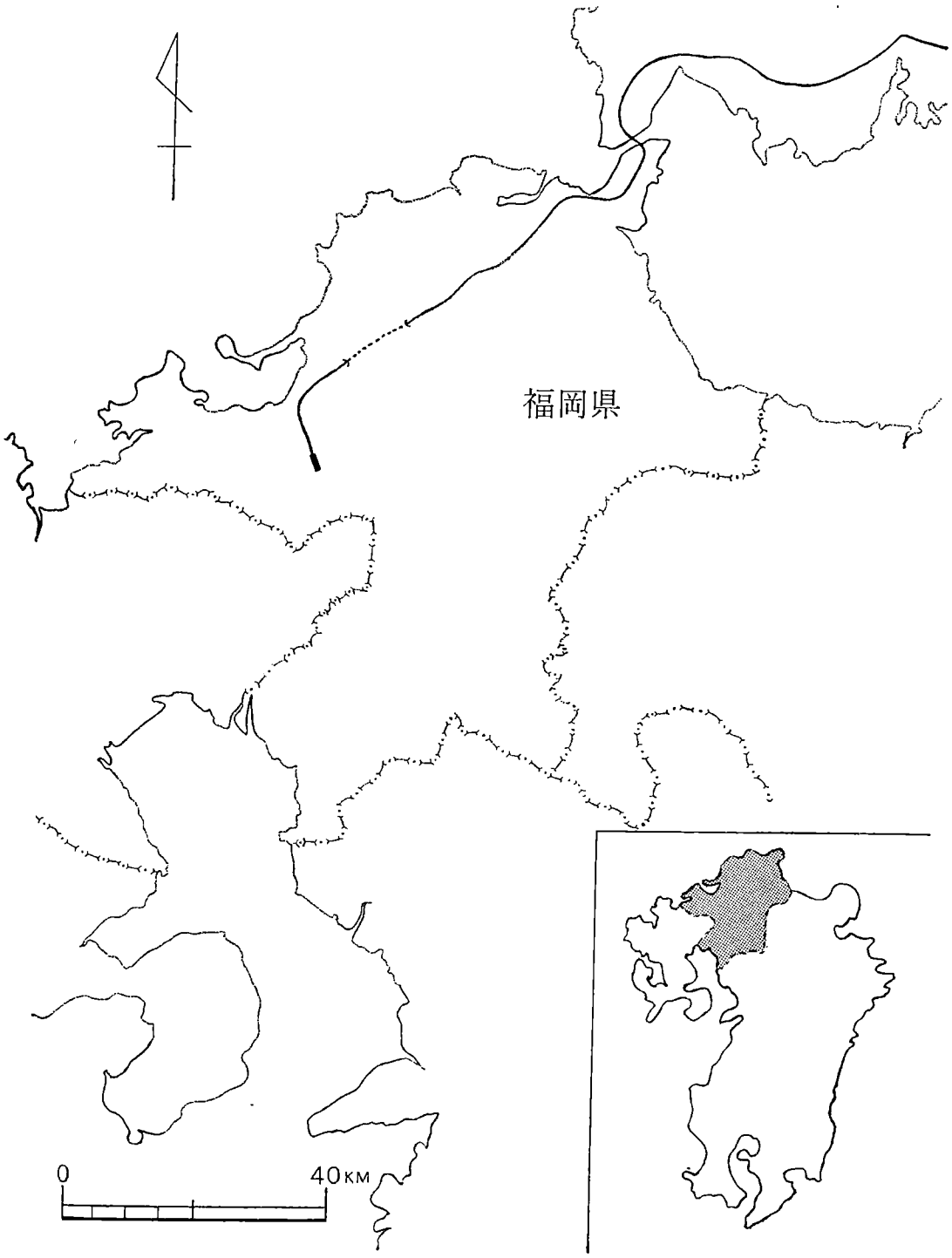
調査関係者は次の通りである。

福岡県教育委員会

| | | | |
|---|---|---|---|
| 総　括 | 教育長 | 森田　實 | （昭和47～52年度） |
| | 教育長 | 浦山太郎 | （昭和52・53年度） |
| | 教育次長 | 西村太郎 | （昭和47～52年度） |
| | 教育次長 | 岩下光弘 | （昭和53年度） |
| | 文化課課長 | 古川善久 | （昭和47年度） |
| | 文化課課長 | 森　英俊 | （昭和48年度） |
| | 文化課課長 | 藤井　功 | （昭和49～53年度） |
| | 文化課課長補佐 | 菅　隆 | （昭和47・48年度） |
| | 文化課課長補佐 | 今井岩男 | （昭和48年度） |
| | 文化課課長補佐 | 平井元治 | （昭和49年度） |
| | 文化課課長補佐 | 野上　保 | （昭和50年度） |
| | 文化課課長補佐 | 川崎隆夫 | （昭和50・51年度） |
| | 文化課課長補佐 | 武久耕作 | （昭和51～53年度） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 文化課課長補佐 | 松岡　史 | (昭和53年度) |
| 庶　務 | 庶務係長 | 姫野　博 | (昭和47年度) |
| | 庶務係長 | 前田栄一 | (昭和47～50年度) |
| | 庶務係長 | 大渕幸夫 | (昭和52・53年度) |
| | 主事 | 小川浩一郎 | (昭和47年度) |
| | 主事 | 植田　實 | (昭和48年度) |
| | 主事 | 加藤俊一 | (昭和49年度) |
| | 主事 | 瀧　龍二 | (昭和50年度) |
| | 主事 | 山本文和 | (昭和51年度) |
| | 主任主事 | 大神　新 | (昭和52・53年度) |
| | 嘱託 | 吉村源七 | (昭和46～53年度) |
| 発掘調査 | 九州大学教授 | 松本　勗 | |
| | 九州大学助手 | 林　弘也 | |
| | 別府大学助教授 | 橘　昌信 | |
| | 文化課係長 | 松岡　史 | (昭和47～52年度) |
| | 文化課技術主査 | 靏久嗣郎 | (昭和46～49年度) |
| | 文化課調査第1係長 | 宮小路賀宏 | (昭和53年度) |
| | 文化課調査第2係長 | 栗原和彦 | (昭和53年度) |
| | 文化課主任技師 | 柳田康雄 | |
| | 文化課主任技師 | 井上裕弘 | |
| | 文化課技師 | 木下　修 | |
| | 文化課技師 | 小池史哲 | |
| | 文化課嘱託 | 岩瀬正信 | |
| | 文化課嘱託 | 宮崎貴夫 | |
| | 調査員 | 櫻井康治 | |

以上の方々の他にも，日本国有鉄道下関工事事務所，同南福岡工事事務所，地元那珂川町，春日市在住各位の協力を得たことを記し，感謝の意を表したい。なお，国鉄関係者は「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第1・2・7・12集に示す通りである。　(井上)

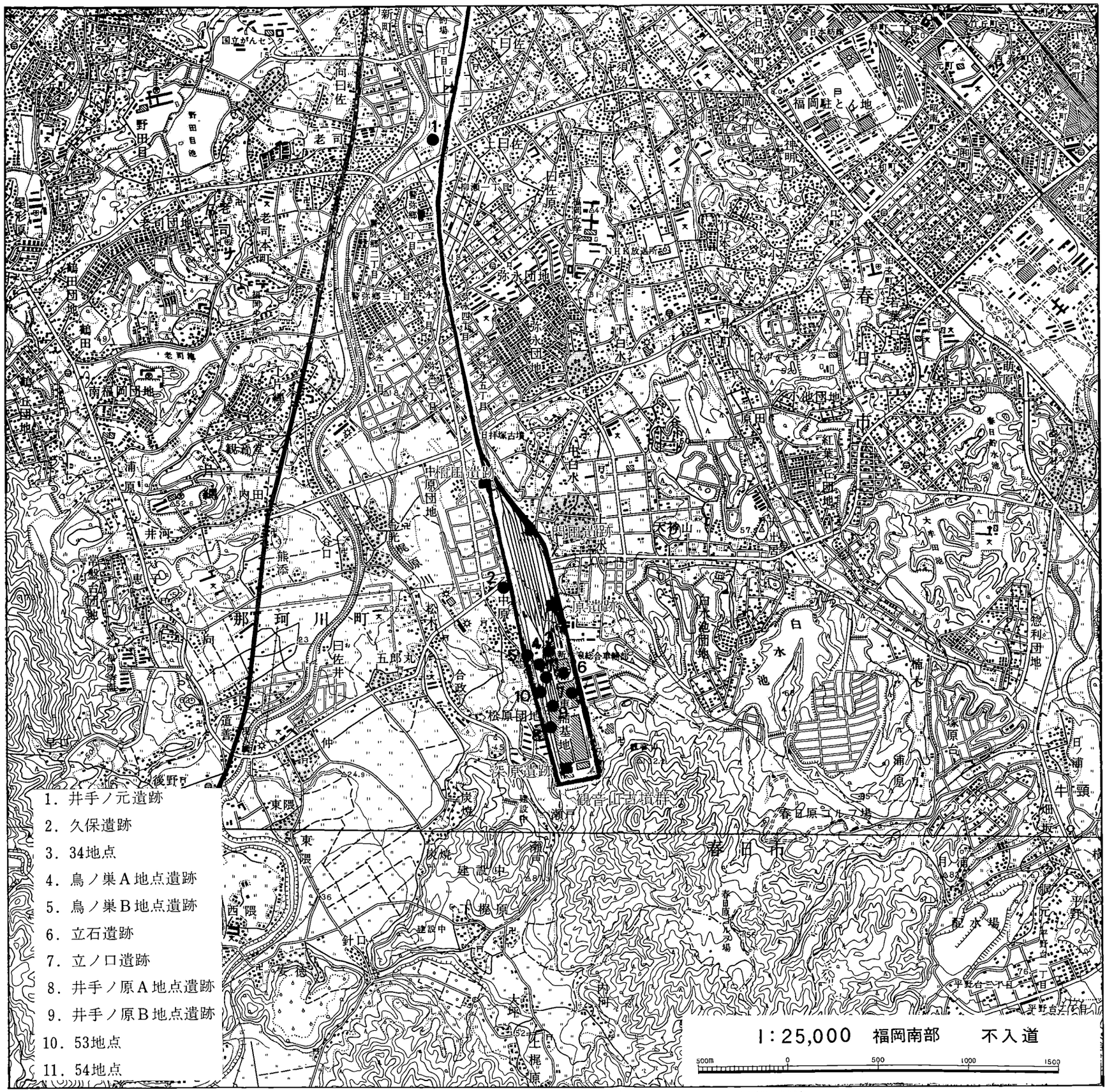



第 1 図　山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置 (1/1,000,000)

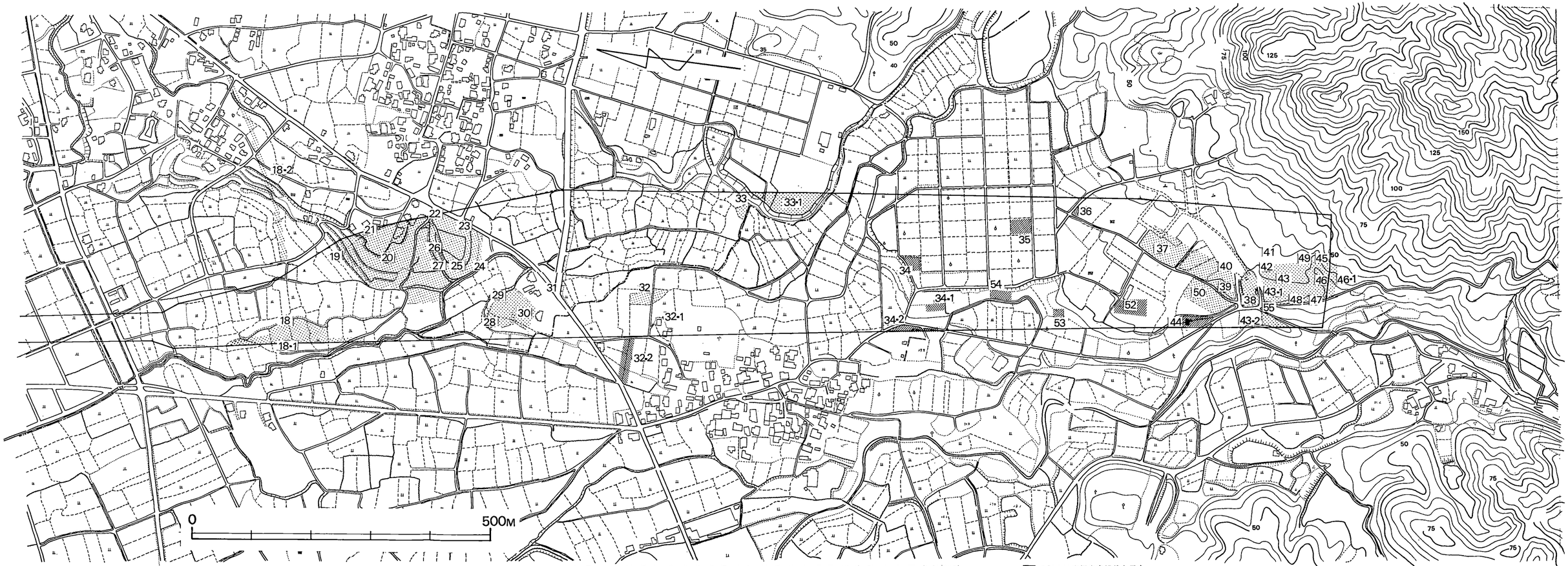
## 表 1　山陽新幹線関係遺跡一覧表

| 地点番号 | 遺跡名 | 所在地 | 内容 | 調査終了面積 | | | | | | | | 備考 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 46年度 | 47年度 | 48年度 | 49年度 | 50年度 | 51年度 | 52年度 | 53年度 | | |
| 3 | 小田山墓地 | 鞍手郡鞍手町中山 | 近世墓地 | m² | −m² | m² | m² | m² | m² | m² | m² | | 1集 |
| 4 | 下松尾墓地 | 〃　〃　〃 | 近生墓地 | | − | | | | | | | | 〃 |
| 5 | 京尾遺跡 | 〃　〃　室木 | 中世配石遺構 | | − | | | | | | | | 〃 |
| 6 | 若宮条里 | 〃　若宮町 | 条里遺構 | | 229 | | | | | | | | 〃 |
| 6−0 | | 〃　〃　金丸 | 近世墓地 | | | − | | | | | | 調査前に工事のための改葬 | 〃 |
| 6−1 | 田尻遺跡 | 〃　〃　金丸・水原 | 古墳，歴史時代：住居跡 | | 2,035 | | 3,000 | | | | | | 〃 |
| 6−2 | 別当塚 | 〃　〃　竹原 | 古墳 | | 146 | | | | | | | 遺構，遺物なし | 〃 |
| **6−3** | **竹原八幡塚** | 〃　〃　〃 | 古墳 | | 16 | | | 300 | | | | | **13集** |
| 7 | 杉園遺跡 | 〃　〃　稲光 | 土師：散布地 | | | | | | | | | 遺構なし | 1集 |
| 8 | | 鞍屋郡久山町山田 | 条里遺構 | | 100 | | | | | | | 調査の結果，条里ではなかった | 〃 |
| 18 | 柏田遺跡 | 春日市上白水 | 先土器〜歴史時代：住居跡8軒<br>円形遺構，溝状遺構 | | | 790 | | | | | | | 4集 |
| 18−1 | | | | | | | 2,100 | 1,000 | | | | 昭和49年度は，別府大学に一部調査委嘱 | 〃 |
| 18−2 | 辻田遺跡 | 〃　〃 | 弥生，古墳時代：住居跡，木器 | | | | | | | 2,375 | 1,882 | | **13集** |
| **18−3** | **井手ノ元遺跡** | 福岡市南区上曰佐 | | | | | | | | 720 | | | 〃 |
| 19〜27<br>及び周辺 | 門田遺跡 | 春日市上白水 | 先土器〜歴史時代：住居跡，貯蔵穴<br>甕棺墓，石棺墓，土墳墓，古墳5基 | | 予備調査<br>(4,500) | 7,170 | 9,700 | 4,570 | | | | 昭和48年度に門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱 | 1·3·6<br>7·9·11集 |
| 28〜31 | 下原遺跡 | 〃　〃 | 古墳時代：住居跡 | 2,784 | | | | | | | | | 3集 |
| 32 | 油田遺跡 | 筑紫郡那珂川町中原 | 古墳時代：散布地 | | 690 | | | | | | | | 〃 |
| 32−1 | 〃 | 〃　〃　〃 | 古墳時代：甕棺墓 | | | | 300 | | | | | | 〃 |
| **32−2** | **久保遺跡** | 〃　〃　〃 | 縄文，歴史時代：溝状遺構 | | | | | | 700 | | | | **13集** |
| 33 | | 春日市上白水 | 古墳時代：散布地 | | | 197 | | | | | | | 2集 |
| 33−1 | 原古墳群 | 〃　〃 | 円墳3基，周溝墓8基，土墳墓4墓 | | | 1,725 | 800 | 1,510 | | | | | 〃 |
| | 原遺跡 | | 縄文時代早期，弥生時代甕棺墓 | | | | | | | | | 一部保存 | 10集 |
| 34 | | 筑紫郡那珂川町中原 | 弥生時代：散布地 | | 135 | | | | | | | 遺構，遺物なし | **13集** |
| 34−1 | 鳥ノ巣 A | 〃　〃　〃 | 弥生時代：散布地<br>先土器，縄文時代：散布地 | | 267 | | | | | | | | 〃 |
| 34−2 | 鳥ノ巣 B | | | | | 288 | | | | | | 別府大学に調査委嘱 | 〃 |
| **35** | **立石遺跡** | 〃　〃　〃 | 中世：散布地 | | | 200 | | | | | | | 〃 |
| **36** | **立ノ口の石碑** | 〃　〃　〃 | 中世：道標（かんをん道） | | | − | | | | | | | 〃 |
| 37，39<br>50，55 | 井手ノ原遺跡 | 〃　〃　〃 | 中世：方形区画遺構，溝状遺構 | 1,814 | 1,515 | 1,500 | | | | | | | 2集 |
| 38，40〜43<br>45〜49<br>49−1−4,5) | 観音山古墳群<br>中原支群 | 〃　〃　〃 | 古墳31基 | 707 | 6,400 | 220 | | | | | | | 5集 |
| 43−1 | 深原遺跡 | 〃　〃　〃 | 縄文時代：石組炉跡32基，円形竪穴<br>遺構 | | 1,840 | 2,540 | | | | | | 昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱 | 8集 |
| 43−2 | | | | | | 104 | | | | | | | |
| 46−1 | | | | | | | | | 1,021 | | | | |
| **44** | **井手ノ原 A** | 〃　〃　〃 | 中世：散布地 | | 271 | | | | | | | | **13集** |
| **52** | **井手ノ原 B** | 〃　〃　〃 | 中世：散布地 | | 452 | | | | | | | | 〃 |
| **53** | | 〃　〃　〃 | 古墳時代：散布地 | | 123 | | | | | | | 遺構なし | 〃 |
| **54** | | 〃　〃　〃 | 弥生，古墳時代：散布地 | | 150 | | | | | | | | 〃 |
| **54−1** | | 〃　〃　〃 | 古墳時代：散布地 | | | 95 | | | | | | | 〃 |
| 合計 | | | | 5,305 | 14,369 | 14,829 | 15,900 | 7,380 | 1,721 | 3,095 | 1,882 | | |

註 1.　地点番号1，2は北九州市教育委員会，9〜17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
2.　路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は上表に含めてある。
3.　面積欄に（−）で示したものは調査面積としてはあげないが当該年度に調査したことを示す。




第 2 図　山陽新幹線関係主要遺跡と調査地点分布図 (1/25,000)




第 3 図　山陽新幹線博多車輛基地付近地形図及び遺跡分布図 (1/5,000)

▨ の部分は本報告書掲載を示す

# 2. 周辺遺跡の遺物

## 籔ノ内遺跡出土の遺物

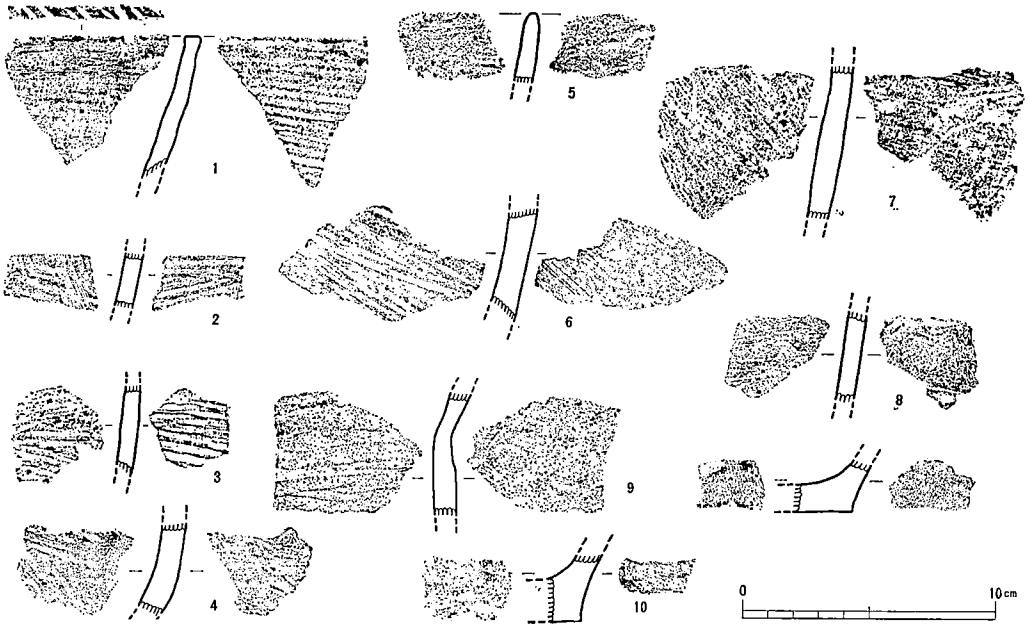
籔ノ内遺跡は，筑紫郡那珂川町大字今光字籔ノ内に位置する。

ここに招介する遺物は，昭和49年末に新幹線博多車輛基地より続く下水道施設工事に伴って試掘調査した際に発見された遺物である。位置は筑紫郡那珂川町大字今光字籔ノ内から，字地余に至る地区で，車輛基地の北西方にあたる。

**土 器**（図版2—1，第4図）

縄文時代に属する土器片，磁器片・陶器片などが出土したが，磁器・陶器片は細片で図示できるような資料ではなく，縄文土器片も細片が多く11点のみ図示する。

1は，深鉢形土器の口縁部破片で，復原口径は38cmになる。粗製条痕文土器の範疇に入るが，胎土に砂粒を含みながらも精良でかつ焼成の良好な土器である。また口唇上面に斜行する刻み目を施し，外面ヘナタリ条痕文・内面アナダラ条痕文が施される。2は，アナダラ条痕文を内外面共に使用し，更に外面の一部にヘナタリ条痕文が付け加えられる。細砂粒を含むが焼




**第 4 図** 籔ノ内遺跡出土土器拓影（1/3）

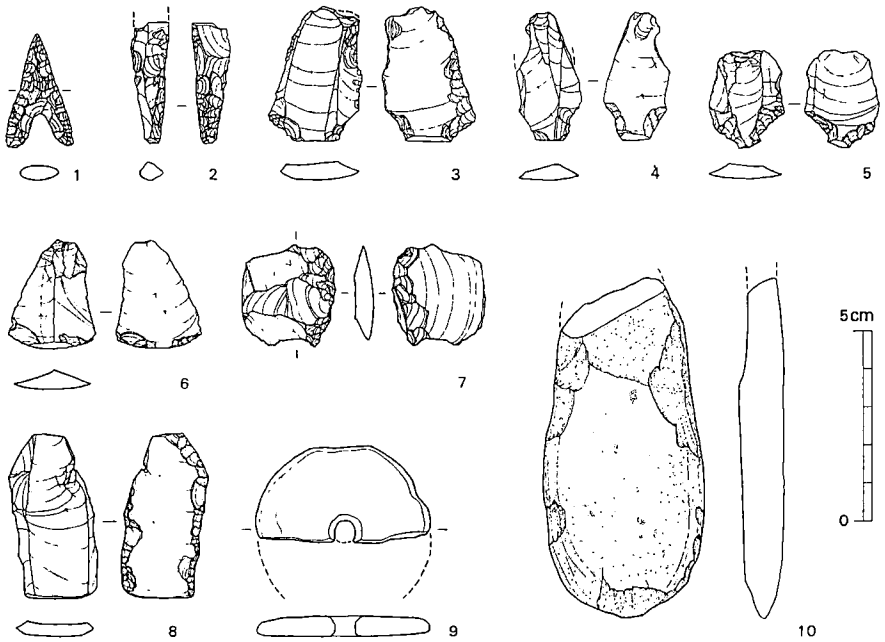
成良好。3～6は，アナダラ条痕文が施文されるが，3の内側は特に顕著である。7・8は細かな条痕文が施文されており，ヘナタリ条痕文・アナダラ条痕文のいずれでもない別の原体だろう。8は条痕文というよりむしろヘラ先の研磨に近い例で，胎土・焼成とも良好。7は焼成がやや粗悪。9は胎土に砂粒を多く含み焼成は普通，外面に指によるナデの痕が残る。10・11は，底部破片で，平底を呈す。粗製深鉢形土器の底部であろう。

これらの土器片は隣接する柏田遺跡出土の土器と似ており，柏田遺跡の溝状遺構等の土器文様分類の6d・7a・7b・8類に相当する。柏田遺跡では，縄文時代後期中葉頃を考えている（註1）。

**石　器**（図版2—2，第5図）

統計35点が出土した。内訳は表　に示す如く石鏃4点・石錐1点・つまみ形石器6点・石刃状剝片15点・削器1点・石核4点・紡錘車1点・石斧3点で，このうち石刃状剝片のなかには掻器・削器・台形状石器等に利用したものも含まれている。これらの石器は，紡錘車を除いておおむね縄文時代に属する石器で，出土土器が縄文時代後期に属することと符合する。また石器の種類も柏田遺跡の例と相似しており，立地が小河川の対岸に位置するため単に同一遺跡とする訳にはいかないにせよ，柏田遺跡と同様の性格を有していると云えよう。このため各石器は柏田遺跡の報告での分類基準をもって分類した。　（小池）

註1　小池史哲編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」4　福岡県教育委員会　1977




第5図　籔ノ内遺跡出土石器実測図（1/2）

表 2　鏃ノ内遺跡出土石器一覧表　（単位 mm. g）

| 種類 | 石質 | 最大長 | 最大幅 | 厚さ | 重量 | 備考 | 実測図No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 石鏃 | 黒曜石 | (13.7) | (11.5) | 3.0 | (0.3) | 基部片　C型　3　類 | 1 |
| | 黒曜石 | (17.1) | (12.8) | 3.2 | (0.5) | ほぼ完　C型　1 a類 | |
| | チャート | 30.0 | 17.6 | 4.0 | 1.3 | 完　形　C型　1 a類 | |
| | 黒曜石 | (12.8) | (12.8) | 3.5 | (1.8) | 基部片　C′型　2 b類 | |
| 石錐 | 黒曜石 | (31.9) | 10.0 | 5.0 | (1.4) | 基部欠 | 2 |
| つまみ形石器 | 黒曜石 | 35.5 | 24.5 | 5.0 | (5.0) | ↓ | 3 |
| | 黒曜石 | 33.7 | 17.0 | 4.2 | (2.4) | ↓ | 4 |
| | 黒曜石 | 26.6 | 19.8 | 4.1 | 2.3 | ↓ | 5 |
| | 黒曜石 | 28.5 | 22.7 | 5.1 | 2.7 | ↓ | 6 |
| | 黒曜石 | 18.0 | 22.2 | 5.3 | 1.8 | ↑ | |
| | 黒曜石 | 21.1 | 17.8 | 4.8 | 1.9 | ↓ | |
| 石刃状剝片 | 黒曜石 | (36.0) | 13.1 | 3.9 | (1.7) | ほぼ完 | 7 |
| | 黒曜石 | (28.5) | 21.2 | 4.8 | (2.8) | 1/2　↓ | |
| | 黒曜石 | (28.2) | (10.5) | 5.0 | (2.5) | 1/2 | |
| | 黒曜石 | (44.1) | (14.0) | 11.3 | (5.55) | 先端・基部欠 | |
| | 黒曜石 | (24.5) | 25.2 | 5.0 | (2.9) | 1/2 | |
| | 黒曜石 | (24.8) | 14.2 | 5.3 | (2.2) | 1/2 | |
| | 黒曜石 | (27.2) | 16.5 | 5.0 | (2.05) | 1/2 | |
| | 黒曜石 | 31.4 | 14.0 | 4.1 | 2.15 | 完　形　掻器 | |
| | 黒曜石 | (33.5) | 16.0 | 4.2 | (2.35) | ほぼ完 | |
| | 黒曜石 | (29.0) | 18.6 | 6.0 | (3.55) | 1/2　削器 | |
| | 黒曜石 | 24.2 | 26.7 | 5.2 | 3.75 | 完　形？　台形状石器？ | |
| | 黒曜石 | (18.0) | 14.1 | 2.3 | (0.8) | 先端・基部欠 | |
| | 黒曜石 | (20.0) | 15.0 | 4.7 | (1.5) | 1/2 | |
| | 黒曜石 | (27.5) | 12.5 | 4.4 | (1.25) | 先端欠 | |
| | 黒曜石 | (13.4) | 16.7 | 3.1 | (0.8) | 基部片 | |
| 削器 | 黒曜石 | 43.0 | 23.0 | 4.3 | 5.2 | 完　形 | 8 |
| 石核 | 黒曜石 | 34.0 | 22.5 | 16.5 | 13.95 | 残　核 | |
| | 黒曜石 | 17.5 | 20.0 | 10.5 | 2.8 | 残　核 | |
| | 黒曜石 | 92.2 | 61.7 | 37.0 | 151.0 | 不定形 | |
| | 黒曜石 | 28.8 | 25.5 | 19.9 | 17.9 | 残　核 | |
| 紡錘車 | 角閃片岩 | 45.5 | (25.5) | 5.6 | (10.8) | 1/2 | 9 |
| 石斧 | 緑泥片岩 | (60.0) | (46.0) | 7.9 | (28.3) | 基部片　扁平打製 | 10 |
| | 蛇紋岩 | (88.5) | 42.1 | 11.8 | (74.2) | ほぼ完　半磨製石斧2類 | |
| | 粘板岩 | (78.0) | 51.0 | 7.0 | (38.8) | 基部片　砥石転用？ | |

# Ⅱ　竹原八幡塚古墳の調査

鞍手郡若宮町大字竹原字塚ノ元

# 本　文　目　次

1. はじめに …… 9
2. 古墳の位置と環境 …… 10
3. 古墳の調査と出土品 …… 11
(1) 墳丘と周溝 …… 11
(2) 石室 …… 14
(3) 出土遺物 …… 16
4. おわりに …… 19

# 図　版　目　次

本文対照頁
図版 1 (1) 竹原丘陵と八幡塚古墳　西上空から（柳田康雄撮影） …… 10
(2) 山口川（右）と黒丸川（左）と竹原古墳
八幡塚古墳　南上空から（柳田撮影） …… 10
2 (1) 竹原古墳と八幡塚古墳　東上空から（柳田撮影） …… 10
(2) 竹原八幡塚古墳　西上空から（柳田撮影） …… 11
3 (1) 竹原八幡塚古墳　北上空から（柳田撮影） …… 11
(2) 竹原八幡塚古墳　西上空から（柳田撮影） …… 11
4 (1) 伐採前の竹原八幡塚古墳　昭和47年　南西から（靏久嗣郎撮影） …… 11
(2) 竹原八幡塚古墳の近景　西から（柳田撮影） …… 11
5 (1) 竹原八幡塚古墳の近景　北西から（柳田撮影） …… 11
(2) 竹原八幡塚古墳の近景　東から（柳田撮影） …… 11
6 (1) 墳丘1段目の現状　東から（柳田撮影） …… 13
(2) 墳丘1段目の現状　北西から（柳田撮影） …… 13
7 (1) 墳丘南裾トレンチ（靏久撮影） …… 13
(2) 墳丘南裾葺石と周溝内転落石（靏久撮影） …… 13
8 (1) 石室前景と盗掘坑（柳田撮影） …… 14

(2) 近年の盗掘坑（柳田撮影）……14
9 (1) 石室全景（柳田撮影）……14
(2) 石室奥壁（柳田撮影）……14
10 (1) 奥壁と左側壁（柳田撮影）……14
(2) 石室の右側壁（柳田撮影）……14
11 (1) 石室側壁の控積と墳丘土層（柳田撮影）……14
(2) 奥壁と側壁の控積（柳田撮影）……15
12 (1) 石室内から見た横口（柳田撮影）……15
(2) 墓道から見た横口（柳田撮影）……15
13 (1) 石室床面と鉄器出土状態（柳田撮影）……16
(2) 左側壁の腰石と詰込玉砂利（柳田撮影）……16
14 (1) 横口石材と右側壁（柳田撮影）……16
(2) 墓道右側壁（柳田撮影）……16
15 (1) 横口構造と墓道（柳田撮影）……16
(2) 左側壁腰石と封じ込まれた短剣（柳田撮影）……16

# 挿　図　目　次

第 1 図　竹原八幡塚古墳付近遺跡分布図（柳田康雄作成）……折込み
第 2 図　竹原八幡塚古墳墳丘実測図（柳田・丸山康晴実測，児玉真一製図）……12
第 3 図　墳丘南裾トレンチ実測図（靏久実測，柳田製図）……13
第 4 図　竹原八幡塚古墳墳丘断面図（靏久嗣郎・柳田実測，柳田製図）……13
第 5 図　竹原八幡塚古墳石室実測図
（柳田・井上裕弘・木下修・川述昭人実測，柳田製図）……折込み
第 6 図　石室床面実測図（井上・木下実測，柳田製図）……折込み
第 7 図　石室右側壁の控え積石と墳丘土層図（丸山実測，柳田製図）……15
第 8 図　墓道横断面土層図（丸山実測，柳田製図）……15
第 9 図　鉄剣・鉄刀実測図（柳田実測，製図）……17
第 10 図　鉄鏃実測図（柳田実測，製図）……18
第 11 図　馬具実測図 1（柳田実測，製図）……18
第 12 図　馬具実測図 2（柳田実測，製図）……19

# Ⅱ　竹原八幡塚古墳の調査

## 1. はじめに

八幡塚古墳の調査の発端は，山陽新幹線が古墳の南側をかすめる設計となっていたことにある。八幡塚古墳の南側を通る山陽新幹線の本線は，昭和45年に国鉄から路線が当教育委員会に提示された時には墳丘から外れていたものの，本線の両側には側道が付設され，その側道も幅が広くなり，墳丘を大きく削平する設計となっていた。古墳は舌状台地の尾根線上にあり，路線も丘陵を横断して古墳側には大きな比高差が生じて，その分だけ古墳のある北側を削平するかっこうになる。当教育委員会は八幡塚古墳が国指定史跡である装飾古墳として有名な竹原古墳の東方約 300$m$のところにあり，これより古くて当地域では有数の重要古墳であるとして，古墳保存のための設計変更を国鉄に要望した。数回の協議の結果，本線の変更はできないが，側道の設計変更をすることで被害を最小限度にとどめることになった。すなわち，古墳立地の基盤である丘陵頂部を削平せずに側道面の高さを古墳裾面と同一にし，削平によって生じるのり面をなくして，側道敷を現古墳裾線までにするというものである。八幡塚古墳の現況を見ると，南北側に一部周溝の存在を思わせるものがあるところから，周溝を含めた保存を主張したが，昭和47年の予備調査で周溝が顕著に確認できなかったこともあって，周溝を含めた保存を断念せざるをえなかった。

昭和47年9月11日から9月20日まで，古墳の略測とトレンチによる予備調査を行なった。八幡塚古墳の墳丘の規模確認を目的としたものであったが，南側の墳丘裾線の列石と葺石・埴輪の存在を確認したが，確実な墳丘の規模の確認をできずに調査を終った。

その後，この予備調査の結果をもとに側道工事前に古墳裾線と周溝の本調査を実施することで予算も計上されていたが，工事事務所の一方的な判断で，当方に連絡のないまま工事が完了してしまった。工事が完了した上は，とやかく言ってもいたしかたないので，とにかく墳丘の本測量をやることにして，地元と折衝をしていると近年にも古墳の墳頂が掘られて大石が露出したということで，中をのぞいた人もあるということであった。したがって，協議の結果石室内を清掃してみることになったのである。

調査は，昭和51年3月7日から，まず，墳丘の伐採と清掃をし，写真撮影のあと墳丘測量を3月9日から行なった。

石室の発掘調査は，3月11日から3月20日まで実施したが，石室内は完全に盗掘され，鉄短

剣1本と鉄片が少量残っていただけであった。しかし，調査の結果当地域では最も古い横口式石室墳であることが判明した。

調査関係者は次のとおり。

第1次調査

福岡県教育委員会

| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 小川浩一郎 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技術主査 | 靏久嗣郎 |
| | 調査補助員 | 有吉朋行 |
| | 同 | 内山和則 |
| | 同 | 和田むつみ |

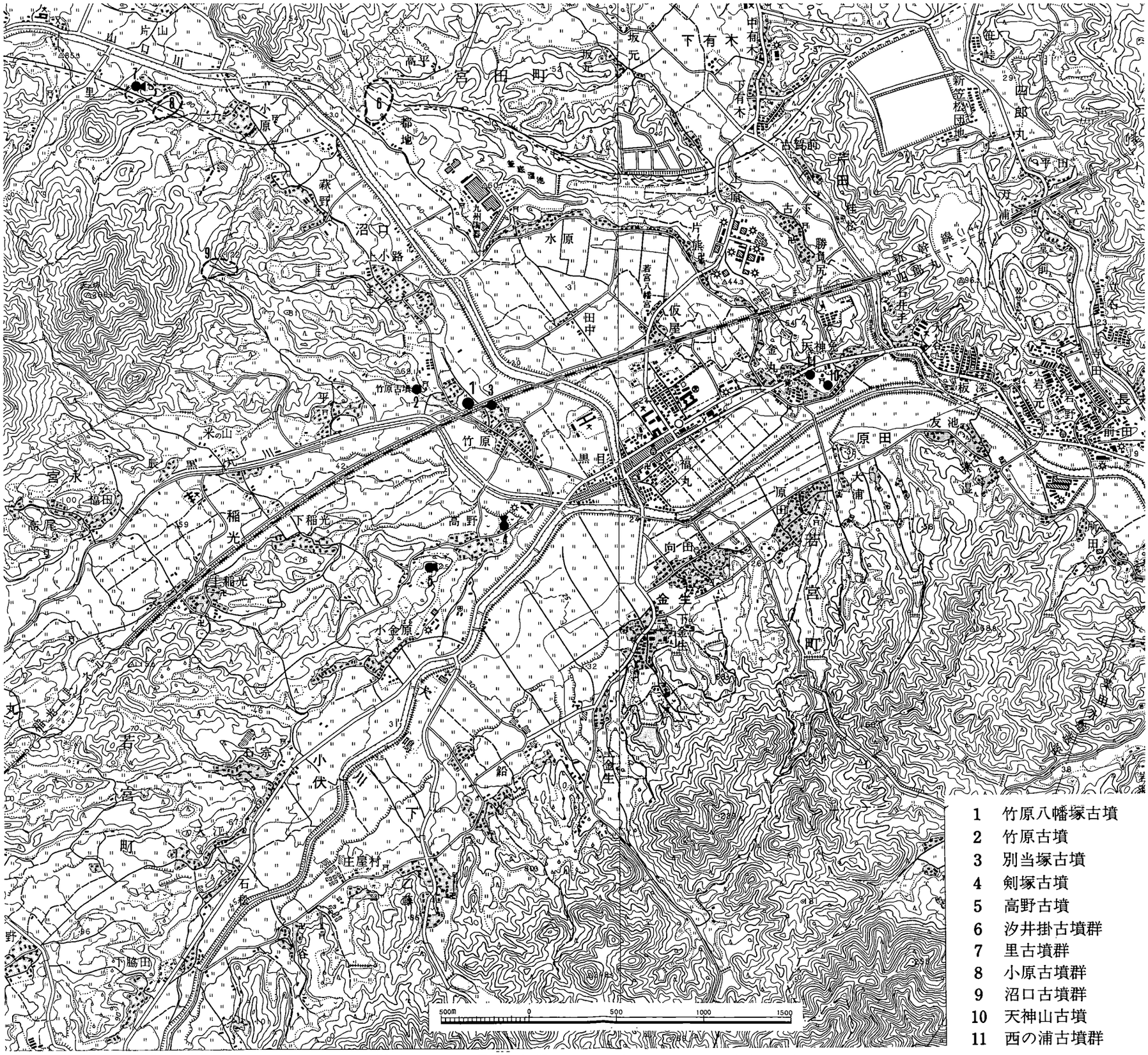
第2次調査

福岡県教育委員会

| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 瀧　龍二 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 主任技師 | 柳田康雄 |
| | 同 | 井上裕弘 |
| | 技　師 | 木下　修 |
| | 同 | 川述昭人 |
| | 調査補助員 | 丸山康晴 |

## 2. 古墳の位置と環境

八幡塚古墳は，福岡県鞍手郡若宮町大字竹原字塚ノ元に所在し，墳頂には祠があり，通称八幡塚という。したがって，本古墳を今後他の類似する名称と区別するために大字の竹原を冠して竹原八幡塚古墳としたい。古墳は山口川と犬鳴川の支流である黒丸川に挾まれて，犬鳴川との合流点に向って細長く突出した丘陵尾根線の標高39$m$の地点にある。山口川と黒丸川によって形成された現水田面は標高25$m$～35$m$であるから，比高差5～6$m$の低平な丘陵上に位置し，丘陵の先端には現集落の下に弥生から古墳時代の集落があり，低丘陵の基部には竹原古墳がある。この竹原丘陵の南側には，黒丸川と本流の犬鳴川に挾まれた細長い丘陵の先端には古式の前方後円墳である剣塚古墳があり，さらに奥の標高約70$m$の丘陵の尾根線上には帆立貝式の高野




**第 1 図**　竹原八幡塚古墳付近遺跡分布図(1/25,000)

1号墳を含む古墳群がある。このように，山口川と犬鳴川に挟まれた地域はこの地方の古墳文化の1つの中心的位置を占めており，八幡塚古墳はその重要遺跡の1つである。

## 3. 古墳の調査と出土品

昭和47年の予備調査は，新幹線が通る墳丘の南側に周溝確認のトレンチを1本しか設定できなかったので，工事前の本調査に期待したのであるが，前述のとおり工事が先行して破壊され，周溝があるのは分りながらその規模を本調査によって明らかにすることができなかった。

### (1) 墳丘と周溝（図版4～7，第2～4図）

竹原八幡塚古墳の外観である墳丘と周溝は，古墳の現況と予備調査のトレンチ1本から判断しなければならない。

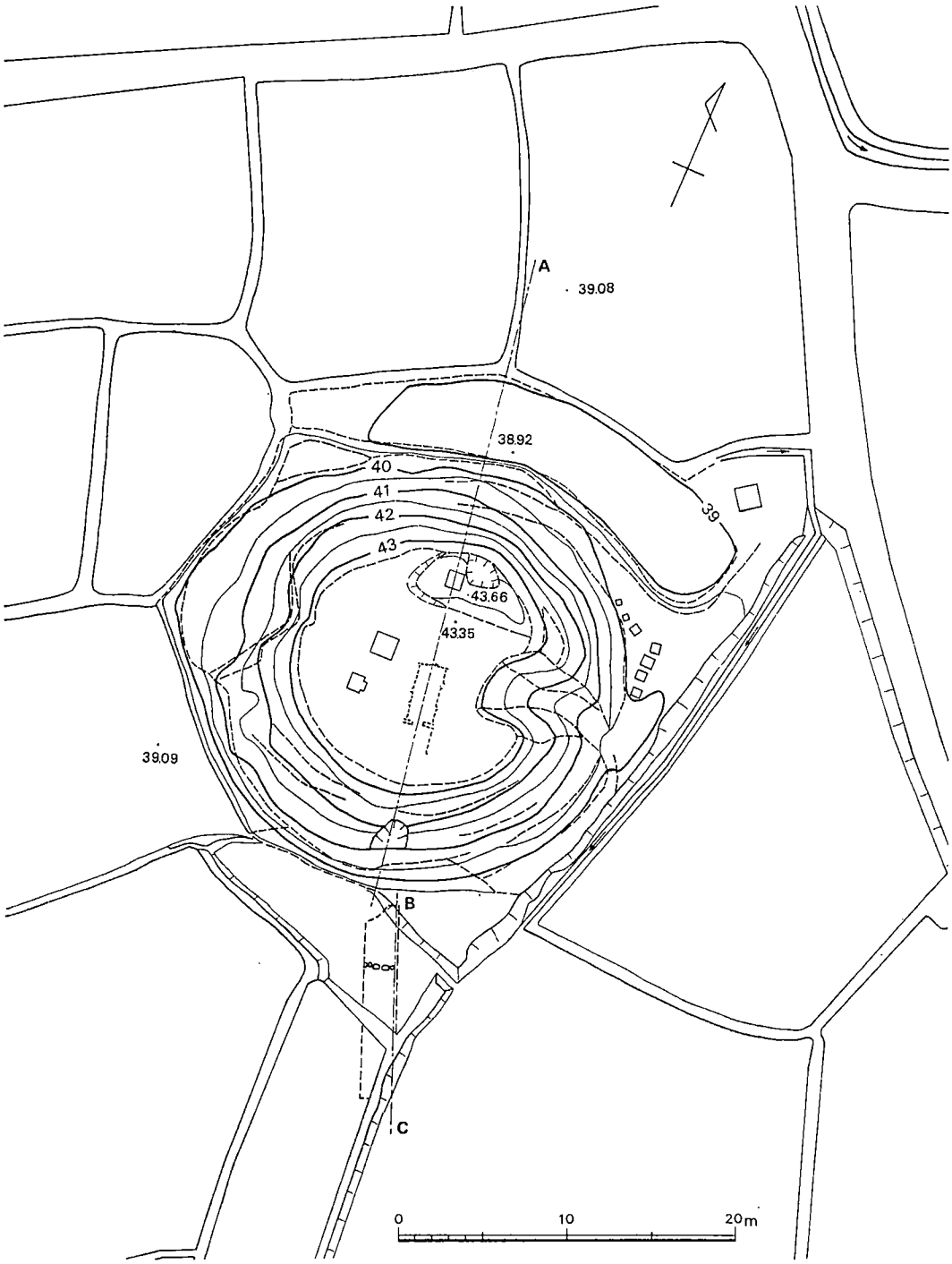
まず，古墳の現況を見ると墳丘は東西の最大径で27$m$，南北径26$m$，高さは北側で 4.6$m$の規模である。さらに，北側の墳丘裾には弧状の低地があり，周溝のなごりと思われるものがある。南側にもそれらしいものがあり，予備調査ではここにトレンチが設定された。

墳丘は著しく荒らされており，頂部も削平されて祠が安置され，石室の天井石も一部露出していた。墳丘の東側には祠に参拝するための登り道が大きく刻まれ，最も大きな墳丘の破壊となっている。こういう墳丘の現状の中で北側と南東側の一部に墳丘の原形をとどめているところがわずかにある。第4図の現況の墳丘断面図を見ると北側に2段築成の状況がうかがえる。南東側墳丘を見てもこれは明らかである。

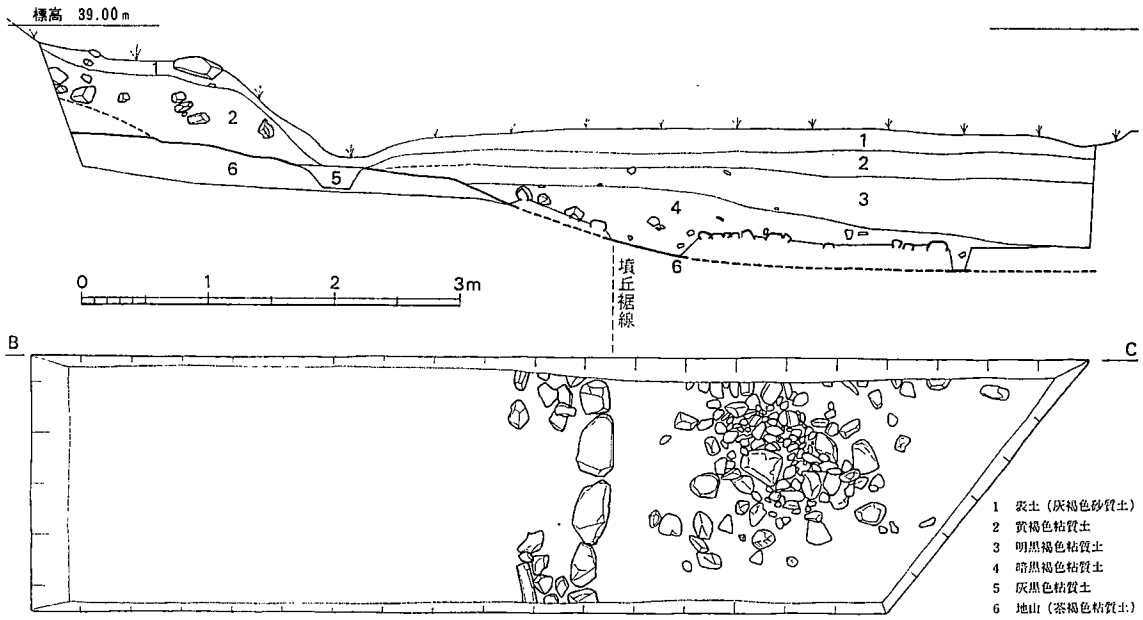
ここで問題になるのは予備調査のトレンチの状況である。このトレンチの成果は，墳丘裾線の列石とこれに続く葺石の確認，さらに周溝と思われる中に転落していた葺石の石材と埴輪片の発見である。この墳丘裾の葺石列確認は，墳丘規模推定の唯一の資料となった。発見された葺石列の裾線は，現況の墳丘1段目の裾線から約4$m$のところにあり，第　図の断面土層図からも明らかなように，さらに地山整形のみの低平な基段ともいえる1段目が存在することがわかる。第3図の墳丘裾である地山（茶褐色粘質土層）の上層の黄褐色粘質土層には上半に葺石のものと思われる礫を含んでいるところから，墳丘築成後の堆積土であり，墳丘裾列石から少なくとも 3.6$m$は1段目の段築であったと思われる。すなわち，1段目は高さ 0.8$m$，下辺幅約3.6$m$，上辺幅約2.2$m$の地山整形の段築に葺石が施されていたが，現在完全に埋没しており，現状の墳丘の1段目は実は2段目であり，竹原八幡塚古墳は3段築成である。

次に問題になるのが周溝の規模である。第3図の土層図によると現地表下 0.9$m$で墳丘裾の

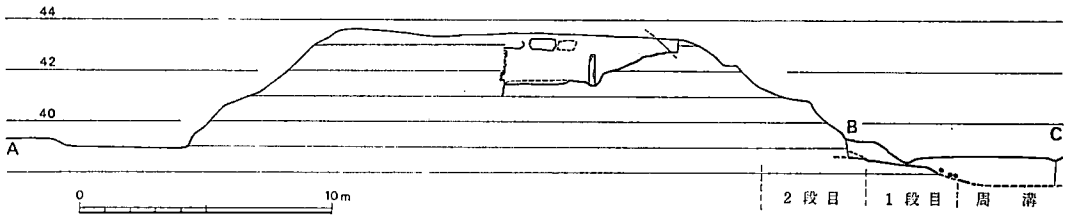
竹原八幡塚古墳




第 2 図　竹原八幡塚古墳墳丘実測図(1/400)




第 3 図　墳丘南裾トレンチ実測図 (1/60)




第 4 図　竹原八幡塚古墳墳丘断面図 (1/300)

地山に達し，最も深いところでは1.1$m$となっている。このトレンチはさらに3.5$m$南側に延ばされて周溝の縁を確認したとのことであるが，周溝の縁はつかめなかったという（註1）。しかし，丘陵の尾根上が古墳の築造後1$m$も土砂が堆積するとは考えられないので，幅2$m$のトレンチで確認できなかったとはいえ，少なくとも深さ1$m$で幅 3.5$m$以上の周溝が廻るのは確実といえるだろう。

以上のことから竹原八幡塚古墳の規模を総合してみると，(1)墳丘は直径約35$m$，高さ 6.5$m$以上の3段築成であること。(2)1段目と2段目には確実に葺石があること。(3)円筒埴輪があること。(4)深さ1$m$，幅 3.5$m$以上，あるいは7$m$幅の周溝を廻らすこと。ただし，円墳であるとは限らず，帆立貝式である可能性もある。さらに，当初墳丘の南北側にある低地を周溝のなごりであろうと推定したが，これはむしろ，1段目の段築がここまであったということで，墳丘の範囲を示すものであった。

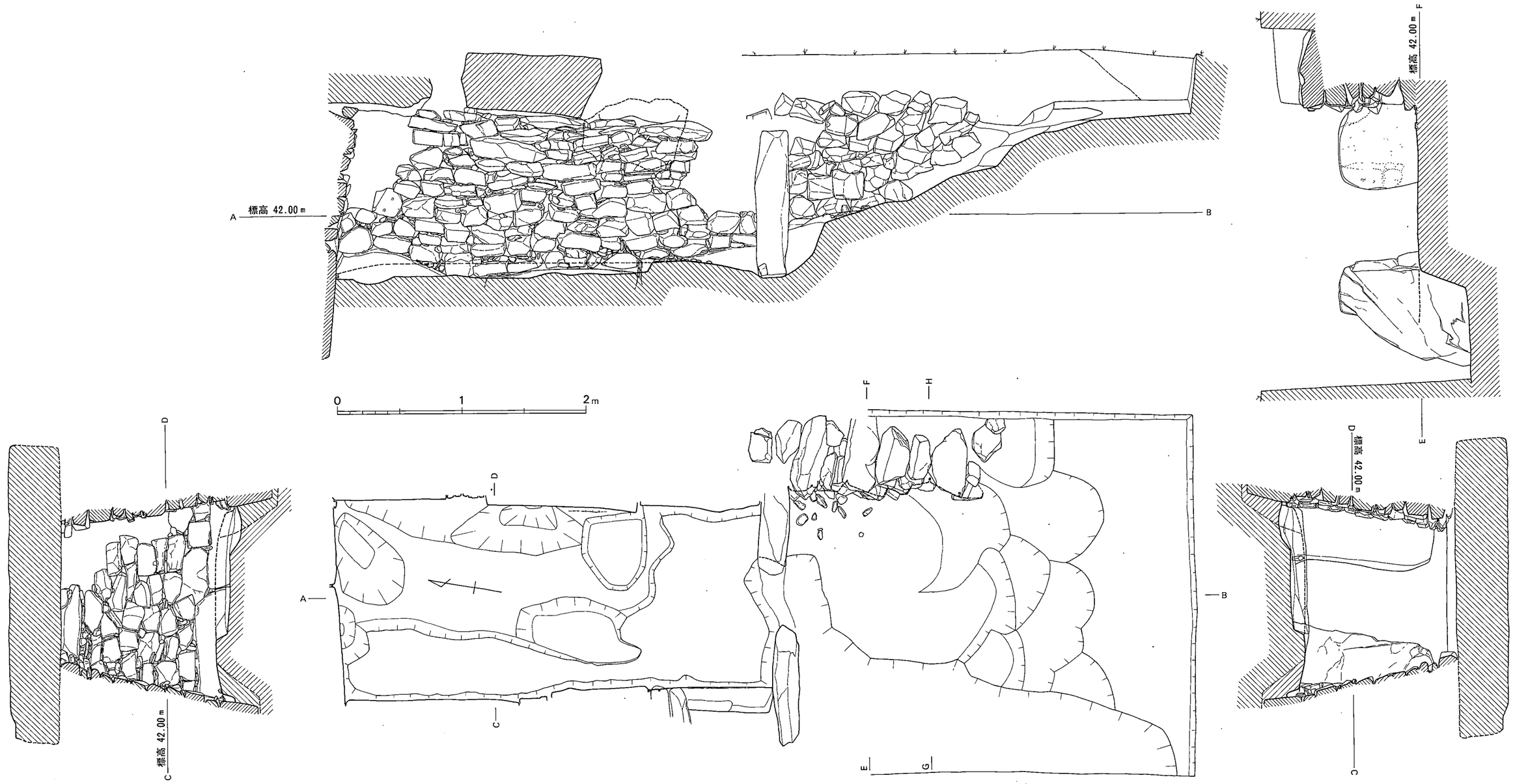
## (2) 石室（図版8～15，第5～8図）

石室はS－9.5°－Eに開口する竪穴系横口式石室である。少なくとも3度の盗掘を受けたらしく，最初は左前庭側壁を全部破壊しながら掘り進み左袖石を手前に倒して石室左側壁の半分近くを破壊している。この時1番目の天井石を除去し，2番目の天井石も一方を傾斜させている。これが最も大きな破壊であり，この時石室が全て荒らされ，遺物が取り出されたものと思われる。次いで石室の右側壁前方も一部破壊されている。これは1番目の天井石を除去した時のものかもしれない。最後に奥壁と右側壁を破壊して侵入しているが，これが近年行なわれたもので，最初の盗掘後石室前方から土砂が流れ込んで，奥壁近くの天井付近に多少空間があった時に行なわれていたが，石室内全部をさらえたものではなく，奥壁付近の上部の土砂を移動させたにすぎなかった。これが近年石室内をのぞいたという穴であろう。我々の調査もこの盗掘抗をさらえることから始めた。竪穴式石室であるという人もあったので，とにかく石室の方向を確認することから始めたのである。もちろん，ボーリングによる天井石の並びも確認したのであるが，方向がつかめなかった。後で判明したことであるが，天井石の幅が広いうえに除去されたものがあったために縦横の長さに大差がなく，小型の石室と思ったぐらいである。

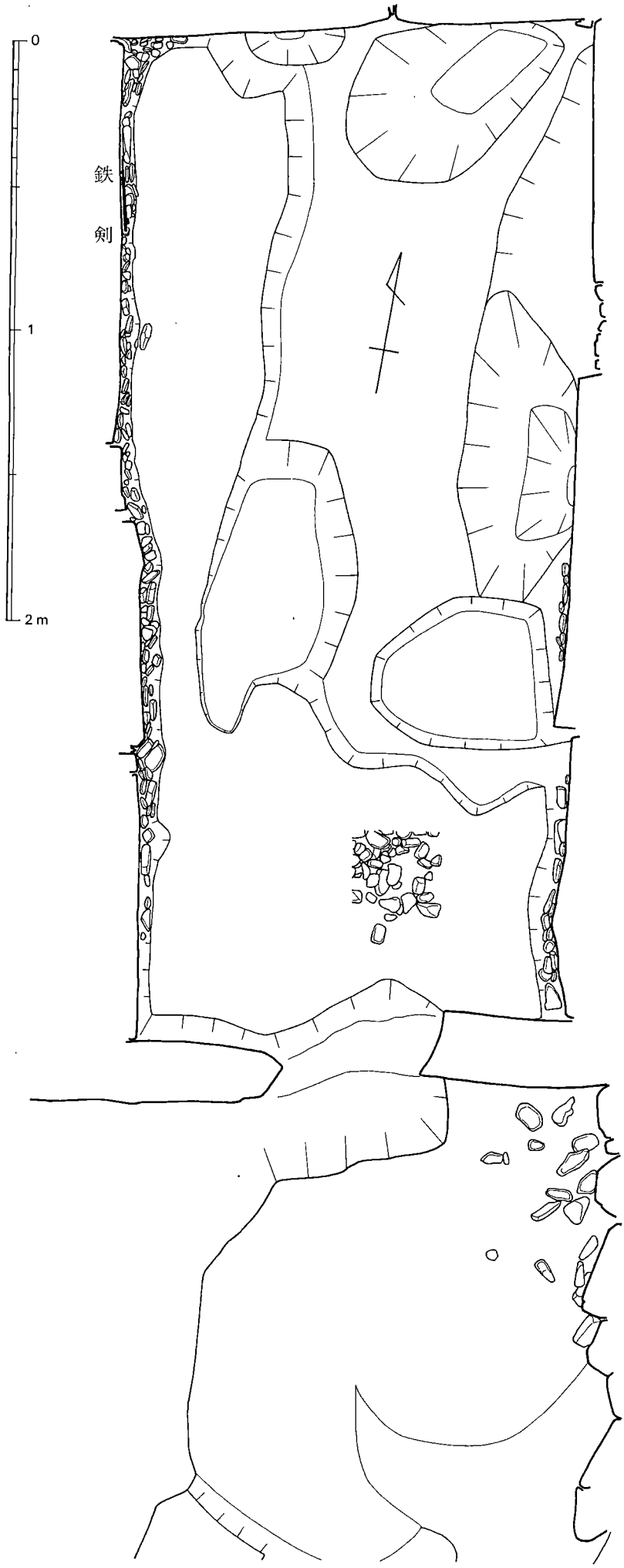
墳丘の調査をまったくできなかったので，石室と盛土の関係は不明であるが，地山は標高39*m*付近にしかないと思われるので，墳丘盛土の墳頂近くに築造された古式の横口式石室であることには疑いなかろう。

石室全長は 5.2*m*で，石室内法は右側壁長3.44*m*，左側壁長3.43*m*とほとんど同じで，幅は奥壁で1.62*m*，前面で1.48*m*となり，見た目は長方形プランであるが，前面が14*cm*狭いので羽子板形プランともいえる。石室の高さは中央の原位置の天井石の奥壁寄りで1.25*m*と低いが，奥壁は 1.3*m*，前面側壁では 1.1*m*ほどになり，前方ほど低くなっている。これは袖石の高さが，同一床面高から1.07*m*となっていることからも証明される。

石室の石組法で目立つのは袖石の左右各1枚の板石が立っていることで，完成した石室の内外では小口積された小型の石材だけで腰石の存在に気付かないほどである。床石が敷かれた状態で腰石らしく見えるのは奥壁の左側腰石ぐらいで，他は床石に隠れてしまう。奥壁は床面から70*cm*以上掘方を掘って埋められているが，もちろん地山には達していない。左側壁の横口に接する腰石を見ると，厚さ20*cm*の板石を立て使用しており，横口の石材と変わりないところから，他の腰石も同様に割合扁平な板石を使用しているものと思われる。腰石の大半は花崗岩で小型のものが石英質の頁岩状のものである。腰石から上の石材も同質のものが混存して使用され，扁平な板石は少ないが，板石状の石材を小口積しているところは古式の様相を呈している。しかし，奥壁と側壁の角は双方に掛け渡した石材があり新しい要素も腰石と同様である。壁面の内傾度は約　°で，これは腰石から傾斜させている。側壁の積方は図版11のように



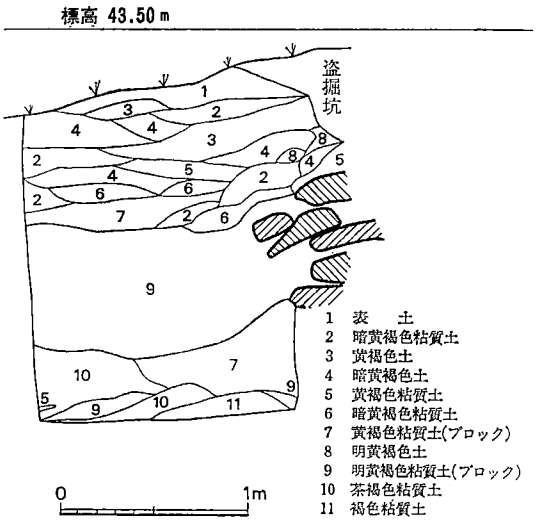

第 5 図　竹原八幡塚古墳石室実側図(1/30)




**第 6 図**　石室床面実側図(1/20)

十分な控え積みがしてある。

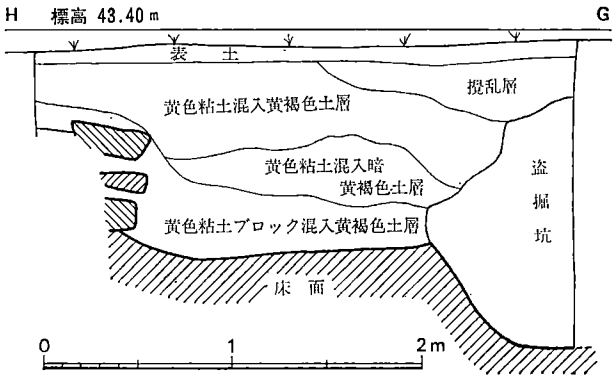
横口部は，双方各1枚の板石を奥壁と平行に立てて袖石とするところに特色がある。側壁の高さから見ても板石に直接天井石が架構されるか，多少空間をもつものと思われるので，いわゆる前壁構造はない。横口前面の床面の高さが，石室内の床面より約30cmほど高くなるので，横口前面の床の高さに框石状の石材があったものと思われるので，横口は高さ 0.8m，幅0.55mの広さである。



第7図　石室右側壁の控え積石と墳丘土層図 (1/40)

天井は，厚さ0.5～0.6m，幅0.8～1.1m，長さ2.45mにおよぶ巨石4枚を架構したらしいが，原位置にあるものは奥壁側から2番目にあるものだけで，奥壁のものは奥壁側に20cmほどずれている。天井石を架構した時の石室の天井幅は中央部で 1.1mである。

床面には全面にわたって玉砂利が敷かれていたらしいが，大半が盗掘によって荒され図版13—1のように石室前面に一部原位置のものが残っていたにすぎない。石室の腰石は墳丘盛土に掘方を掘って据えられているが，石室の内側はこの掘方を全部埋め戻さずに壁面に赤色顔料を塗布しており，腰石には床面下になる部分まで付着している。掘方を埋め戻された床面は石室中央部が平坦となるだけで，掘方のある壁面から20～30cmのところから4壁面に向って傾斜し，敷石の玉砂利もこれに沿って敷かれている。さらに，壁面の腰石に沿って幅5～7cm，深さ10cmほどの扁平玉砂利を縦に詰め込んだ溝があり，床面の傾斜と合せて排水溝と思われるが，玉砂利の詰め込みは強く，腰石固定強化の感が強い。しかし，床面の傾斜と合わせて排水溝の役割も充分はたせるものである。石室は天井から側壁，床石全面に赤色顔料が塗布されているが，詰め込まれた玉砂利も例外ではない。



第 8 図　墓道断面土層図 (1/40)

横口部前面の墓道といえるところは，床面が外に向って約20°の傾斜で登っている。すなわち，墳丘3段目も墳頂近くから石室内に下

ることになる。前庭側壁には天井石の架構されない石積が主軸に平行に延びている。石材は板石がなく石室内より雑となり石室側壁より高く積まれるが，床面の傾斜に合せて積まれるため先端ほど上面のレベルも下るのと合わせて先細りする。横口部の外面と前庭側壁にも赤色顔料が塗布されるが，敷石状の一部の小石には塗布されず，壁面から垂れたものが付着したにすぎない。第8図の前庭横断土層図からは追葬の状況は確実にはつかめなかった。

### (3) 出土遺物

#### ① 遺物の出土状態（図版15—2，第6図）

竹原八幡塚古墳の調査は，種々の手違いで古墳としては部分的な調査に終ってしまった。したがって，出土遺物も石室内の残り物と墳丘裾のトレンチ1本のものに限られる。

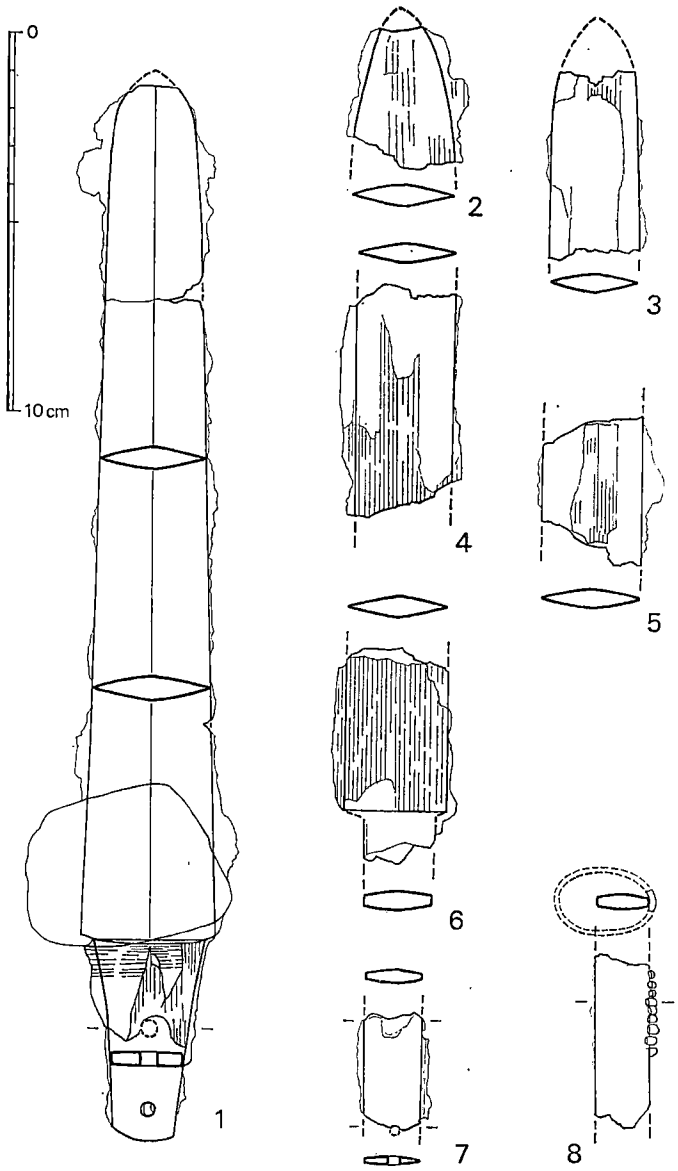
石室は完全に荒らされ，床面の敷石である玉砂利が原位置に近く残っていたのは横口部に近いところだけであった。ここでも玉砂利が裏になったものがあり，図版13—1の撮影の後で実測する時に下面になった方に赤色顔料が塗布してあるものもあった。とくに著しく荒らされている奥壁から右側壁と床面の中央部の攪乱土中には鉄片も少なかったが，他の部分の攪乱土中には鉄片も多く，横口部に近い床石上には散乱はしていたが，鞍骨片がまとまっていた。荒らされ方の少ない左側壁と右側壁の一部には，腰石の横に詰め込みの玉砂利溝がよく残り，旧状がうかがえる。左側壁で奥壁に接する1番大きな腰石の詰め込み玉砂利の中から1本の鉄短剣が発見された。この短剣は腰石に背を密着させ，切先を奥壁に向けて多少下向きに差し込まれており，詰め込まれた玉砂利が上に乗っていたことからも，明らかに意識的に封じ込められたものである。封じ込めた場所が奥壁の腰石ではないが，最も大きな腰石であるところにいわくありげに思われるし，鉄短剣の茎には柄がよく残っているのに，剣身には鞘らしき木質は全く付着してないところから，封じ込めた時には鞘はなかったとも思われる。

他の石室内出土品の鉄鏃や金具類は，全て石室内の攪乱土中に浮遊して発見されたものである。念のために石室床面近くの土砂は，全てふるいにかけて鉄の細片まで採取したが，玉類は発見できなかった。

墳丘南側裾のトレンチでは，とくに墳丘裾の周溝と思われる部分から遺物が多く発見された。しかし，この遺物も細片で摩滅した埴輪片や土器片であった。耕作土を第1層とすると，第3層から埴輪や須恵器の細片が出土するが，第4層の墳丘から流れて堆積した墳丘裾から周溝最下層の暗黒褐色粘質土中には，細片であるが埴輪片が多くなってくる。八幡塚古墳トレンチ出土と称する遺物の中に焼き損じの瓦質土器片が多く含まれているが，土層図に明記されていないため出土状態は不明である。

② 鉄　器（第9～12図）

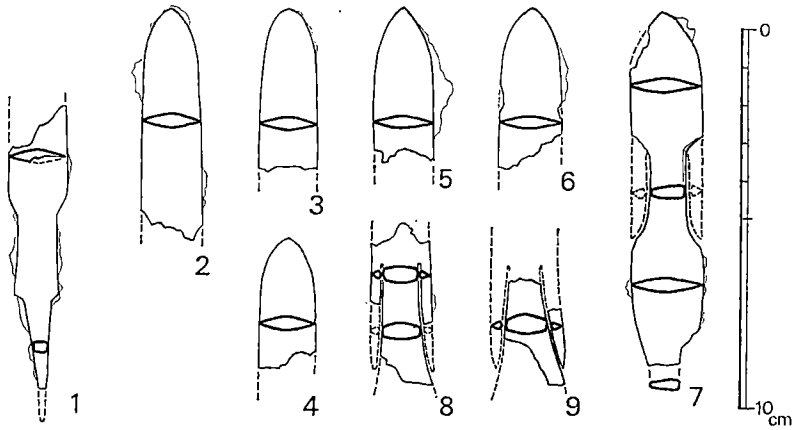
**鉄　剣**　第9図1は石室腰石裾に密着して封じ込められていた現全長27.7cmの短剣であるが，切先が欠損しているので復原すると全長28.2cmになる。剣身長22.8cm，身最大幅3.5cm，厚さ0.6cmの大きさであり，短剣とするか槍とするか判断に苦慮する。茎は長さ 5.4cm，最大幅3cm，厚さ0.4cmで幅広で短かく，2個の目釘孔を有する。茎には縦に木目が走る断面楕円形の木柄が残り，表面には紐状のもので巻いた痕跡がある。剣身に鞘らしき付着物がないところから槍の可能性もあるが，柄の幅が 3.5cm以上はあるのに対し，厚さを復原すると3cmに満たない楕円形であり，剣身側に三角形の突出もないことから，ここでは短剣としておきたい。2～6は明らかに剣身で，木鞘の木質も付着している。切先付近の破片が2個あることから2本以上はあったのであろう。剣身の細片は他にもあるが，身幅は 2.4cmのものと 2.7cmのものがある。




**第 9 図**　鉄剣・鉄刀実測図 (1/2)

**鉄　刀**　第9図7と8は茎であり，7は剣と刀の区別がつかないが，8は刀の茎と思われる。茎の背に直接密着するように径2mm弱の撚紐を巻き付けているところから，鹿角装を含む5世紀代の鉄刀の柄に見られるように，柄の背に茎の溝を切り込む着柄法と同様で，剣にはこの手法はないものと思われる。鹿角製刀装具の破片も出土している。

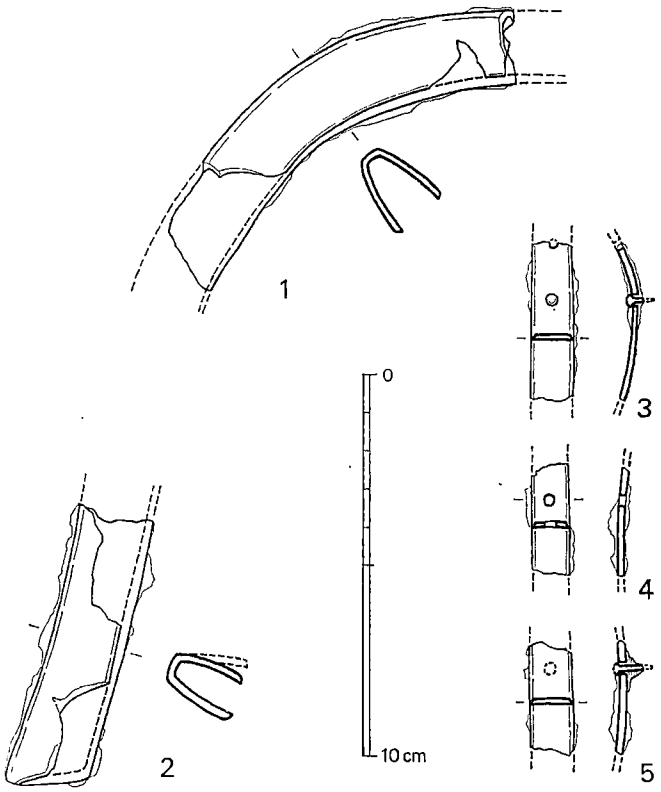
**鉄　鏃**（第10図）　鉄鏃は柳葉形に属すると思われるものが2種類ある。1～6は同種のも



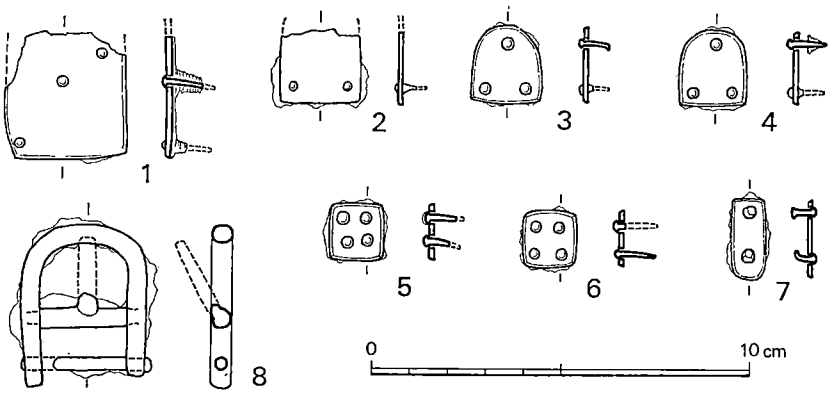

第10図　鉄鏃実測図　(1/2)

ので，身の長さは2で計測すると最低6㎝はあり，1と合わせて復原すると全長12㎝にはなるものと思われる。最大幅 1.7㎝で，同種のものは破片から10本以上はあったようだ。7～8は同種の鉄鏃と思われるが，かえりが目立って分離せずに身に密着する形となっている。完形品がなく，同種のものを知らないので全形が不明であるが，7が完形に近く茎が欠損しているだけであれば推定できる。最大幅1.8㎝で，7の現全長が9.3㎝であるから復原全長は少なくとも13㎝以上にはなると思われる。この形式は身の一部が残っているのはこの3片だけであるが，かえりの部分の破片は先端のあるものが79個あり，少なくとも同種の鉄鏃が40本以上はあったことになる。かえりの部分の最大長は3.5㎝のものが2本ある。

**馬　具**（第11・12図）　第11図1・2は鞍の覆輪で鉄製である。2のような爪先が2個しかないので後輪1個分のみではなかろうか。U字形の内側には木質が残っているところがあるが，木目はかなら




第11図　馬具実測図1 (1/2)




第 12 図　馬具実測図 2 (1/2)

ずしも覆輪に平行ではないようだ。幅2㎝，最大の厚さ 1.6㎝であるが全体の大きさは不明である。3～5の鉄器も馬具の付属金具と思われるものである。長さは不明であるが，幅 1.1㎝，厚さ2㎜弱で外反りをしているものがある。内側には木質が残っているところがあり，釘で固定されていたらしい。木目は金具と平行に走っている。

第12図も馬具と思われる鉄製金具である。1は幅 3.2㎝あり，他のものより大きく，裏面に付着しているのも他と違って木質である。長さは不明。2～6は留金具で，裏面には木質とは違う付着物があるので革製品に使用されたものであろう。4の例で見られるように，その革製品も合わされて上になる方の厚さは2㎜弱のものであったらしく，鋲にその痕跡がある。2と7の形態のものは1個しか残っていないが，3・4は計6個，5・6は計4個発見されている。7の裏面には付着物がないが，鋲の先をつぶしているので，鋲は厚さ2～3㎜のものを貫通していたことがわかる。

8は鉸具である。馬具の革帯のものであろう。刺金が欠けている。全長4.2㎝，外幅3.3㎝，内副 2.2㎝の大きさである。

その他の遺物で，石室内で発見されたものに盗掘時のものと思われる中世土師皿や石鍋片があり，墳丘裾のトレンチでは摩滅した円筒埴輪や須恵器細片がある。須恵器はⅢa 形式の蓋杯2片であるが，中世や近世陶器片が混入しているので資料としての価値が低いので除外した。

## 4. おわりに

竹原八幡塚古墳の調査は，墳丘の規模や形態こそ明らかにすることができなかったが，石室の構造を知り得たことによって，九州北部沿岸に比較すると「内陸的」といわれる当地域の古墳文化で，とくに横穴式石室の出現の1つの規準を見い出せたものといえる。犬鳴川流域の主

要古墳で内部構造や副葬品が明らかなものは，竹原古墳（註2）のみであったが，ここに八幡塚古墳を追加することができた。

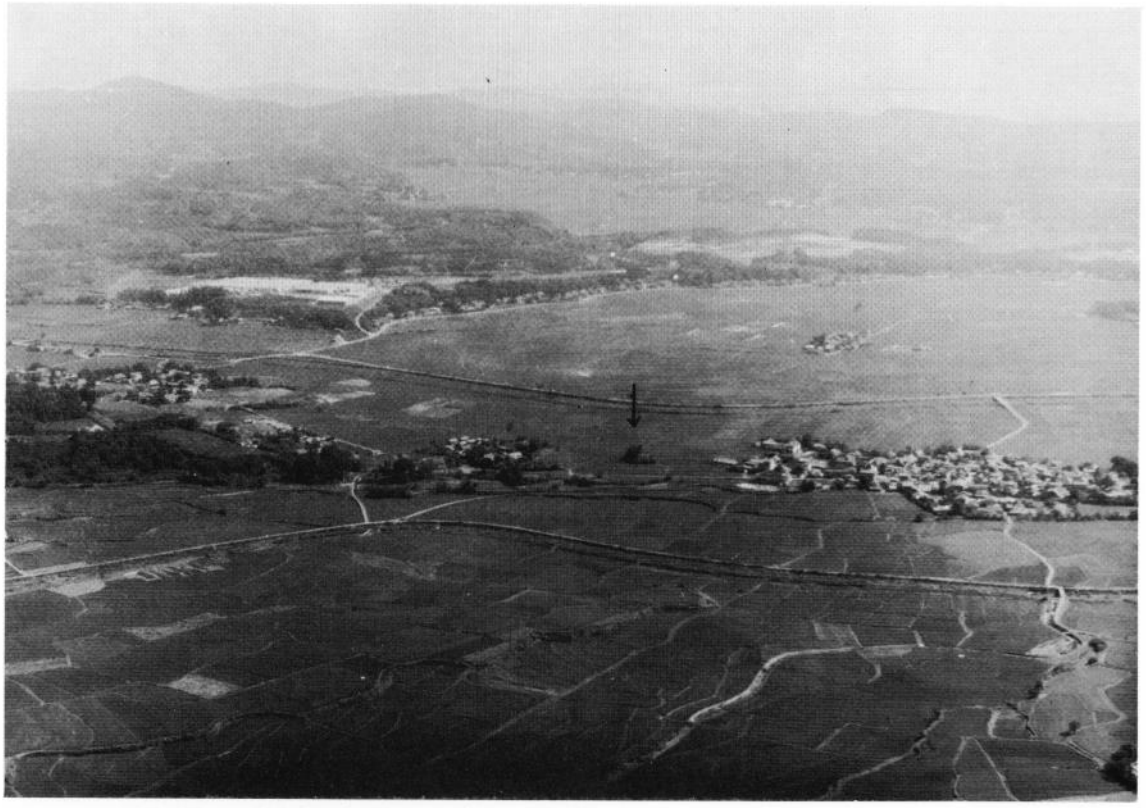
ここではまとめとして竹原八幡塚古墳の年代を考える規準として，周辺古墳と比較検討を試み，当地域の石室構造変遷の中に組入れてみたい。犬鳴川流域の古墳文化については当教育委員会の上野精志氏の研究があるので（註3），多くは述べないことにする。八幡塚古墳の南方800*m*のところにある剣塚前方後円墳は，いわゆる畿内型古墳として当地域に出現した最も古いものであろう。剣塚古墳は，墳丘形態から比較すると北部沿岸の4世紀後半から末の前方後円墳の形態を踏襲していると思われるが，後円部墳頂に円筒埴輪を廻らしている点などを考慮すると5世紀前半代にしなければならない。次に問題となるのは帆立貝式古墳の高野1号墳である。これも内部主体が不明であるが，円筒埴輪が採集されているところから，墳丘形態も含めて5世紀中頃から後半に置くべきものであろう。高野1号墳がより古い竪穴系横口式石室を持つ可能性があるが，八幡塚古墳の主は，犬鳴川流域の支配者の3代目として始めて畿内型古墳から脱して，大陸の影響を受けた九州型古墳である竪穴系横口式石室を築造することができたのではなかろうか。

竹原八幡塚古墳の石室構造は，九州北部沿岸の竪穴系横口式石室と比較すると，5世紀後半代とされるものに類似する。石室の規模においても新原17号墳・10号墳（註4）に次ぐもので小型古墳ではない。犬鳴川流域の古墳でも，山口川の左岸の丘陵上に所在する汐井掛古墳群は，当地域の中層支配階級の墳墓の変遷をたどるにはかっこうの古墳群である。汐井掛古墳群のある丘陵尾根上には，土壙墓や石棺墓が群集する汐井掛遺跡があり，古墳として出現するのは小型の竪穴系横口式石室墳である。汐井掛遺跡の土壙墓や石棺群は，弥生時代終末のものを一部含み，墓地形態から言えば弥生的集団墓地であるが，大半が年代的には古墳時代の集団墓地であろう。汐井掛24・25・27号墳は小型ではあるが，竪穴系横口式石室を持ち古式須恵器を副葬することから5世紀末に比定される（註5）。少なくとも犬鳴川流域においては，5世紀後半までは中層支配階級では畿内型古墳やそれに類似する内部主体を採用できずにきたが，九州的である八幡塚古墳が築造された後は，これが一挙に緩和され汐井掛古墳群が出現するものであろう。汐井掛24・25・27号墳の石室構造と比較して見れば，これより八幡塚古墳は先行するものであり，5世紀後半が妥当なものとなる。（柳田）

註1　昭和47年度に調査を担当した鬣久嗣郎氏による。
2　森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳」『美術研究』194　1957
酒井仁夫「付，竹原古墳出土遺物」『金丸古墳』　1975
3　上野精志「1)犬鳴川流域の古墳文化と汐井掛古墳群について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXII　1978
4　石山勲・川述昭人「新原・奴山古墳群」『福岡県文化財調査報告書』54　1977
5　福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXII　1978

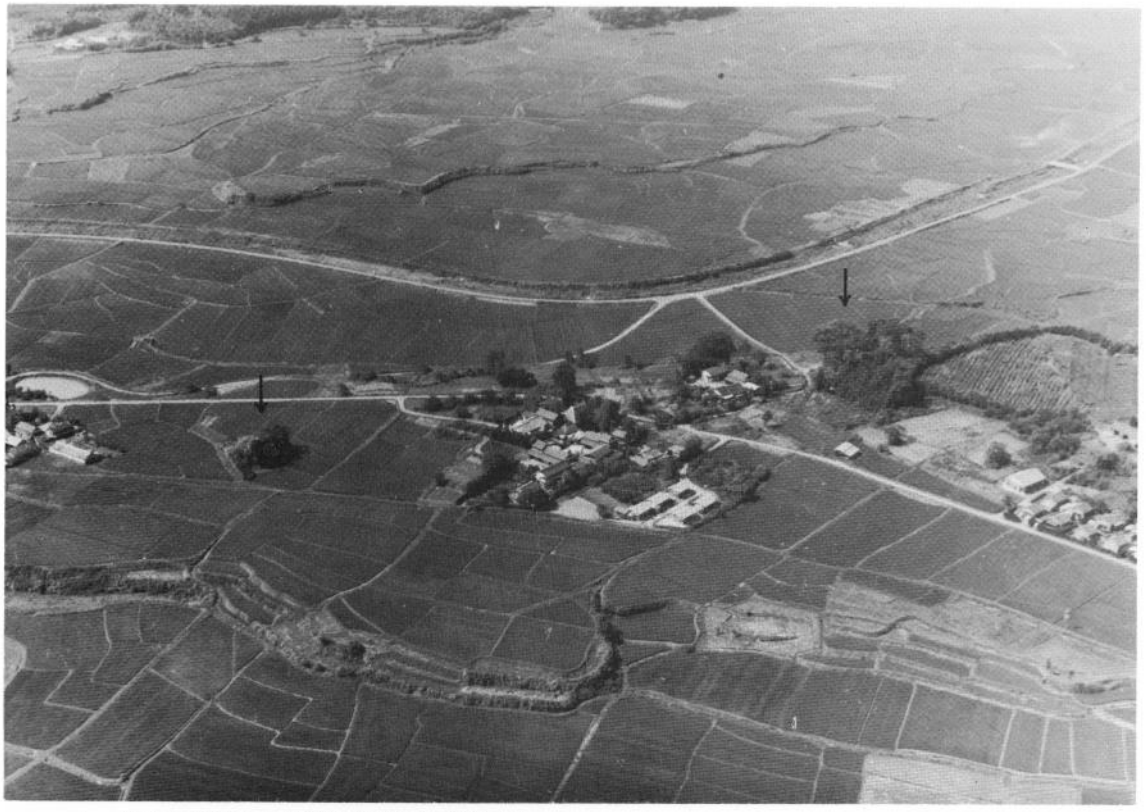
# 図　　版

## 竹原八幡塚古墳



1　竹原丘陵と八幡塚古墳(西上空から)

2　山口川(右)と黒丸川(左)と竹原古墳・八幡塚古墳(南上空から)



1　竹原古墳(右)と八幡塚古墳(東上空から)

2　竹原八幡塚古墳(西上空から)

1　竹原八幡塚古墳(北上空から)

2　竹原八幡塚古墳(西上空から)

1　伐採前の竹原八幡塚古墳(昭和47年・南西から)

2　竹原八幡塚古墳の近景(西から)

1　竹原八幡塚古墳の近景(北西から)

2　竹原八幡塚古墳の近景(東から)

1　墳丘１段目の現状(東から)

2　墳丘１段目の現状(北西から)

1　墳丘南裾トレンチ

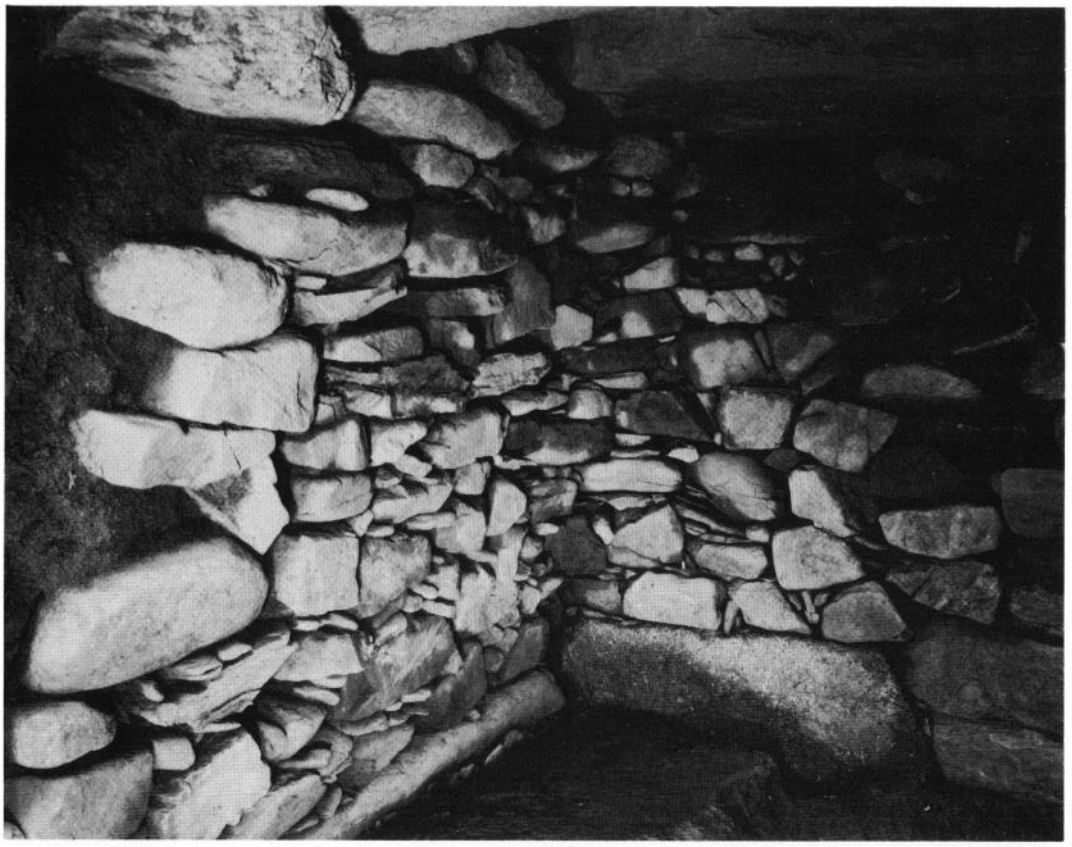
2　墳丘南裾葺石と
　　周溝内転落石

1　石室前景と盗掘坑

2　近年の盗掘坑

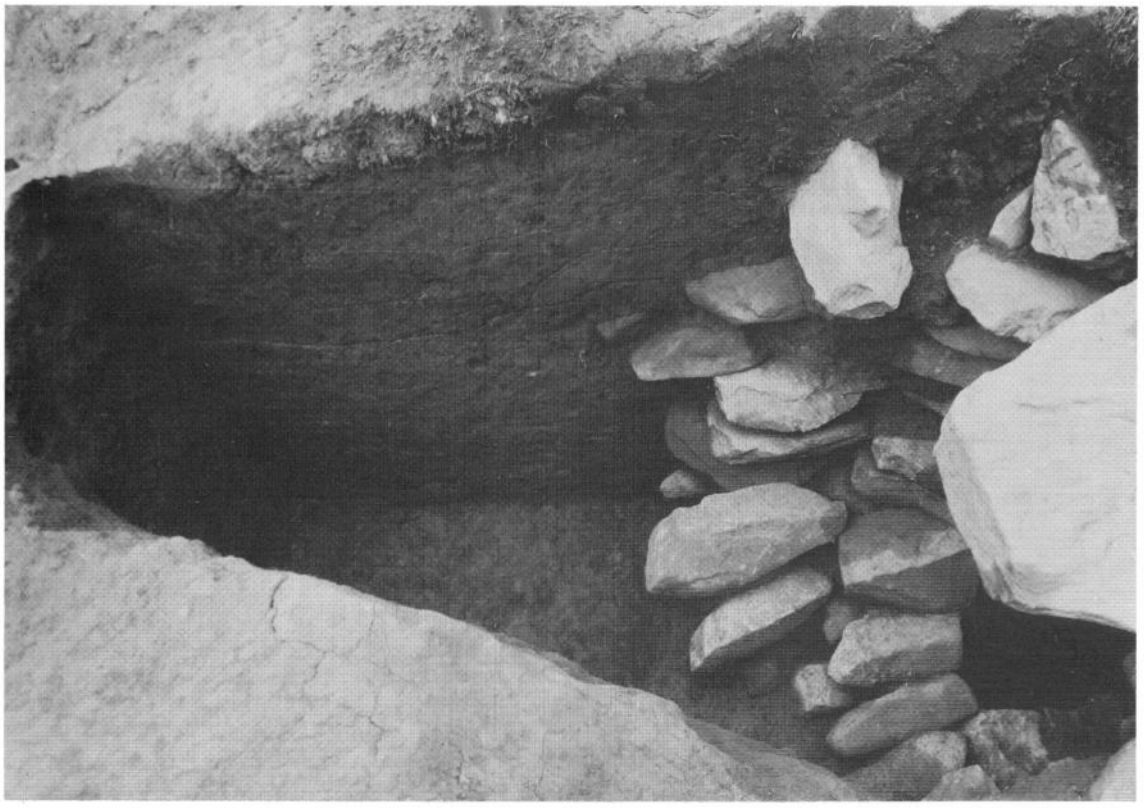
1　石室全景

2　石室奥壁

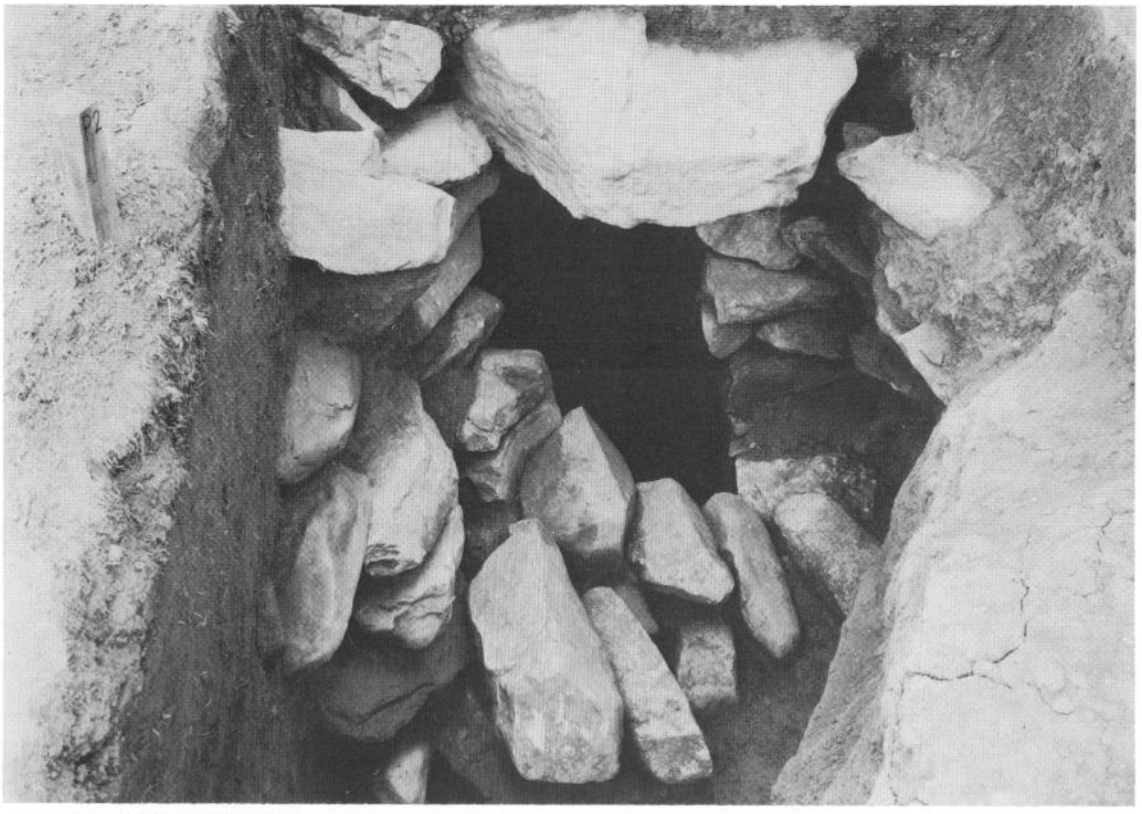


1　奥壁と左側壁

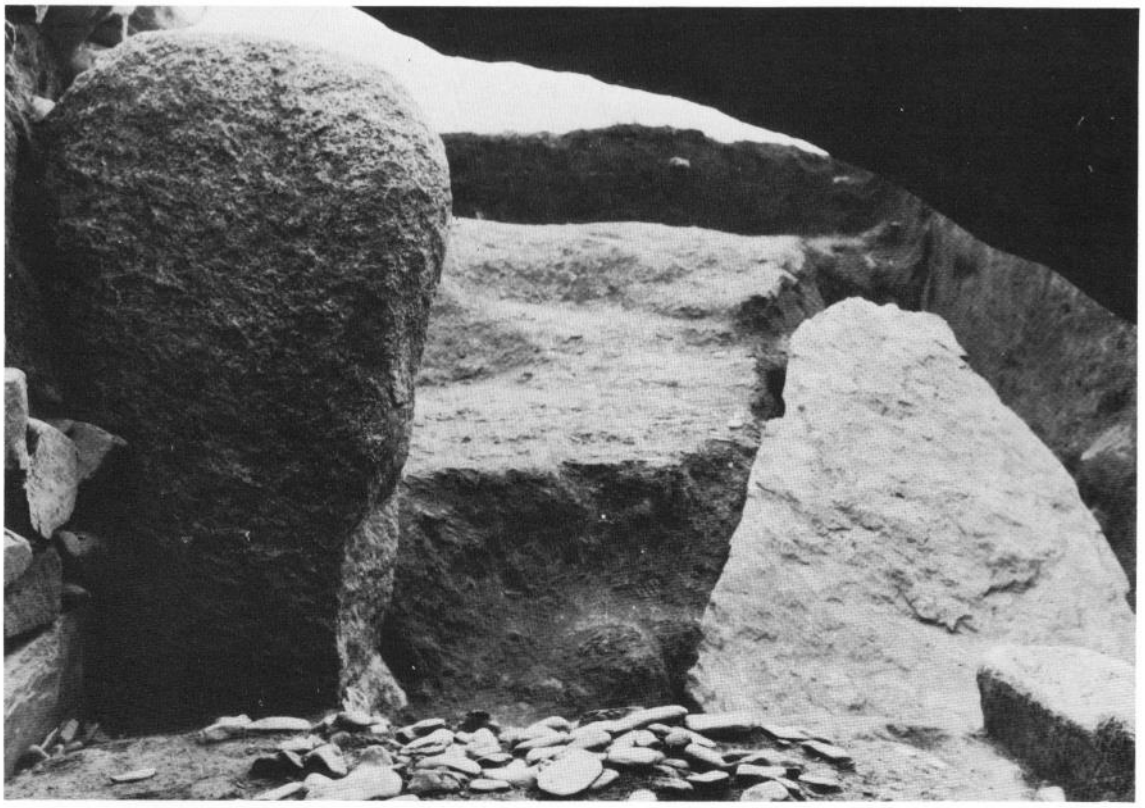
2　石室の右側壁（奥壁から）



1　石室側壁の控積と墳丘土層



2　奥壁と側壁の控積



1　石室内から見た横口

2　墓道から見た横口

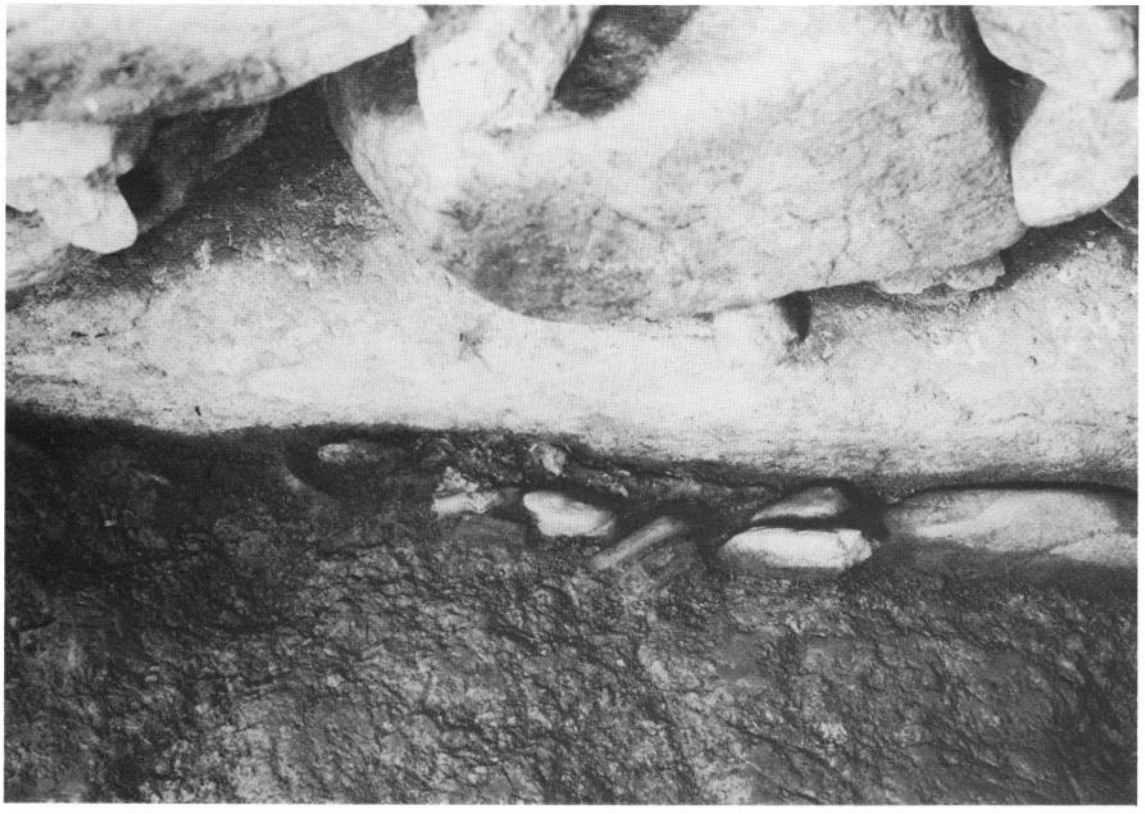
1　石室床面と鉄器出土状態

2　左側壁の腰石と詰込玉砂利

1　横口石材と右側壁

2　墓道右側壁

1　横口構造と墓道



2　左側壁腰石と封じ込まれた短剣

# Ⅲ　井手ノ元遺跡の調査

（第18―３地点）

福岡市南区大字上曰佐字井手ノ元

# 本　文　目　次

1. はじめに……21
(1) 調査の経過……21
(2) 遺跡の立地……21
2. 遺構と遺物……23
(1) 遺　　構……23
(2) 遺　　物……23
3. おわりに……23

# 図　版　目　次

本文対照頁
図　版1　(1)　発掘区全景　東南から（小池史哲撮影）……21
(2)　C 14区の状況（小池撮影）……23
図　版2　(1)　C 18区の状況（小池撮影）……23
(2)　C 22区の状況（小池撮影）……23

# 挿　図　目　次

第 1 図　井手ノ元遺跡全体図（日本国有鉄道原図，小池史哲作成）……22
第 2 図　土層断面図（小池・小林義彦実測，河鍋洋子製図）……折込み

# Ⅲ　井手ノ元遺跡の調査

## 1. はじめに

### (1)　調査の経過

この遺跡の調査は，昭和52年6月1日から15日の間に実施した。山陽新幹線博多総合車輛基地の付帯施設としての排水路建設に先立つもので，当初の調査予定に含まれてなく，車輛基地の北端より約 1.5㎞も北側に位置するが一応追加地点の18—3地点として調査を実施することになったものである。

調査の対象となった部分は，現状では水田面であり，土器片の散布がみられたため，幅6ｍという狭長な部分であったが，4×4ｍのグリッドを設定して調査することとした。

この結果，東部の試掘区では表土下90㎝で地山とみられる砂層が現われ，試掘区の西側に向って緩やかに傾斜しており，C—18の試掘区では表土下 140㎝で砂層が現われ，この上には強グライ土壌が堆積していた。しかし，西側の試掘区においては表土下80㎝で砂層に達し，グライ土壌も含まない。また，発掘区全域にシルト質堆積土がみられた。しかし，調査の時期が雨期でかつ苗植期にかかっていたため，冠水を受け，調査対象区域外におよぶ土砂崩壊を防ぐことが困難となり，試掘調査のみで発掘調査を打ち切った。

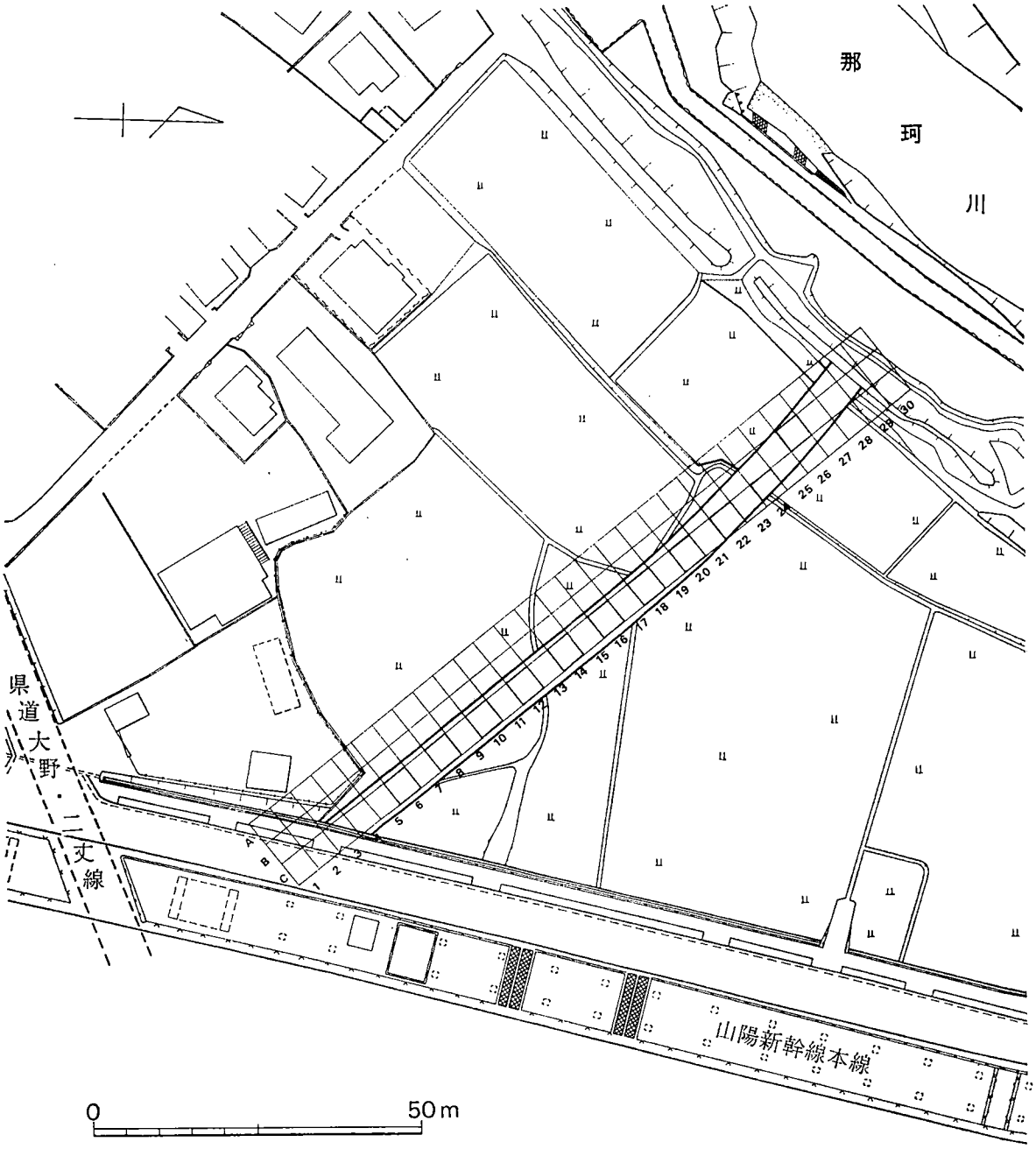
福岡県教育委員会文化課

| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 大神　新 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技　師 | 小池史哲 |
| | 調査補助員 | 小林義彦 |

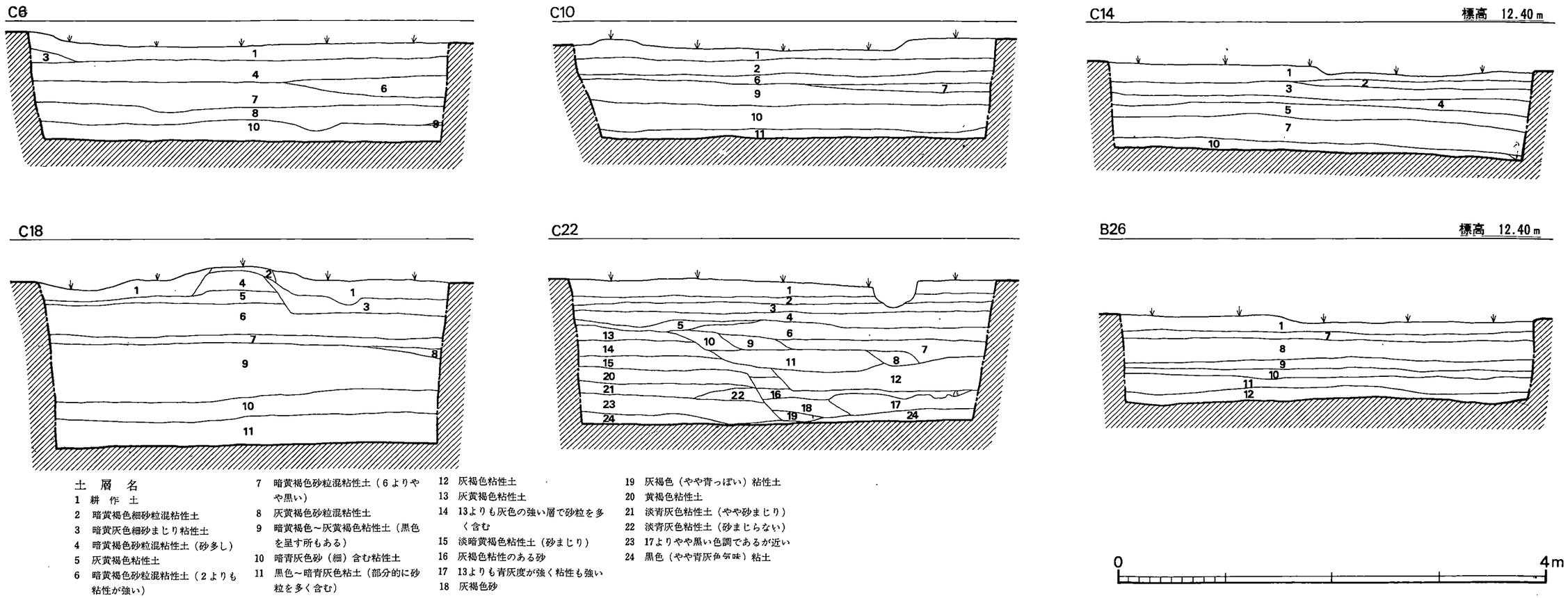
なおこの調査には，福岡市・春日市・那珂川町在住の方々の協力をえた。

### (2)　遺跡の立地

この遺跡は，福岡県福岡市南区大字上曰佐字井手の元にある。佐賀県との境をなす背振山に源を発する那珂川の中流域右岸の水田面に位置する。那珂川右岸には，牛頸山塊から延びる春日丘陵と那珂川の河岸段丘が北方へ長くつながっているが，曰佐集落あたりの標高15ｍ程度の低位段丘から更に低い標高12ｍ程度を測る弥生低地である。遺跡周辺では西南方約 300ｍに弥生前期甕棺墓地の高椋遺跡，南東方約 700ｍに弥生後期墓地の曰佐原遺跡等が占地している。




第 1 図　井手ノ元遺跡全体図 (1/1,000)




土 層 名

1 耕 作 土
2 暗黄褐色細砂粒混粘性土
3 暗黄灰色細砂まじり粘性土
4 暗黄褐色砂粒混粘性土（砂多し）
5 灰黄褐色粘性土
6 暗黄褐色砂粒混粘性土（2よりも粘性が強い）
7 暗黄褐色砂粒混粘性土（6よりやや黒い）
8 灰黄褐色砂粒混粘性土
9 暗黄褐色～灰黄褐色粘性土（黒色を呈す所もある）
10 暗青灰色砂（細）含む粘性土
11 黒色～暗青灰色粘土（部分的に砂粒を多く含む）
12 灰褐色粘性土
13 灰黄褐色粘性土
14 13よりも灰色の強い層で砂粒を多く含む
15 淡暗黄褐色粘性土（砂まじり）
16 灰褐色粘性のある砂
17 13よりも青灰度が強く粘性も強い
18 灰褐色砂
19 灰褐色（やや青っぽい）粘性土
20 黄褐色粘性土
21 淡青灰色粘性土（やや砂まじり）
22 淡青灰色粘性土（砂まじらない）
23 17よりやや黒い色調であるが近い
24 黒色（やや青灰色匂味）粘土

第 2 図　井手ノ元遺跡南壁土層断面図（1/40）

# 2. 遺構と遺物

## (1) 遺　構

試掘調査の域を出なかったため，明確な遺構を確認することはできなかったが，各試掘区での層序をみると最下層の砂層がC 6・C26では浅く，C18で最も深くなっていること，中央部試掘区C14・C18・C22区で強グライ土壌の堆積が顕著にみられたことから，C18区付近を中心とした溝，あるいは旧河川の存在が考えられる。

## (2) 遺　物

調査区全域にわたるシルト質堆積土には，弥生時代中期以降近世までの土器片が含まれているが全て細片で摩耗した資料がほとんどである。また強グライ土壌中には，中世に属する土師器片が若干みとめられた他はヒシの実等の植物遺存体を検出したにとどまる。

# 3. おわりに

那珂川の右岸にあたる当該地点は標高12$m$前後を測り，那珂川の低位段丘の裾部に相当する。現状での那珂川の堤防は標高13$m$前後であり，堤防部にかかる調査区西部の試掘区での堆積状況は砂を中心としている。調査区東端から山陽新幹線本線を隔てた上日佐集落にかけては，1$m$以上の高低差をもって高くなっており，南西方向の警弥郷集落にも微高地状を呈している。一方，上日佐集落と警弥郷集落との間は低地がつづき，わずかな谷の存在がみとめられる。調査区域中央部に想定できる溝あるいは旧河川敷状の遺構は，この谷部につづくものであるか，那珂川の河道移動によるものか明確に知りうることはできないが，いずれにせよ，この谷部あるいは那珂川の流水によって形成された自然形成的な遺構であろう。またこの遺構内での遺物の出土状況。殊にヒシの実等の出土から，中世段階において既に沼地化した水路が存在していたと考えるのが妥当であろう。　（小池）

# 図　　版

## 井手ノ元遺跡

1　発掘区全景(東南から)

2　C14区の状況

1　C 18区の状況

2　C 22区の状況

# Ⅳ　久保遺跡の調査

（第32－２地点）

筑紫郡那珂川町大字中原字久保・浦田

# 本　文　目　次

1. はじめに……25
(1) 調査の経過……25
(2) 遺跡の立地……25
2. 遺構と遺物……26
(1) 層　　序……26
(2) 大　　溝……26
3. おわりに……28

# 図　版　目　次

本文対照頁
図版 1 (1) 発掘区全景（井上裕弘撮影）……25
(2) 東側調査区全景（井上撮影）……26
図版 2 (1) 西側調査区全景（井上撮影）……26
(2) 大溝全景（井上撮影）……26

# 挿　図　目　次

第 1 図　久保遺跡地形図（井上裕弘・小池史哲・藤瀬禎博実測，白水千賀子製図）…折込み
第 2 図　久保遺跡遺構配置図（井上・小池・藤瀬実測，河鍋洋子製図）……折込み
第 3 図　東側調査地区土層断面図（小池・藤瀬実測，河鍋製図）……折込み
第 4 図　西側調査地区土層断面図（小池・藤瀬実測，河鍋製図）……折込み
第 5 図　大溝出土遺物実測図（井上実測，製図）……27

# Ⅳ　久保遺跡の調査

## 1. はじめに

### (1)　調査の経過

この遺跡の調査は，昭和52年3月1日から3月26日までの期間で実施した。山陽新幹線博多総合車輌基地建設に伴う県道福岡・大野・早良線付替工事の事前調査として行われたものである。昭和47年に調査した油田遺跡（第32地点・第32―1地点）の南西側に近接した段丘上に位置するため，当初，弥生・古墳時代関係の遺構の存在が予想され，追加して調査することになったものである。

調査は道路幅約8 *m*の狭長な範囲が調査対象地域であるため，トレンチとグリッドを併用して行った。なお，この調査は国鉄の買収計画が難行していたため借地して実施したものである。従って地権者の要望もあって耕作土・床土などを分離して置き，地権者ごとに埋めもどさなければならないため調査期間の大半の時間をそれに費すことになってしまった。

調査関係者は次の通りである。

福岡県教育委員会文化課

| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 大神　新 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技　師 | 井上裕弘 |
| | 技　師 | 小池史哲 |
| | 調査補助員 | 藤瀬禎博 |

### (2)　遺跡の立地

この遺跡は，福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字久保および蒲田にある。福岡平野の西側を流れる那珂川の支流梶原川が形成した低位な河岸段丘上に位置し，標高26～26.5*m*を測る。遺跡の北東には弥生最終末～古墳時代初めの甕棺墓が検出された油田遺跡，西側には縄文・弥生・古墳・歴史時代にわたる広大な安徳中原遺跡群が展開している。また，北側には古墳時代前期の竪穴住居跡が検出された下原遺跡，さらに先土器時代から江戸時代にわたり長期間連綿と形成された広大な門田遺跡等が占地している。

# 2. 遺構と遺物

検出された遺構は，奈良時代の大溝1条，時期不明の杭列1条と溝5条のみである。遺物は弥生式土器，奈良時代の須恵器・瓦類，近世の陶磁器・瓦類等の破片資料が若干出土した。他に，奈良時代の大溝からは多量の植物種子・流木等が検出された。

## (1) 層　序（第3・4図）

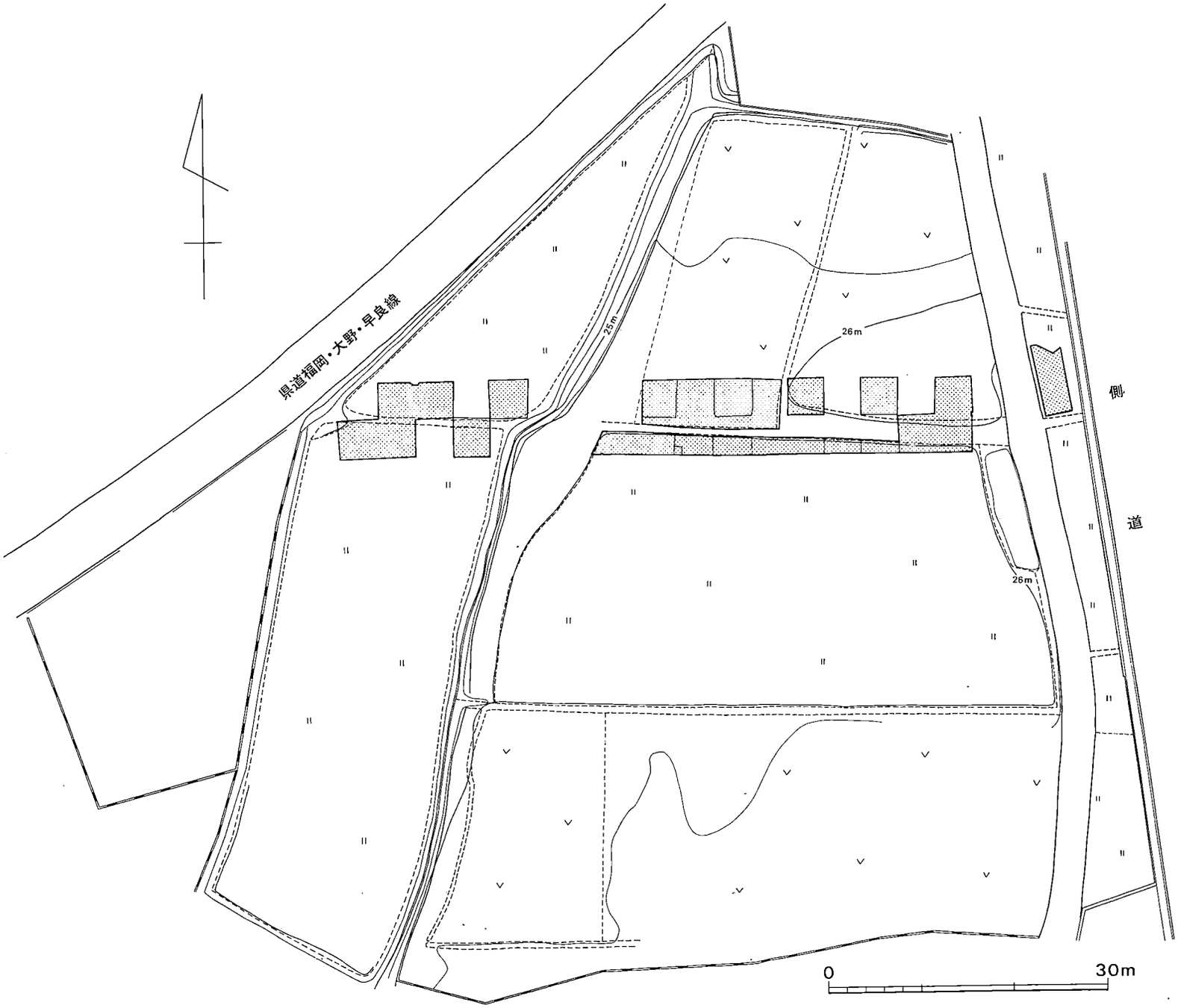
1層は暗黄褐色～黒色の腐植質の耕作土で約25cmを測る。2層はシルト質の暗黄褐色土ないしは黒色土で，約20～30cmを測る。いわゆる床土である。3層は黒褐色シルト質の土層で10～25cmを測る。他に3′a層として粘性のある暗黄褐色の砂層と3′b層の粘性の弱い黒色砂層が部分的に堆積している。4層は暗黄褐色の堅緻な粘質砂層で，部分的には灰褐色を呈す所もあるが，いわゆる地山である。5層は灰褐色粘質砂層，6層は灰色弱粘質砂層で，いずれも粗い砂粒を含む。7層は黄褐色粘質砂層で，砂粒は細かい。8層は灰褐色粘質砂層で軟質である。9層は黒色泥炭質の腐色粘土である。5～9層は発掘区南端の狭い谷部にのみみられる土層で，北側の台地面にはみられない。とくに西端部で検出された奈良時代の大溝の上層には9層の黒色泥炭の腐植土層がわずかに堆積している。10層以下は全て大溝内の堆積土である。

## (2) 大　溝（図版2－1，第2・4図）

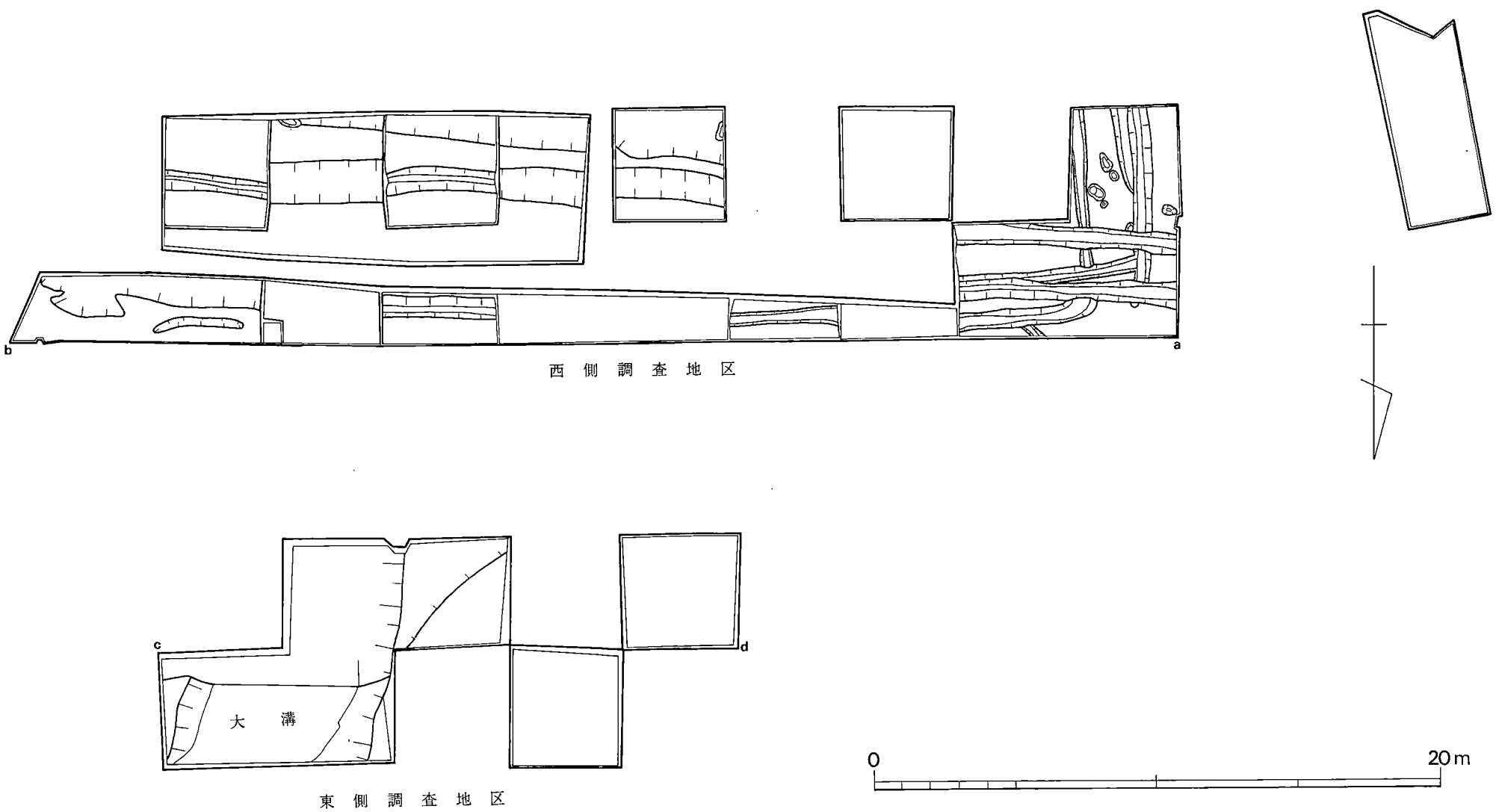
発掘区西端で検出された大溝で，西側の立ち上がりは検出できず，幅は不明であるが，発掘区内では7.50mを測る。堆積土の状態からみてさらに2～3m西側に行くものと思われる。深さは最も深い所で2.30mを測り，断面U字形をなす。溝内は黒色腐植粘土（9）・乳灰色強砂層（14）・乳白色砂層（18）・青灰色粘土（26）・暗茶褐色腐植土（27）（植物種子・小枝・葉等多量に含む）が互層をなし，その下に黒色泥炭質粘土（29）が堆積し，最下位層は黄褐色弱粘質砂層（30）が約30～50cmと厚く堆積していた。基盤は青灰色粘土層である。遺物は若干の須恵器と丸瓦片であるが，丸瓦は細めの平行叩目文をもつ白水廃寺系のものである。他に，多くの植物種子・葉・小枝・流木等である。

出土遺物（第5図）

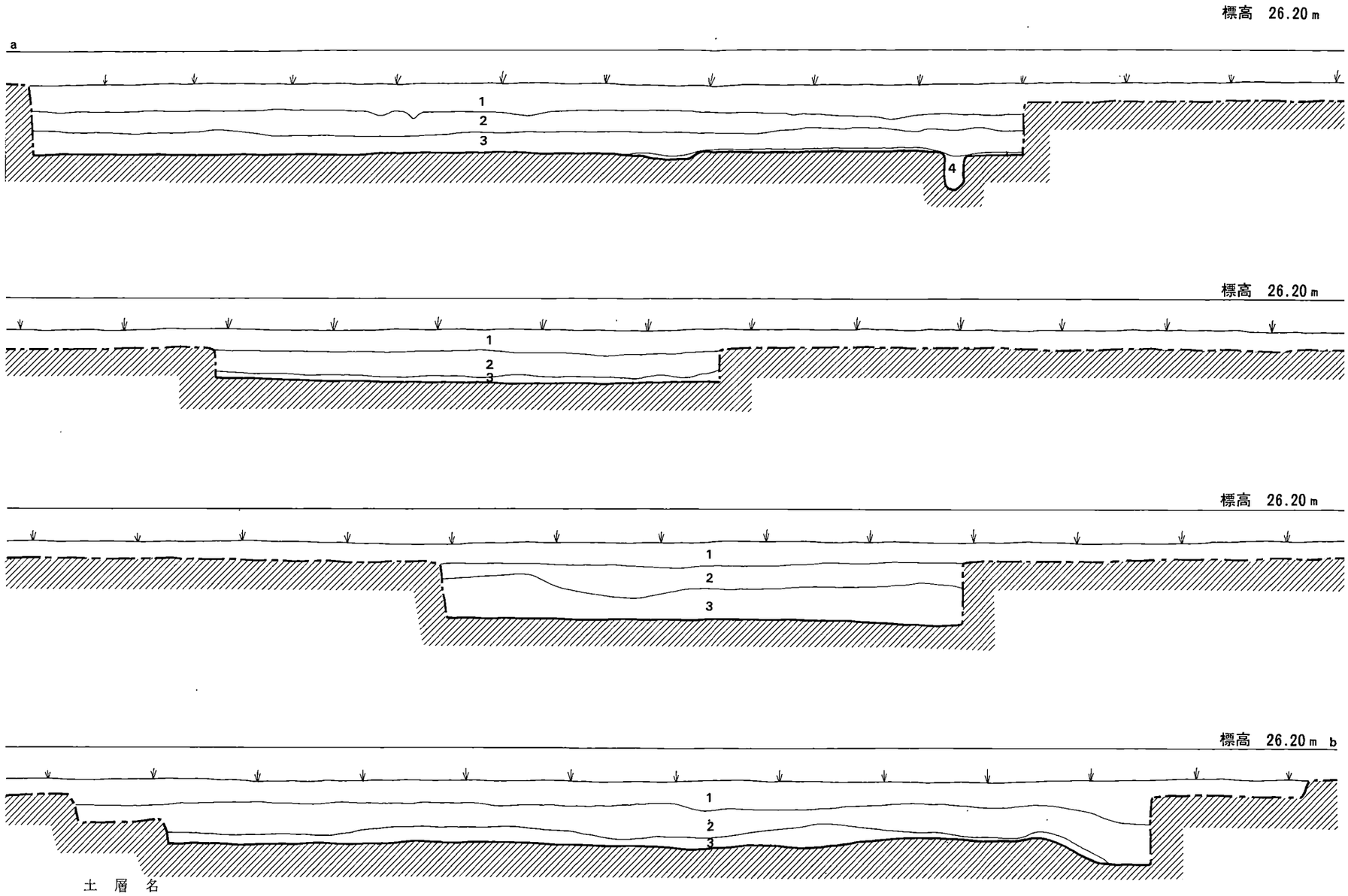
**須恵器**（1・2）　1・2とも破片資料である。1は高台付椀で，復原口径14.7cm，器高4.3cm，高台径9.9cmを測る。高台低く畳付けは平担である。体部内外ロクロヨコナデ，底部内外




第 1 図　久保遺跡地形図(1/600)




**第 2 図**　久保遺跡遺構配置図(1/200)




土 層 名

1 耕 作 土

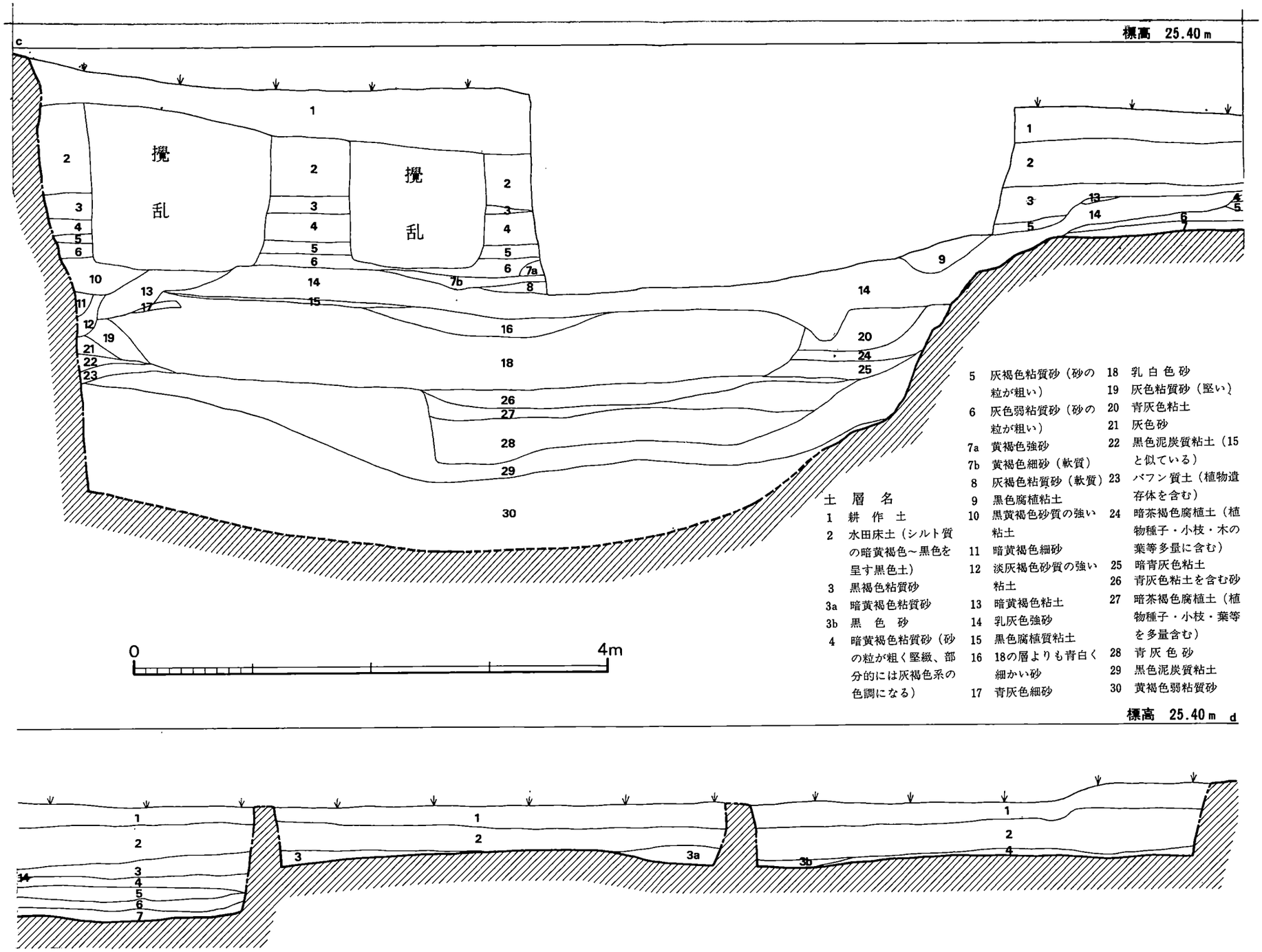
2 床土、黒色腐植質砂・粘混（シルト質）
及び黄褐色粘土粒混土

3 黒褐色シルト質土（砂粒を含む）

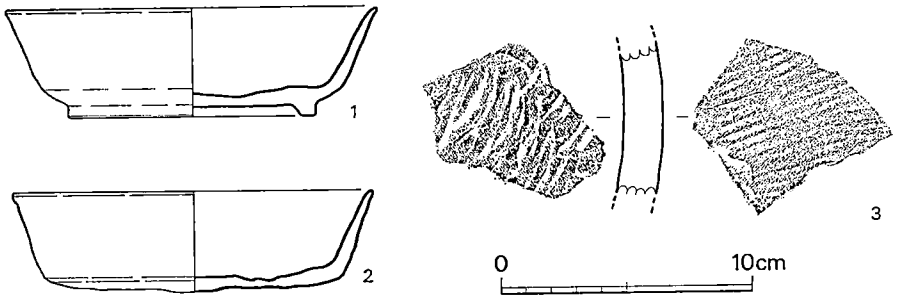
4 砂粒が多く黄褐色の色調が強くなる。

0 2m

**第 3 図** 久保遺跡東側調査地区土層断面図（1/40）




第4図　久保遺跡西側調査地区土層断面図（1/40）




第 5 図　大溝出土須恵器・瓦実測図　(1/3)

はナデて仕上げている。色調は淡黄灰色を呈す。2は杯身で，復原口径14.3cm，器高4cm，底径11.4cmを測る。体部内外ロクロヨコナデ，内底部ナデ調整，底部の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は淡灰色で焼成は良い。

**瓦**（3）　凸面が幅 2.5mmの平行条線文，凹面が青海波文の平瓦である。色調は淡褐色で軟質。胎土には多くの雲母を含んでいる。　(井上)

## (3) 大溝出土木材の樹種同定

Ⅰ　資料概要

推定時代　　奈良時代

資料点数　　5点

形状・用途　　棒状及び塊状，流木

Ⅱ　樹種同定の方法

資料から木材の3断面（横断面，半径断面，接線断面）の薄切片を採取し，光学顕微鏡を用いてこれらの切片の木材組織を観察し，樹種を同定した。

Ⅲ　樹種同定結果

| 資料名 | 樹種名 | 資料名 | 樹種名 |
|---|---|---|---|
| 資料Ⅰ | 不明（広葉樹散孔材） | 資料Ⅳ | ハイノキ属<br>Symplocos spp. |
| 資料Ⅱ | ツブラジイ<br>Castanopsis cuspidata | 資料Ⅴ | ツブラジイ<br>Castanopsis cuspidata |
| 資料Ⅲ | イスノキ<br>Distylium racemosum | | |

Ⅳ　木材組織の観察概要（図版3～5）

資料Ⅰ

直径が大略70 $\mu m$ 以下の小さな道管が散在状に多数分布する散孔材であり，穿孔板は階段状の多孔穿孔板である。1―2細胞幅の放射組織は異性型である。

軸方向柔細胞は周囲状に分布するが，あまり多くない。結晶を含む柔細胞がある。

資料Ⅱ・Ⅴ

道管の直径は大きなもので約 200 $\mu m$ あり，放射状に分布する環孔性放射孔材である。一般に単穿孔板をもつが，直径の小さな道管は稀に多孔穿孔板をもっている。放射組織は同性型であり，主に1細胞幅であるが，稀に集合放射組織もある。結晶を含む柔細胞がある。軸方向柔細胞は線状に多数分布し，結晶を含む多室柔細胞がある。

資料Ⅲ

直径が約70 $\mu m$ 以下の小さな道管が多数散在状に分布する散孔材であり，階段状の多孔穿孔板をもっている。放射組織は異性型であり，1—2細胞幅である。　軸方向柔細胞は線状に多数分布し，結晶を含む多室柔細胞がある。

資料Ⅳ

直径が約70 $\mu m$ 以下の小さな道管が多数散在状に分布する散孔材である。階段状の多孔穿孔板があり，らせん肥厚も認められた。

放射組織は1細胞幅から数細胞幅まであり，異性型である。

軸方向柔細胞はあまり多くないが，散在状または短接線状に分布する。

木部繊維にらせん肥厚がある。　（松本・林）

## 3. おわりに

時期のわかる遺構は発掘区西側の狭い谷部で検出された大溝1条のみであった。出土須恵器は，いわゆる須恵器Ⅵb期のものである。平瓦は，門田遺跡や柏田遺跡で出土している白水廃寺系の軒丸瓦（重弁八葉）と伴出する平瓦・丸瓦と同様のものである。このようなことから大溝の時期は，おそらく7世紀末～8世紀前半項に比定できよう。この大溝がどのような性格をもつ溝であるかは，調査が県道の付替工事という狭長なトレンチ調査であるため，把握できなかった。しかし，いわゆる白水廃寺系の瓦類が発見されたのはこの遺跡も含めて6ケ所になり，この周辺にこの種の瓦を葺いた遺跡の存在する可能性が高くなったといえよう。

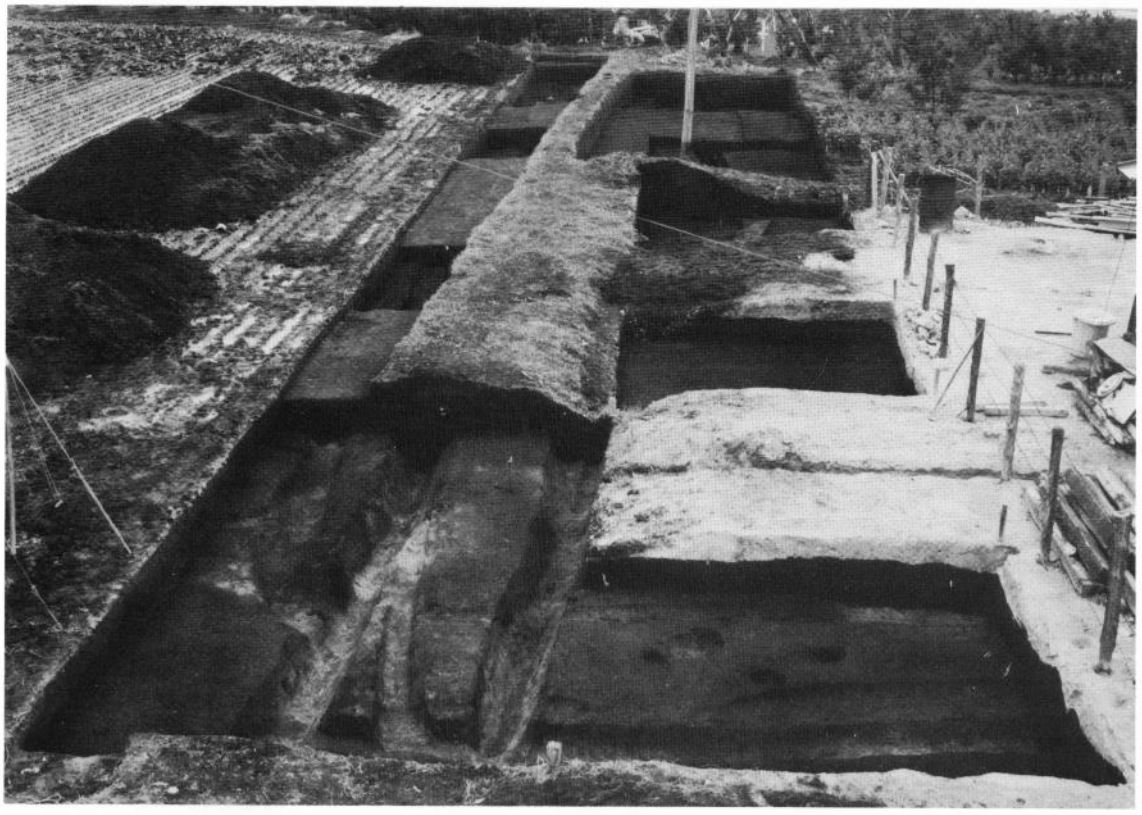
また，東側の台地上では遺構は近年の暗渠等の溝のみで，古い時期のものは何等検出されなかった。遺物も全体に少なく，当初から遺構等は存在していなかったのかもしれない。

（井上）

# 図　　版

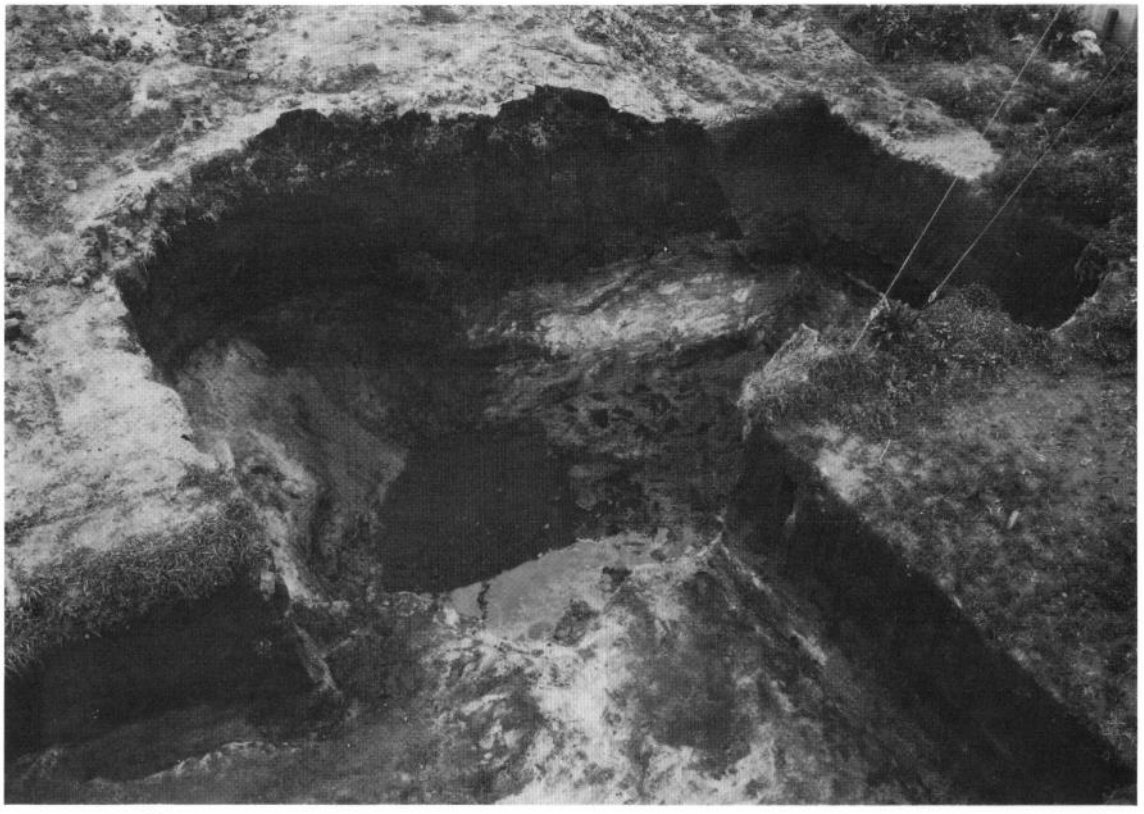
## 久　保　遺　跡

1　発掘区全景(東から)

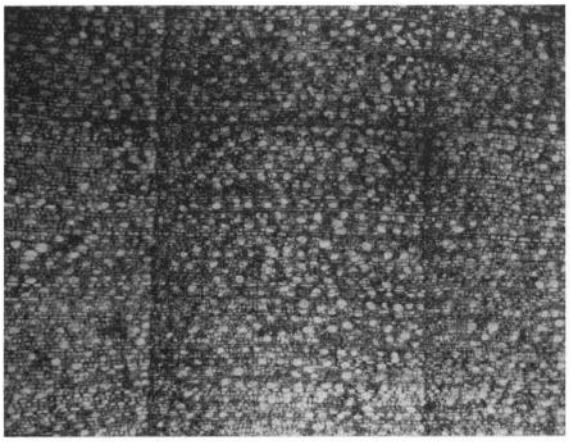


2　東側調査区全景

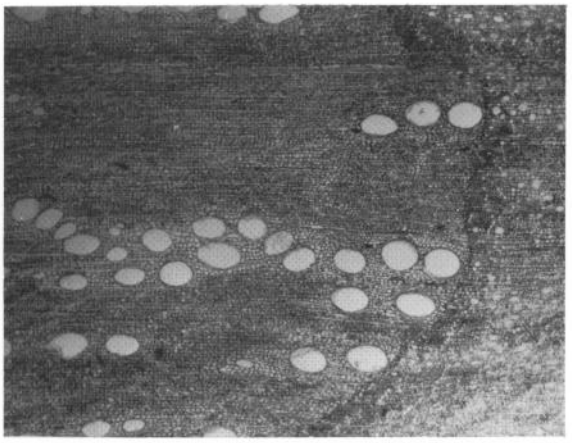
1　西側調査区全景(東から)



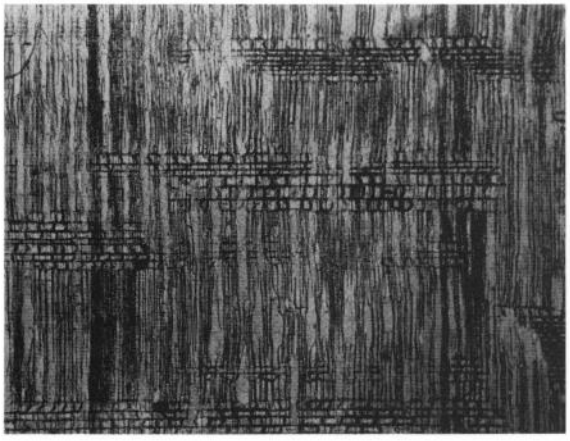
2　大溝全景



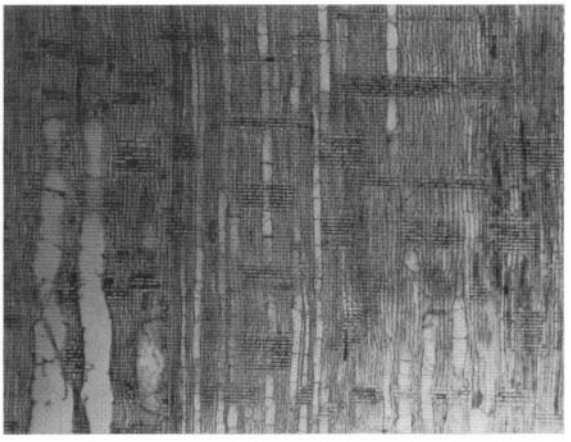
資料Ⅰ
横断面　　×30



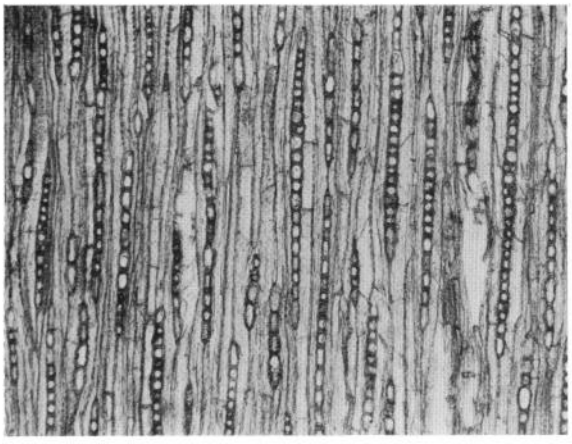
資料Ⅱ
横断面　　×30



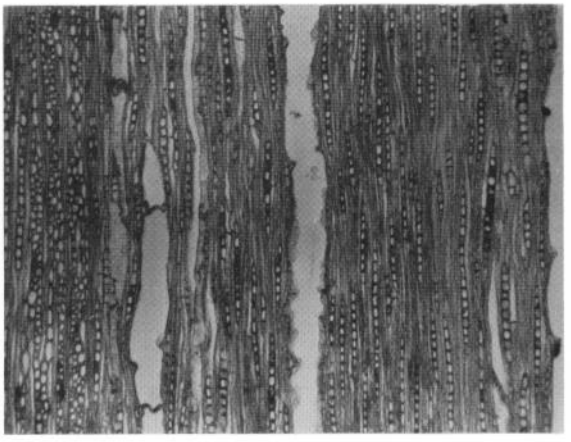
半径断面　×30



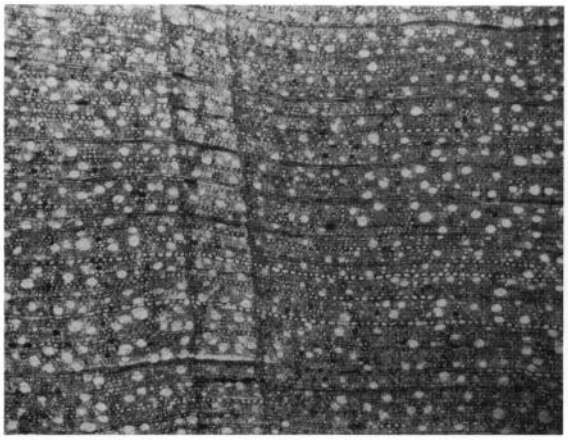
半径断面　×30



接線断面　×75

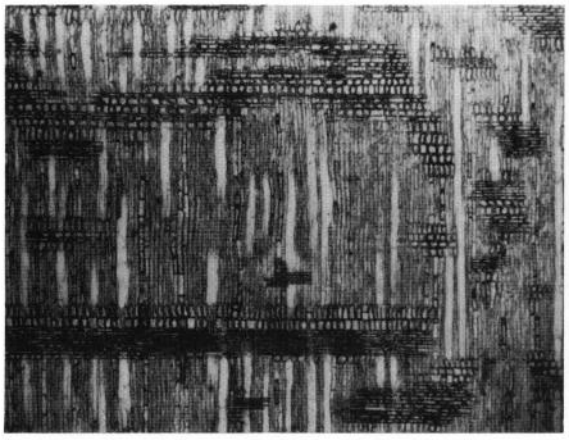


接線断面　×75

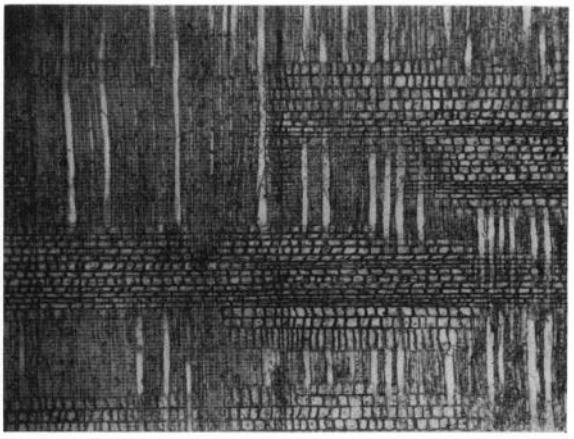


資料Ⅲ
横断面　×30

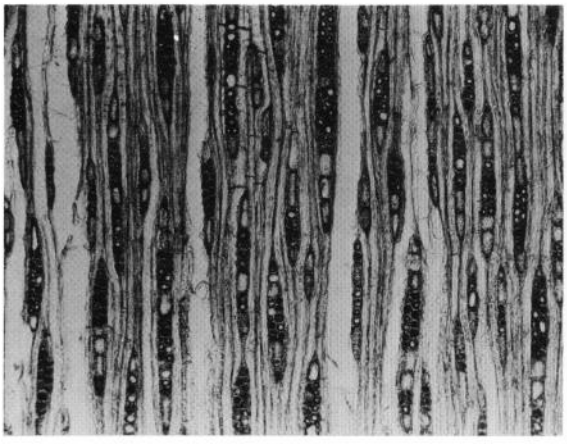
資料Ⅳ
横断面　×30



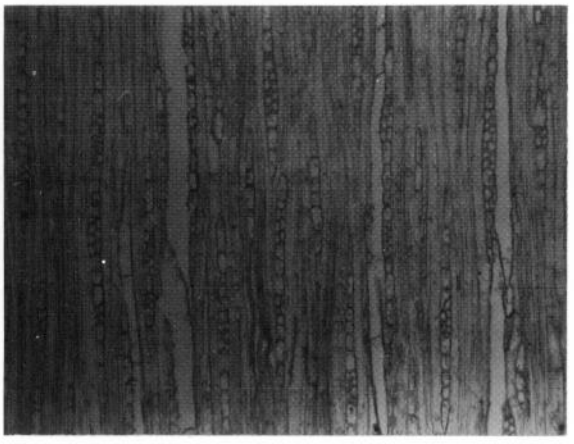
半径断面　×30



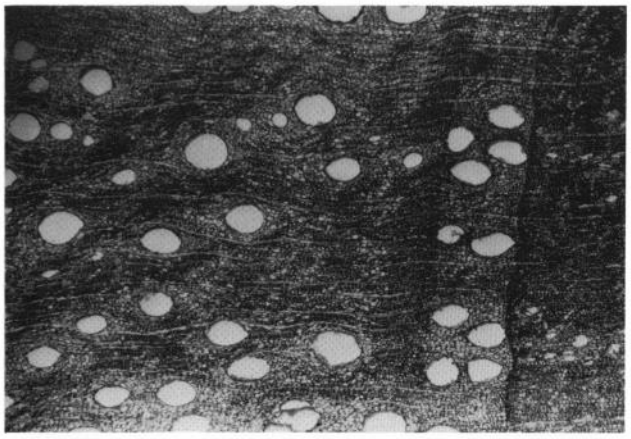
半径断面　×30



接線断面　×75



接線断面　×75



資料V

横断面　　×30

半径断面　×30

接線断面　×75

木材顕微鏡写真３

# V　鳥ノ巣A地点遺跡の調査

（第34―1地点）

筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

# 本　文　目　次

1. はじめに……29
2. 遺構と遺物……29
(1) ピット群……29
(2) 溝状遺構……33
3. おわりに……34

# 図　版　目　次

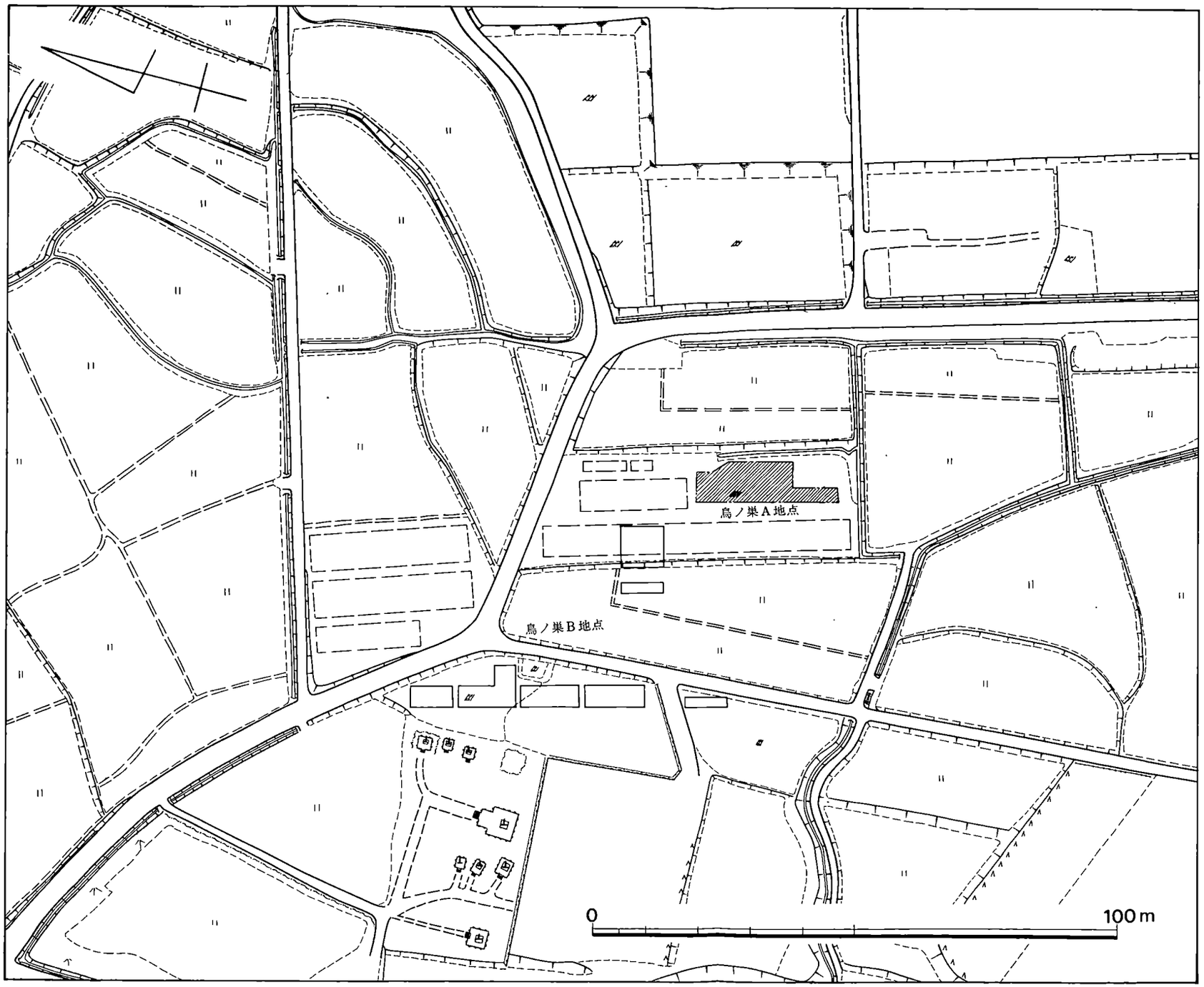
本文対照頁
図版 1　上　発掘区全景（井上裕弘撮影）……29
下　溝状遺構（井上撮影）……33
2　(1)　縄文土器（岡紀久夫撮影）……30
(2)　石器（岡撮影）……30

# 挿　図　目　次

第 1 図　鳥ノ巣A地点遺跡地形図（日本国有鉄道原図，高田弘信製図）……折込み
第 2 図　鳥ノ巣A地点遺跡遺構配置図
（井上裕弘・櫻井康治・森田徹・和田むつみ実測，白水千賀子製図）……30
第 3 図　縄文土器拓影（荒武麗子実測，製図）……31
第 4 図　石器実測図（荒武実測，製図）……32
第 5 図　須恵器・磁器実測図（荒武実測，製図）……33

# 表　目　次

表 1　石器計測表（荒武麗子作成）……31




第 1 図　鳥ノ巣 A 地点遺跡地形図(1/1,000)

# V　鳥ノ巣A地点遺跡の調査

## 1. はじめに

この遺跡は，筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣に所在する。すでに衆知の縄文時代遺跡とされている鳥ノ巣遺跡の西側にありその関連遺構・遺物が発見される可能性が高いため，また，分布調査時にナイフ形石器や縄文土器片が採集されたことから追加地点として調査を実施することになった。

発掘調査は，昭和47年6月15日から6月26日，8月15から8月17日までの期間で実施した。調査は車輛基地本線センターに沿ってトレンチを設定し，遺構の存在を確認したのち，平面調査を行った。発掘総面積は 267㎡である。

なお，調査関係者は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課

| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 小川浩一郎 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技　師 | 柳田康雄 |
| | 技　師 | 井上裕弘 |
| | 調査員 | 櫻井康治 |
| | 調査補助員 | 森田　徹 |
| | 同 | 和田むつみ |

## 2. 遺構と遺物

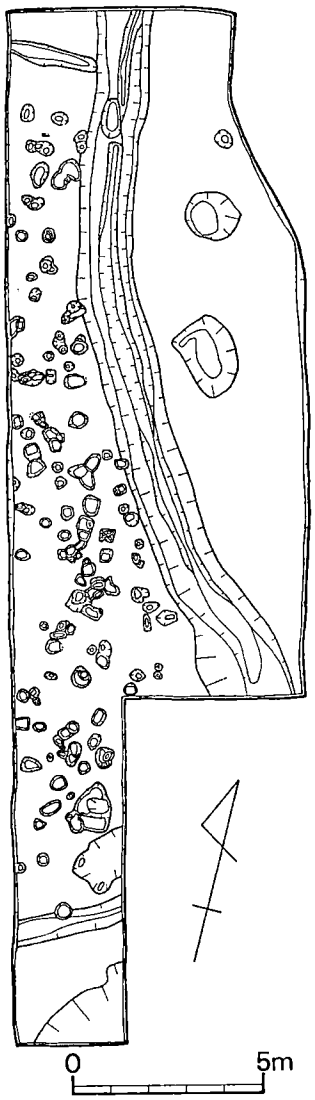
### (1)　ピット群

発掘区の西半から密集して検出されたもので，東半からはほとんど検出されなかった。しかし，遺構としてまとまるピット群の把握はできなかった。だが，多くのピット中から出土する縄文土器片・石器等から考えおそらく竪穴住居跡等の遺構が存在していた可能性は高いといえよう。また，調査地区が狭いためピット群としてのまとまりがつかみえなかったのかもしれな

い。無数のピット群はさらに鳥ノ巣遺跡のある南西側に拡がるようで，この遺跡は鳥ノ巣遺跡の東端部を構成する遺跡ともいえるようである。ピット内ないしはその周辺から出土した土器は，その大半が縄文時代後期のもので，一部に晩期を思わせる土器片もある。石器は石鏃・スクレイパー・つまみ形石器・尖頭状石器等が検出されている。また，表採品ではあるが先土器時代のナイフ形石器も1点検出されている。　　（井上）

出土遺物

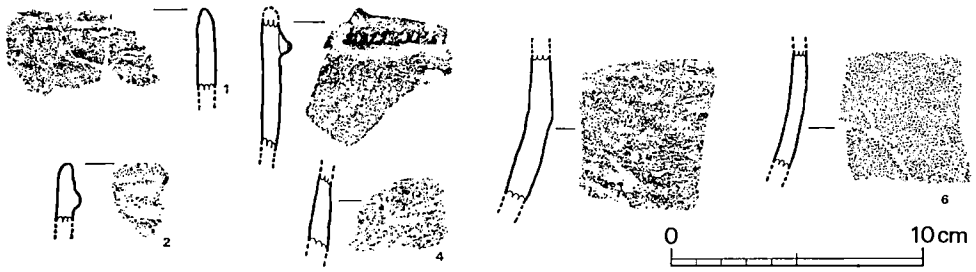
**縄文土器**（図版2—1，第3図）　口縁部（1～3）及び胴部破片（4～6）が出土している。1は内面に条痕がみとめられる。焼成は良く，胎土に細かい砂粒を含み色調は外面暗褐色，内面茶褐色を呈する。小ピット内出土。2はごく小さい破片で磨滅が著しい。突帯を貼付けており，外面はナデられていると思われる。焼成は良く，胎土に粗い石英粒を含み，色調は内外面共に黒褐色を呈する。3は口唇部を欠損している。刻目突帯を口唇部直下に貼付けている。刻みは小さくヘラ状の道具で付けている。焼成は良く，胎土に石英粒を多く混入し，色調は外面淡赤褐色，内面赤褐色を呈する。4は外面に条痕がみとめられる。焼成は良く，胎土に石英粒を含んでいる。色調は外面茶褐色，内面くすんだ褐色を呈する。小ピット内出土。5はややぶ厚く，内外面共にナデられている。焼成は良く，胎土に粗い石英粒を混入している。色調は内外面共に淡黄褐色を呈し，内面はやや明るい色をしている。6は内外面共ナデており，内面はごくていねいなナデである。焼成は良く，胎土に石英粒，細かい砂粒を含んでいる。色調は外面くすんだ褐色，内面褐色を呈する。1，4～6は後期に属すると思われ，2，3は晩期終末の土器であろう。




第 2 図　鳥ノ巣A地点遺跡
遺構配置図（1/200）

**石　器**（図版2—2，第4図）

ナイフ形石器　(1)　表採品，縦長剝片を使用しており，基部と左側辺に刃潰し加工を施している。中部より先端にかけて周縁を欠損しているが，左側辺は約 68°の角度をもって全面に刃潰し加工が施されていると思われる。パティナは古く，先土器時代の所産である。黒曜石製。




第 3 図　縄 文 土 器 拓 影　(1/3)

長さ41.8㎜，幅19.3㎝，厚さ36㎜，重量4.65㌘を計る。

スクレイパー（2・7・8）　2はサヌカイト製である。縦長剝片を素材としている。主要剝片離面側では遠端に剝離を加え，つまみ様に作り出している。わずかに欠損している。正面では，周辺に剝離が加えられ，特に左側辺では約50°の角度で，大きく加工されている。右側辺では自然面が残っている。長さ95.7㎜，幅 26.7㎜，厚さ 9.1㎜，重量37.3㌘を計る。

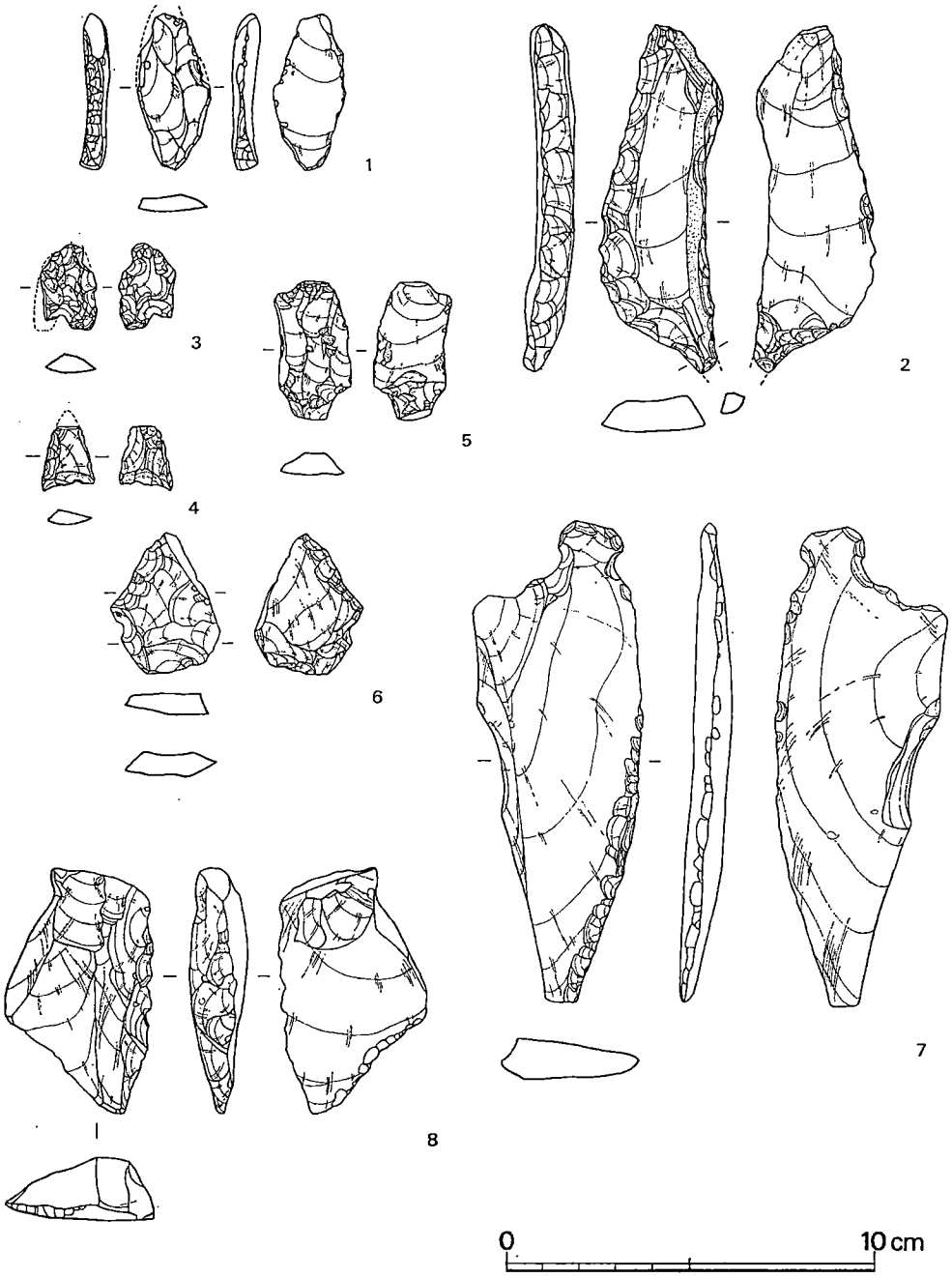
7はサヌカイト製の縦形石匙である。横長剝片を素材としている。両面共に二次加工が施されているが，主要剝離面側では中部より上に，正面では中部より下に剝離が集中している。つまみ部は両面からの剝離により作り出して，その後，細かい加工を施しており小さく丸味を帯びている。全体の大きさに比較して小さく，その幅は，17.1㎜である，全長 131㎜，幅 38.2㎜厚さ11㎜，重量56.8㌘である。

8は表採品で緻密な安山岩質の白っぽい石材を素材としたスクレイパーである。縦長剝片を素材としており，打面が大きく残っている。主要剝離面側では，遠端に細かな二次加工を施している。正面では全体に大きな剝離を加えた後，右側辺に比較的細かい剝離を加えている。全長66.8㎜，幅39㎜，厚さ19.5㎜，重量34.3㌘である。

**石　鏃**（3～4）　3は黒曜石製の表採品。縦長剝片を素材としている。先端および脚部の

表 1　石 器 計 測 表　(単位 ㎜・㌘)

| 形　態 | 実測図No. | 出土地点 | 層　序 | 長　さ | 幅 | 厚　さ | 重　量 | 石　質 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ナイフ形石器 | 1 | 表　採 | | 41.9 | 19.3 | 3.6 | 4.65 | 黒　曜　石 |
| スクレイパー | 2 | 溝　内 | | 95.7 | 26.7 | 9.1 | 37.3 | 安　山　岩 |
| | 7 | | 黒 色 土 | 131 | 38.2 | 11 | 56.8 | サヌカイト |
| | 8 | 表　採 | | 66.8 | 39 | 19.5 | 34.3 | 安山岩質 |
| つまみ形石器 | 5 | | 黒褐色土 | 37 | 18 | 5.5 | 4.7 | 黒　曜　石 |
| 尖頭状石器 | 6 | 表　採 | | 37.8 | 32 | 6.0 | 7.4 | サヌカイト |
| 石　鏃 | 3 | 表　採 | | 約 23.4 | 約 16.1 | 4.2 | 1.4 | 黒　曜　石 |
| | 4 | 表　採 | | 約 22 | 11.5 | 3.8 | 0.8 | サヌカイト |




**第 4 図**　石器実測図 (1/2)

大半を欠損している。全長約23.4㎜，厚さ4.2㎜，重量約1.4g。4は同じく表採品でサヌカイト製。先端をわずかに欠くが，ほぼ完形である。両面共わたぐり部分と一方の側縁にのみ加工を施している。長さ約22㎜，幅11.5㎜，厚さ3.8㎜，重量0.8g。

**つまみ形石器**（5）　黒曜石の縦長剝片を素材としている。打面，バルブを有し，やや長めである。両側辺から細かい加工を施して抉り込み，その部分で正面から力を加えて折断している。全長37㎜，幅18㎜，重量 4.7g。

**尖頭状石器**（6）　表採品，サヌカイト製，横長剝片を素材としている。下部は周辺から加工を施して丸く基部を形成しており，表裏共，側辺から二次加工を施し刃部を形づくっている。右側辺は欠けているが，左右対称であったと思われる。長さ37.8㎜，幅32㎜，長さ6㎜，重量 7.4gである。（荒武）

## (2) 溝状遺構（図版1－2，第2図）

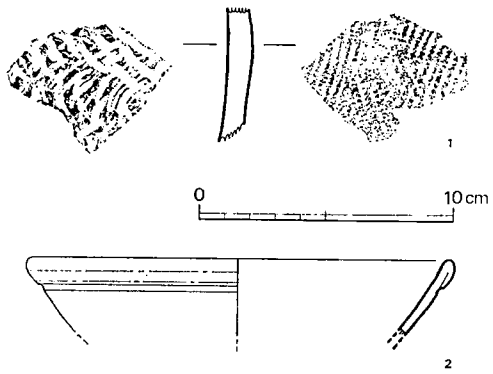
発掘区中央を走る溝で，中央部で緩やかに弯曲している。溝の幅は中央部で約1.60m，深さ約26cmを測る。溝底のレベルは，南端で標高29.46m，北端で29.30mとわずかではあるが南から北にゆるやかに傾斜している。溝内の堆積土は3層に別れ，上層から茶褐色土，黒色粘質土，灰白色砂層となりレンズ状に堆積していた。

出土遺物としては，若干の土師器・須恵器・磁器破片のみである。時期は中世であろう。

他に，発掘区の北端と南端に東西に走る細い溝状遺構があるが出土遺物もなく時期は不明である。しかし，北端で検出された幅約40cm，深さ約12cmの浅い断面U字状をなす溝は，前記した中世の溝状遺構に注いでいる点からみて，中世の溝と関連するものかもしれない。（井上）

出土遺物

**須恵器・磁器**（第5図）　1は須恵器甕形土器の破片である。外面は格子目状の叩き，内面は青海波文の叩きを施している。焼成は良好で，色調は外面灰色，内面青灰色を呈する。2は白磁碗である。口縁部を折り返して玉縁状になしており，口縁のまわりに釉薬がたれて滴状になっている。胎土は白色で，茶，黒色の粒子が含まれる。焼成は良好で，色調は淡い黄味を帯びた灰白色を呈する。（荒武）



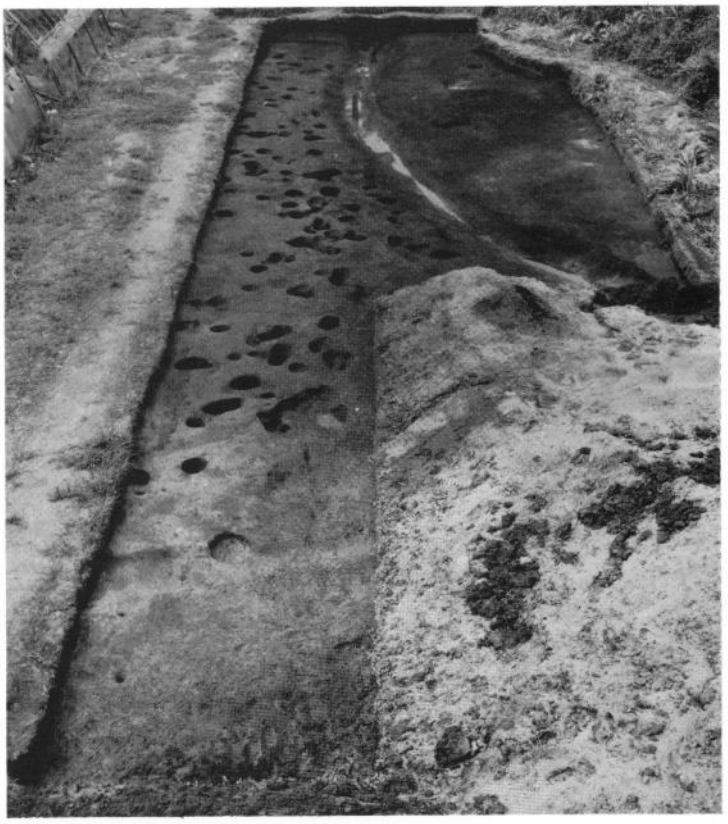

**第 5 図**　須恵器・磁器実測図（1/3）

# 3. おわりに

遺跡は，全体に削平されているためか遺構の残存状態が極めて悪かった。しかし，検出された縄文時代後・晩期の無数のピット群や後・晩期の土器・石器等は，少なからず住居跡等の存在を想定させる。これによって，それまで縄文時代遺跡であるということだけで，時期・性格について明らかでなかった鳥ノ巣遺跡の一部が明らかにされた意義は大きい。また，これら縄文時代のピット群が発掘区中央を走る溝状遺構の東側では検出されていないところをみると，この遺跡が鳥ノ巣遺跡の東端を示すものといえるかもしれない。（井上）

# 図　　版

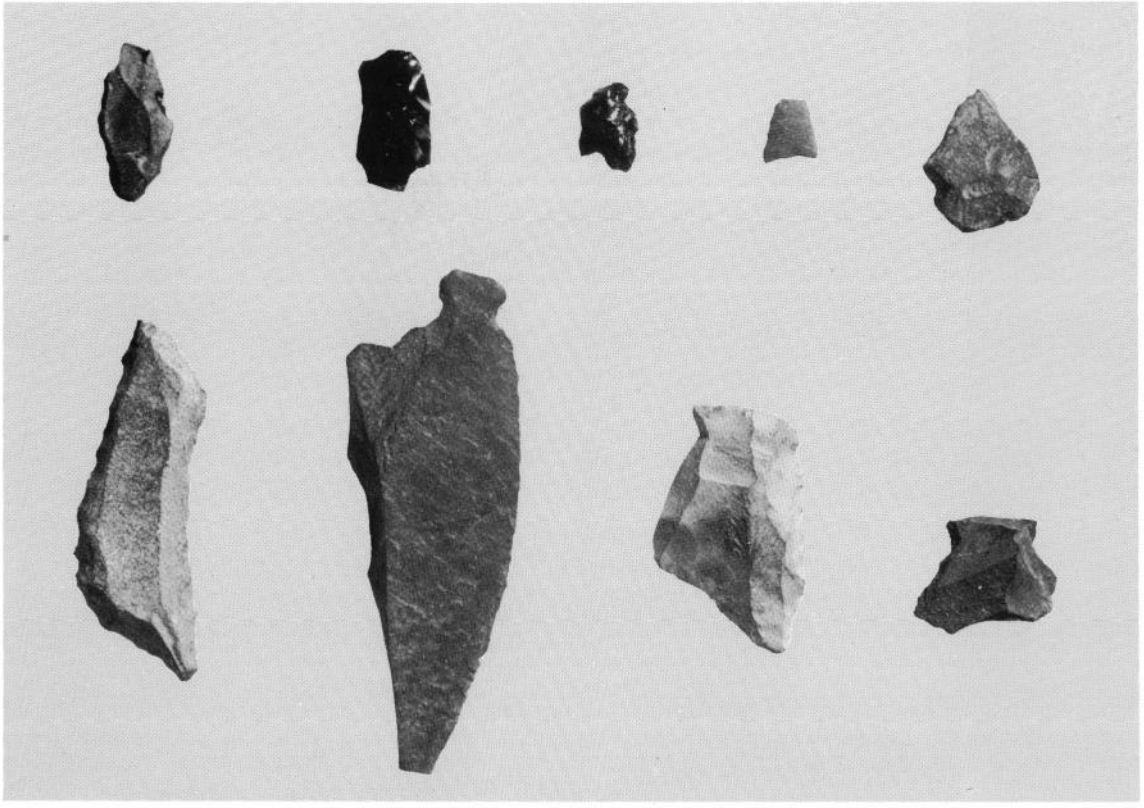
## 鳥ノ巣A地点遺跡



上　発掘区全景(南から)

下　溝状遺構(北から)

1　縄文土器



2　石　　器

# Ⅵ　鳥ノ巣B地点遺跡の調査

（第34—2地点）

筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

# 本　文　目　次

1. はじめに ……35
2. 層　　序 ……35
3. 遺　　物 ……37
4. おわりに ……39

# 図　版　目　次

本文対照頁
図版 1 (1) A 1～5・B 5 区全景　東から（橘昌信撮影）……36
(2) A 5～11・B 5 区全景北　東から（橘撮影）……36
図版 2 (上) A10～15区全景　東から（橘撮影）……36
(下) C～E区全景　東から（橘撮影）……36

# 挿　図　目　次

第 1 図　鳥ノ巣B地点遺跡調査地区全図（日本国有鉄道原図，橘昌信作成）……36
第 2 図　出土土器実測図（橘実測，製図）……37
第 3 図　石器実測図（橘実測，製図）……38

# Ⅵ　鳥ノ巣B地点遺跡の調査

## 1. はじめに

この遺跡は，福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣に所在する。調査は福岡県教育委員会文化課の委託を受け，別府大学考古学研究室が実施したものである。調査期間は昭和49年2月27日から3月18日までである。

この地点は，かって周辺から縄文時代の遺物が採集されており，鳥ノ巣遺跡の一部にあたると考えられた個所である。

今回の調査範囲は中央に農道が走り，さらに新幹線工事の資材置場として使用されていることや，また排水用の水路が掘られていることなので，実際の調査面積は極めて限られた小範囲とならざるを得なかった。

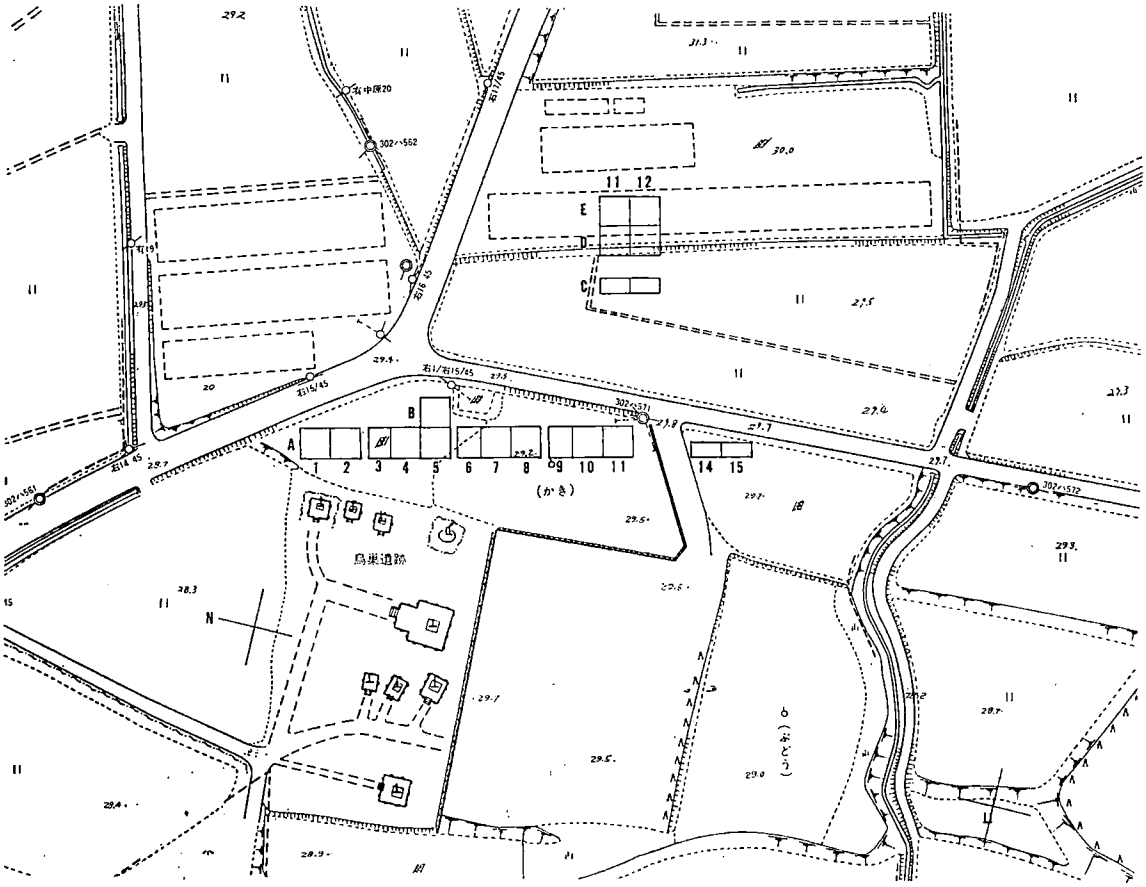
調査は南北に走っている基地本線センターに平行して，その西側に4㎡を1グリッドとして，北からA—1・2・3～15と4×60mの範囲を中心に発掘を進めた。これらのグリッドに接する東側にB—4・5・6の3グリッドの設定も行なったが，実際に発掘を行ったのはB—5グリッドのみであった。一方，基地本線センター東側に2×8mのC—11・12，さらにその東に8×8mのD—11・12，E—11・12の4グリッドを設定して，遺物包含層と遺構の検出に努めた。なお，調査関係者は次の通りである。

調査担当者

| | |
|---|---|
| 別府大学文学部助教授 | 橘　昌信 |
| 別府大学学生 | 永峰文隆・日野裕之 |
| | 町田利幸・森田孝 |

## 2. 層　序

今回調査を実施したグリッドの基本層序と遺物の出土状況は以下の様に認められた。第Ⅰ層は非常に軟質で黒褐色をした土で厚さは10～15cmである。この層から瓦・茶碗・鉄製の楔などが出土しており，縄文時代の遺物は全く認められない。第Ⅱ層は褐色～黒褐色をした砂質の土




第 1 図　鳥 ノ 巣 B 地 点 遺 跡 調 査 地 区 全 図 (1/1,000)

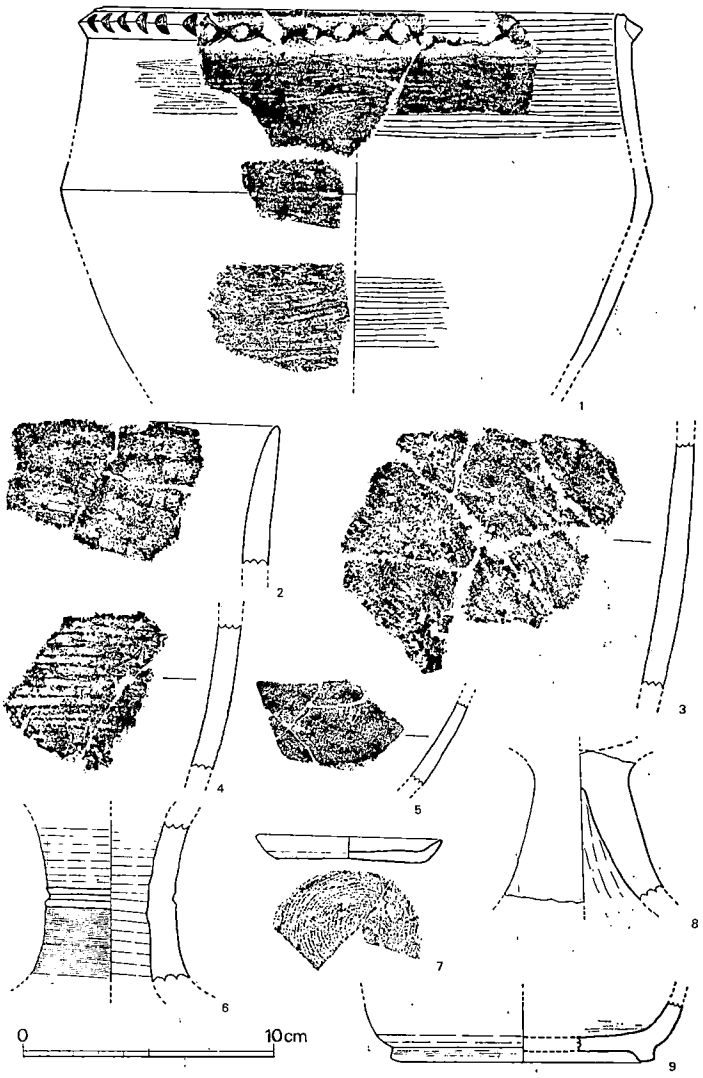
層で10～15cmである。ある限られた期間に堆積したせいかⅠ・Ⅲ層で見られた遺物がほとんど含まれていない。第Ⅲ層は黒色をした土層で瓦・茶碗それに土師器・弥生式土器などが混在した状態で出土するが，その数は少ない。第Ⅳ層は明褐色をした土層でこの層の上面から縄文時代晩期の土器片が少量出土し，それ以下の層からの遺物は皆無である。第Ⅴ層は黒色砂層，第Ⅵ層は灰色の砂層となっている。第Ⅳ層の上面において，1 m前後の土壙墓が20基余出土し，ピット内にはⅡ層の土が混在してつまっており，茶碗などの焼物，土師器や弥生式土器などの磨滅した小破片が少量出土している。また幾つかの土壙墓からは焼けた骨片が検出されている。

これらの土壙墓については，最近のものと考えられ，土地の古老の話しと一致するものである。すなわち今回設定した調査区は以前の墓地の一部になり，大正時代に西側の現在ある墓地に改葬したとの事である。

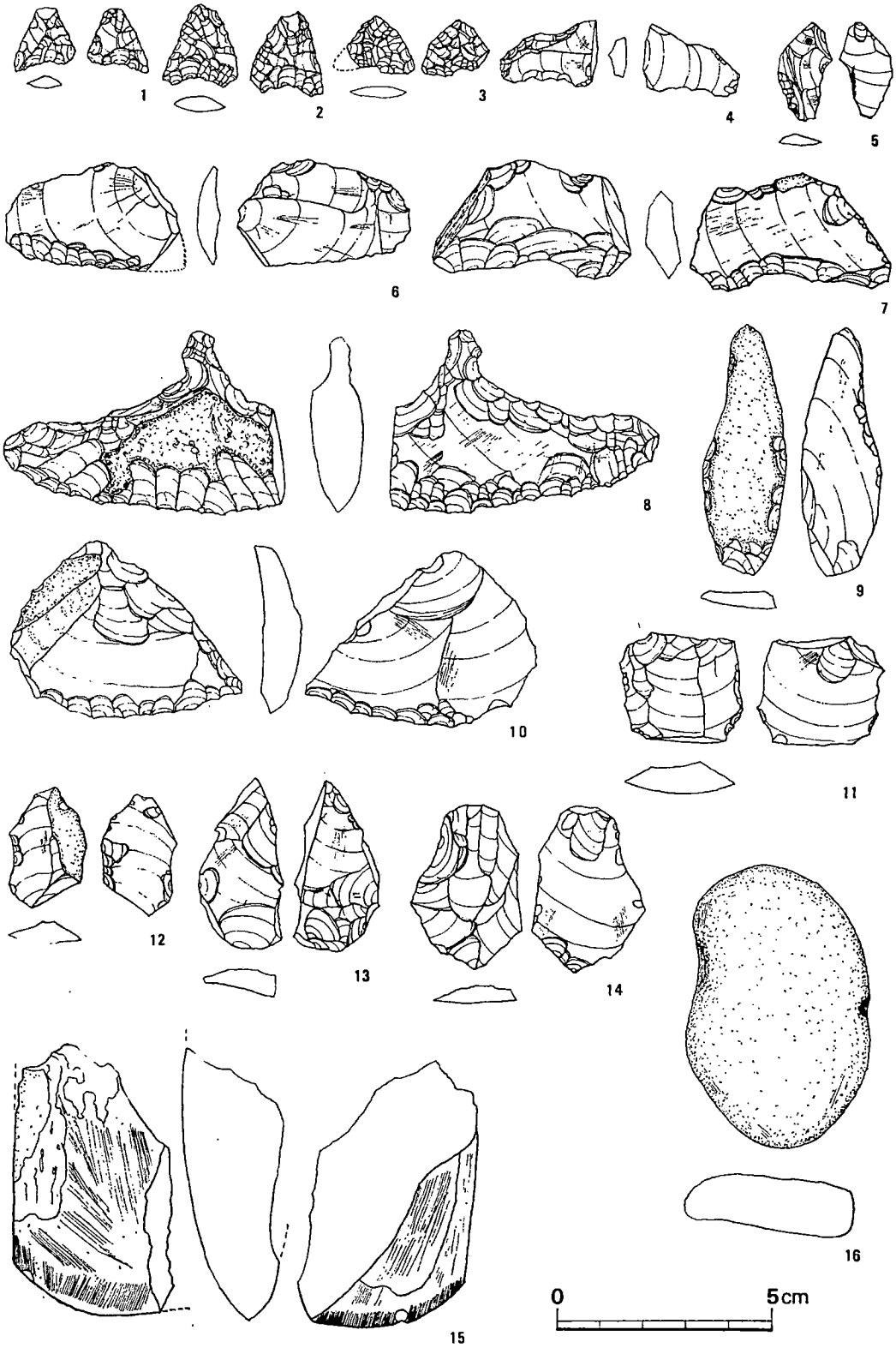
# 3. 遺　　物

## (1) 土　器（第2図1～9）

1は口縁部に断面三角形の刻目凸帯を有する深鉢形土器である。肩部はゆるやかな「く」の字状を呈するが，凸帯は施されていない。器壁の内外に横方向の条痕が認められ，外壁には煤が付着している。2は深鉢形土器の口縁部で，暗褐色を呈し，胎土には砂粒を多量に含み，焼成は良くない。3・4は深鉢形土器の胴部であり，胎土・焼成は2と同様である。外面には横・斜め方向の条痕が見られる。5は浅鉢形土器の胴部破片で，研磨が充分に行なわれており，胎土焼成共に良好である。以上5点はいずれも縄文時代晩期Ⅲ式（夜臼式）に比定されるであろう。Ⅳ層（明褐色土層）から出土している。6は須恵器の長頸壺の頸部でⅢ層より出土している。7は土師器の小皿で，底部に糸切りの痕跡が認められる。土壙墓内から出土であり，全体に磨滅が著しい。8は土師器の高杯で，胎土・焼成ともに良好




第2図　出土土器実測図（1/3）




第 3 図　石器実測図　(2/3)

で，黄褐色の色調を呈している。客土からの出土で，磨滅が顕著である。9は高台つきの須恵器の坏で，内外面は横ナデの調整が行われている。暗灰色を呈している。Ⅲ層から出土。

### (2) 石　器（第3図1～16）

1～3は黒曜石製の打製石鏃で，両面とも二次加工が施され，全体の形は二等辺三角形を呈しており，基部の抉入はいずれも浅い。6・7・9・10はいずれもサヌカイト製のスクレイパーで剝片の側辺に沿って二次加工が施され刃部を形成している。8は横型の石匙で一端を欠損している。横剝ぎに近いサヌカイトの剝片を素材に用い，二次加工は周辺部に集中しており，中央部にはそれぞれ自然面と主要剝離面の一部が残されている。4・5・11～14は不定形な剝片の一部に二次加工が施されている石器で，11のみサヌカイトを用いており他は全て黒曜石製である。15は表裏共丹念に研磨されている磨製石斧であるが，大半を欠損しているため全体の形状については知り得ない。刃部は使用のためと考えられる擦痕が顕著に観察される。蛇紋岩製。16は楕円形をした扁平な礫を用いた石錘。長軸の一辺にV字状の切目を施し，他の一辺は礫のもつ自然の凹みを利用している。

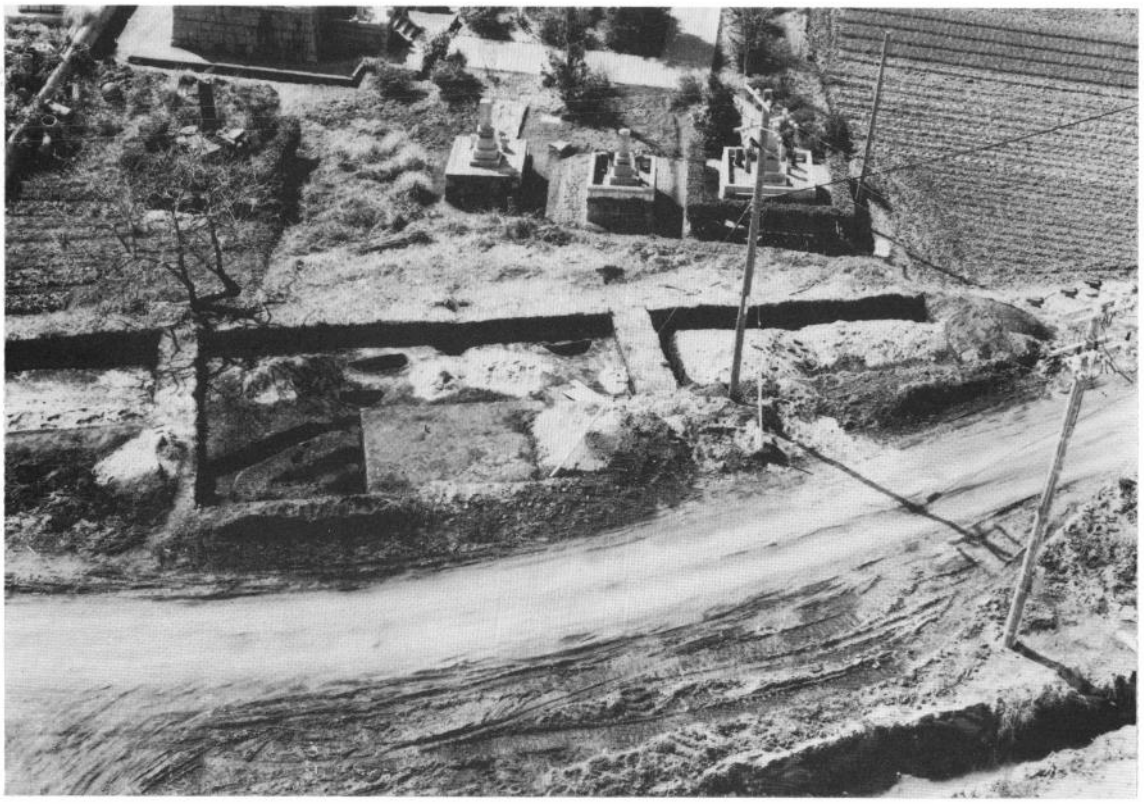
以上が主要な石器の全部であり，このうち1・2・4・6・10・12～14は調査区内の攪乱層から出土したものであり，他は遺跡周辺の採集資料である。

## 4. おわりに

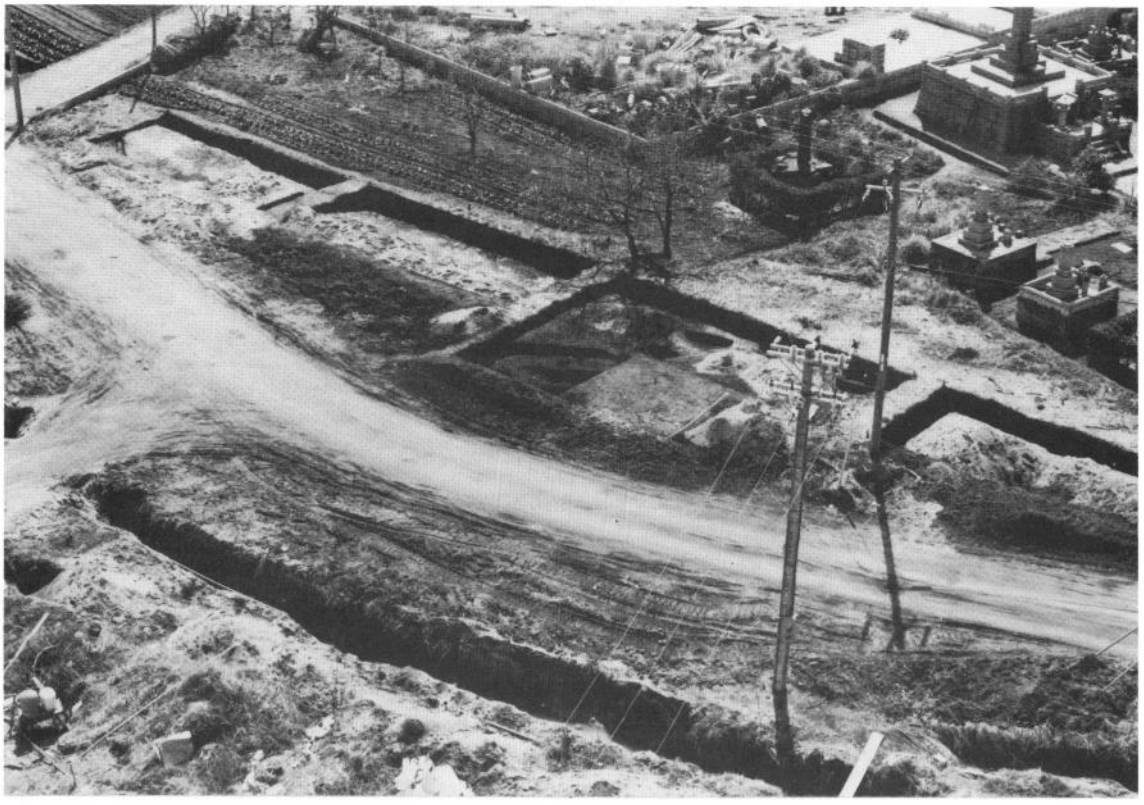
縄文時代の遺物包含層および遺構の把握を目的に発掘が進められたが，全く認めることができなかった。調査区の一部でⅣ層上面において，縄文時代晩期の遺物が極めて少量出土したのみであり，大部分は後世の攪乱を受けていた。攪乱を受けている土層中からも遺物はほとんど見られず，鳥ノ巣遺跡の範囲からはずれているものと推定される。先に実施された第34―1地点の調査結果や以前の表採から考え合わせると，鳥ノ巣遺跡の中心的な拡がりは，今回調査を行った地点の南側の浅い谷に接した個所が予想されるのである。（橘）

# 図　　版

## 鳥ノ巣B地点遺跡



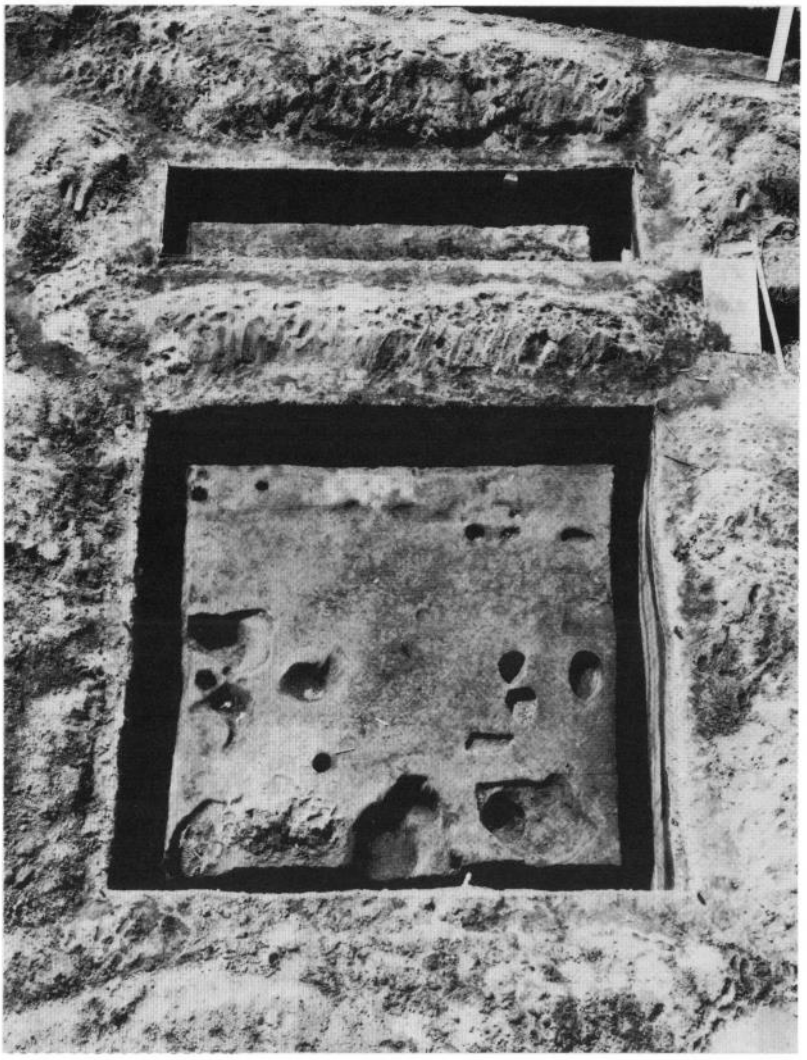
1　A 1 ～ 5 ・ B 5 区全景(東から)



2　A 5 ～11 ・ B 5 区全景(北東から)

上　A10～15区全景
（東から）

下　C～E区全景
（東から）



# Ⅶ 立石遺跡の調査

（第35地点）

筑紫郡那珂川町大字中原字立石

# 本　文　目　次

1. はじめに……41

2. 遺構と遺物……44

(1) 溝状遺構……44
(2) 方形周溝……45
(3) 包含層出土の石器……46

3. おわりに……47

# 図　版　目　次

本文対照頁

図版1（上）立石遺跡調査地区全景（櫻井康治撮影）……43
（下）溝状遺構（櫻井撮影）……44
図版2 (1) 中央南北トレンチ全景　南から（櫻井撮影）……44
(2) 東側南北トレンチ全景　南から（櫻井撮影）……44
図版3（上）方形周溝全景（櫻井撮影）……45
（下）西側南北トレンチ全景（櫻井撮影）……44

# 挿　図　目　次

第1図　立石遺跡地形図（日本国有鉄道原図，高田弘信作成）……42
第2図　立石遺跡遺構配置図（櫻井康治・池辺元明・三津井知廣・桑田和義実測，櫻井製図）…43
第3図　溝状遺構土層断面図（池辺実測，白水千賀子製図）……44
第4図　溝状遺構・方形周溝出土土器実測図（櫻井実測，製図）……45
第5図　方形周溝実測図（櫻井実測，製図）……46
第6図　包含層出土石器実測図（木下修実測，製図）……46

# Ⅶ　立石遺跡の調査

## 1. はじめに

立石遺跡は，筑紫郡那珂川町大字中原字立石に所在する。遺物散布地（第35地点）として発掘調査を実施した。遺跡一帯は，すでにブドウ畑として開墾されており，遺構の残存状態には期待がもてない状況であった。

発掘調査は，昭和48年1月16日から2月10日まで実施した。調査員は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課

| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 植田　實 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技　師 | 柳田康雄 |
| | 調査員 | 櫻井康治 |
| | 調査補助員 | 池辺元明 |
| | 同 | 三津井知廣 |
| | 同 | 桑田和義 |

調査日誌

1月16日　発掘調査区に，南北方向及び東西方向の十字形トレンチを，巾2*m*で設定した。

1月17日　表土の堆積は薄く，その下は直ちに地山であった。南北トレンチの南端並びに東西トレンチの中央に溝状の遺構が確認され，さらに南北トレンチの北端方2*m*を発掘すると，表土下は茶褐色砂質土であり，剝片鏃が1点出土した。

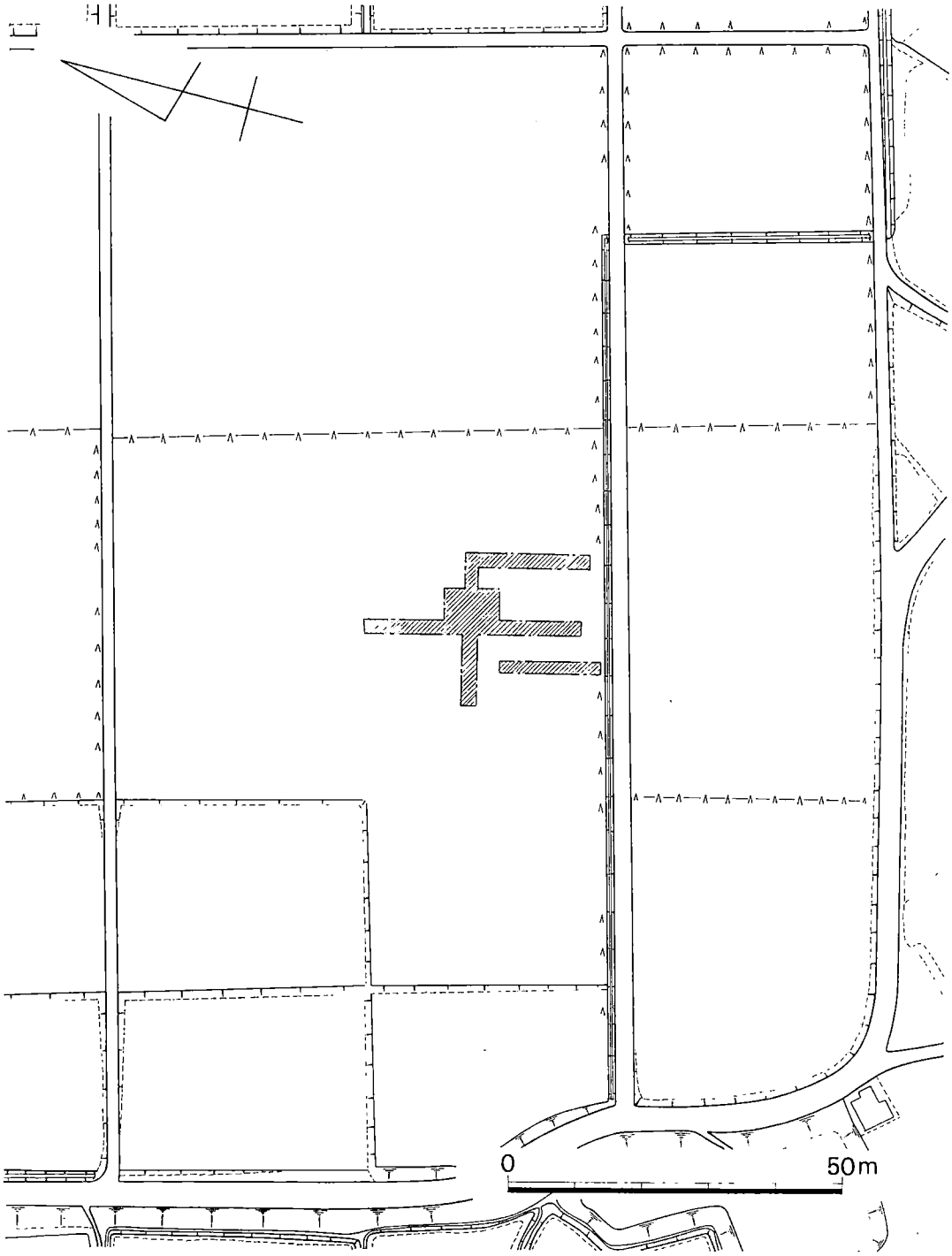
1月19日　東西トレンチ中央で確認した溝状遺構を追求するため，トレンチを拡張した。

1月22日　トレンチを拡張した結果，溝状遺構は方形の周溝になり，西側の溝は切れている。南北トレンチで確認した溝状遺構は，深さ約1.5*m*，巾約6.5*m*のU字溝である。

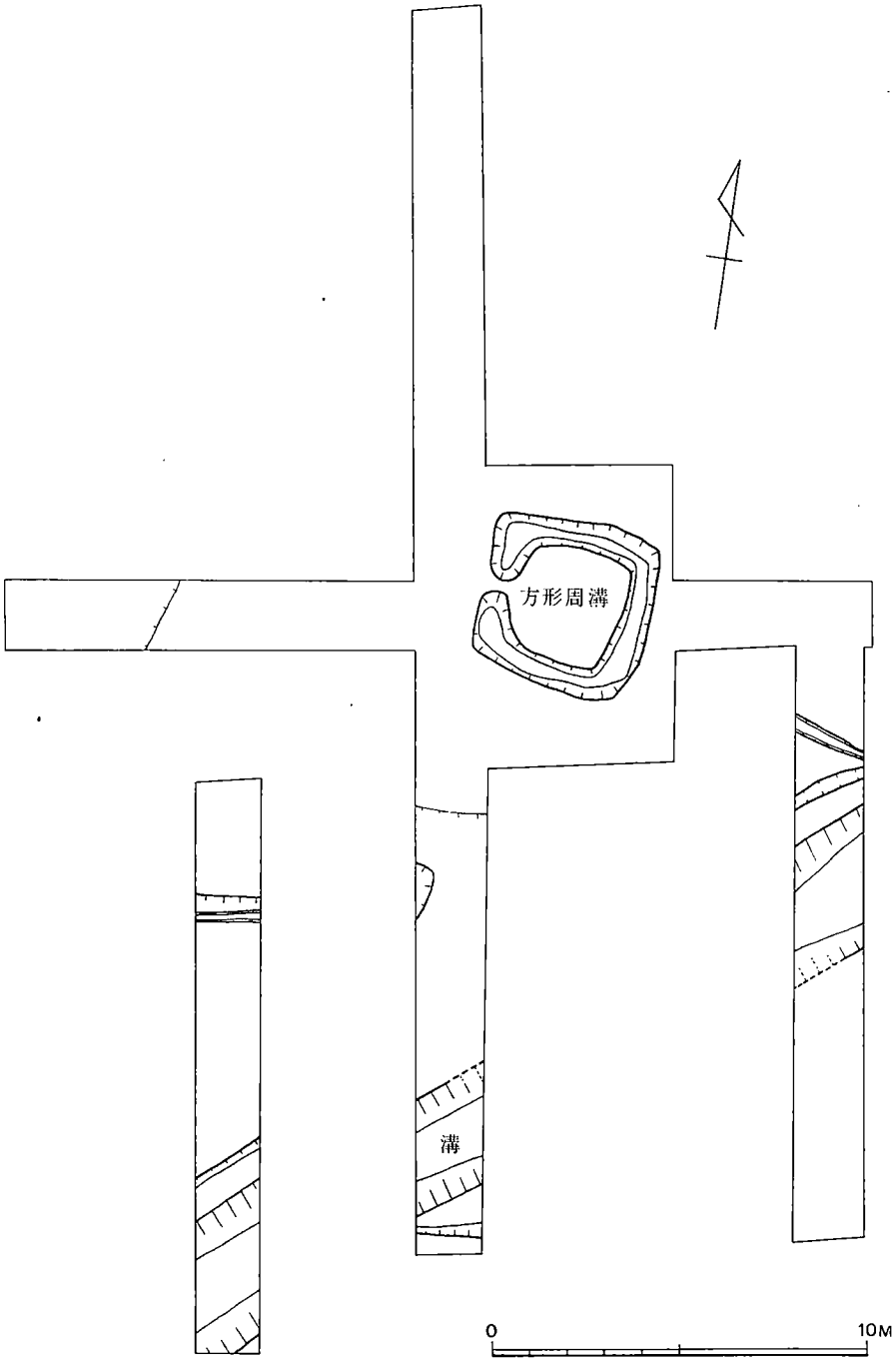
1月26日　U字溝の走向を確認するために，南北トレンチと平行に東側と西側にトレンチを設定する。

1月29日　写真撮影

2月10日　平面測量並びに方形周溝の実測図作成を行う。




第 1 図　立 石 遺 跡 地 形 図 (1/1,000)

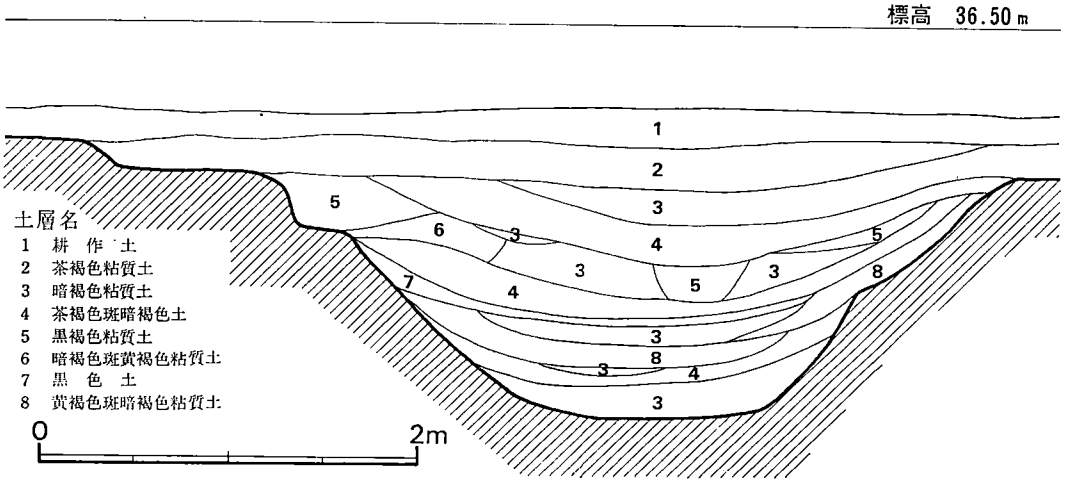



第 2 図　立 石 遺 跡 遺 構 配 置 図 (1/200)

# 2. 遺構と遺物

## (1) 溝状遺構（図版1～3，第2・3図）

立石遺跡において，方向性の異なる3条の溝状遺構を確認した。しかしそのうちの2条は，小規模な溝で個別のトレンチに確認されるのみで，他のトレンチまではのびておらず，如何なる性格のものかは不明である。調査区南端で確認した溝状遺構は，走向N－50°－Eを示すが，若干北側へ弯曲しているようにも思われる。巾は約6.5*m*，深さは現地表から約1.7*m*を測り，前述の溝に比べて大規模なものである。出土遺物は，大溝から須恵器壺片1片と土師器片が少量発見された。




**第3図** 溝状遺構土層断面図 (1/40)

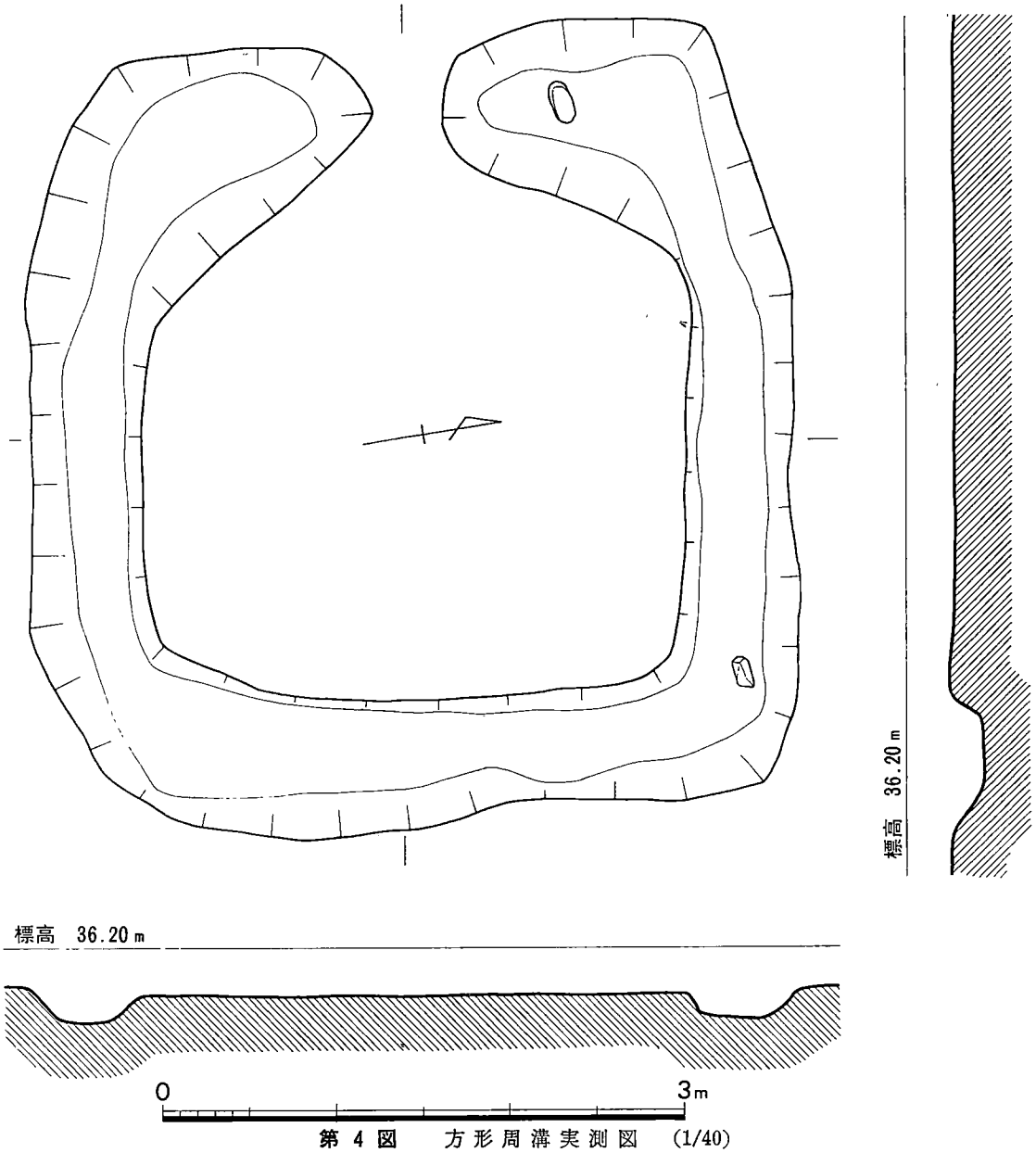
出土遺物

**須恵器**（第5図1） 底部の小破片のみで全体の器形は不明であるが，壺の底部ではないかと思われる。調整は，外面はヘラによって入念に調整が施されているが，内面は横ナデのみで輪積の痕跡が残っている。胎土は，砂が若干混っているが普通程度のものであろう。焼成はひじょうに良好で，器壁は堅緻である。

**土師器**（第5図2） 大形甕の口縁端部の小破片である。器壁は摩耗が著しいが，内面は横ナデ調整，外面は粗いハケ目による異なった方向の調整が施されている。焼成火度低く軟質で，色調は淡黄褐色を呈し，胎土に砂粒を混える。他に土師器甕の小破片が少量出土している。

### (2) 方形周溝（図版3－上，第4図）

発掘調査区のほぼ中央に位置し，確認されたのは1基のみである。規模は南北約 4.4*m*，東西約4.5 *m*の隅丸方形の溝で，現存では巾約60～75*cm*，深さ約17～25*cm*を測る。溝は完全に囲繞せず，西側で1個所切れており，この部分はブリッヂ状をなしている。周溝内に埋葬の施設

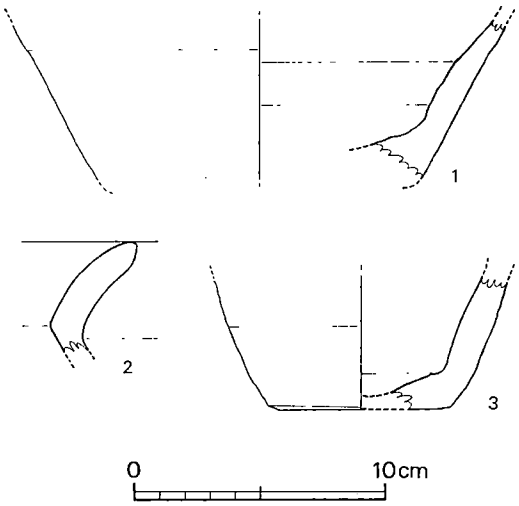



第 4 図　方形周溝実測図　(1/40)

等は確認できない。過去の開墾によって，相当削平を受けたものであろう。溝ももっと深いものであったと考えられる。弥生時代の方形周溝墓と比較すると，ひじょうに小形のものである。出土遺物としては，周溝内より須恵器片が1片発見されたのみである。

出土遺物

**須恵器**（第5図3）　周溝内の黒褐色土中から出土したものである。壺の底部で，胎土は砂粒を少量含む。底部及び胴部下端はヘラ削りが施され，胴部は格子目状のタタキ調整が施されている。色調は，器壁内外が青灰色を呈し，器肉内部は褐色を呈し，焼成良好とはいえないが，堅緻である。　（櫻井）

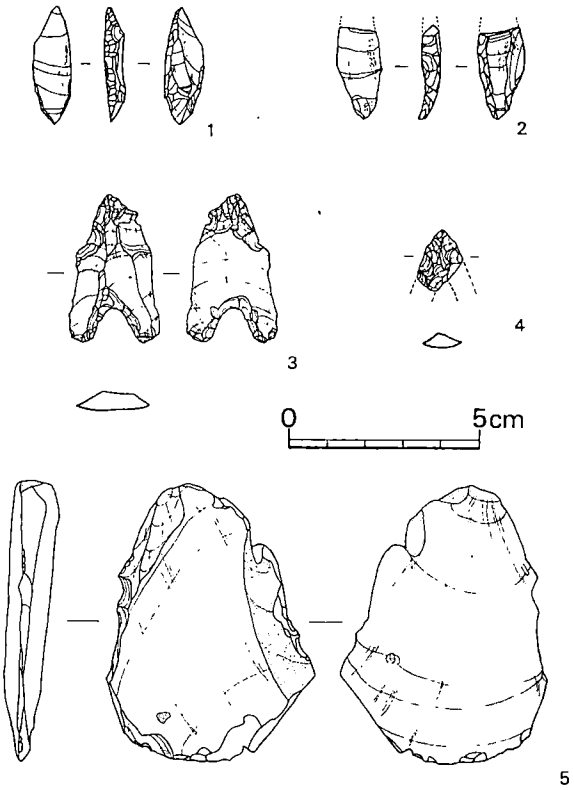



第 5 図　出土土器実測図（1/3）

### (3)　包含層出土の石器（第6図）

**ナイフ形石器**（1・2）　立石遺跡の調査終了後，全面的に土取りが行われた。その削平時に採集したのが以下の石器である。出土層位は黄白色の粘土質の土が付着していた。

1は黒色黒曜石製ナイフ形石器の完形品。縦長の剝片を素材とし，左側縁の全部と右側縁の⅓に刃潰し加工を施こす。なお左側縁の⅓から上の刃潰しは表・裏から行われている。先端，基部とも鋭く尖る。全長3.1㎝，最大厚0.5㎝を測る。2もナイフ形石器で基部側の破片，やはり縦長の剝片を用いている。黒曜石製で風化している。




第 6 図　包含層出土石器実測図（1/2）

**石鏃・スクレイパー（1～3）**　1は剝片鏃である。縦長剝片を素材とする。両面共，先端とわたぐりに細部加工を施している。長さ39.3㎜，幅中部で20㎜，脚部で24.3㎜，厚さ4.0㎜，わたぐりの長さ9.7㎜，幅16.6㎜，重量3.4ｇである。2は打製石鏃である。脚部が欠損している。黒曜石製。

3はサヌカイト製のスクレイパーである。縦長剝片を素材としている。左側辺に大きく剝離を施し，右側辺に細かい加工を行っている。主要剝離面は加工を施されていない。長さ73㎜，幅45.5㎜，厚さ8.7㎜，重量39.1ｇである。（木下）

## 3. おわりに

本遺跡で検出された溝状遺構及び方形周溝等は，出土遺物からみると中世に属する遺構と思われる。方形周溝については，類似の遺構として，筑紫野市針摺「野田墳墓群」（註1）中の火葬墳墓（中世）に，規模は本遺跡例よりやや大きいが，方形に周溝を囲らし，その一辺に通路を設けたものがある。また大牟田市四箇「年の神遺跡」（註2），三重県鈴鹿市「東庄内B遺跡」（註3）においては火葬場址とみられる方形周溝があり，これは本遺跡例とほぼ同規模であるが，ここでは通路を持たず，コーナーに各1個の柱穴を有している。

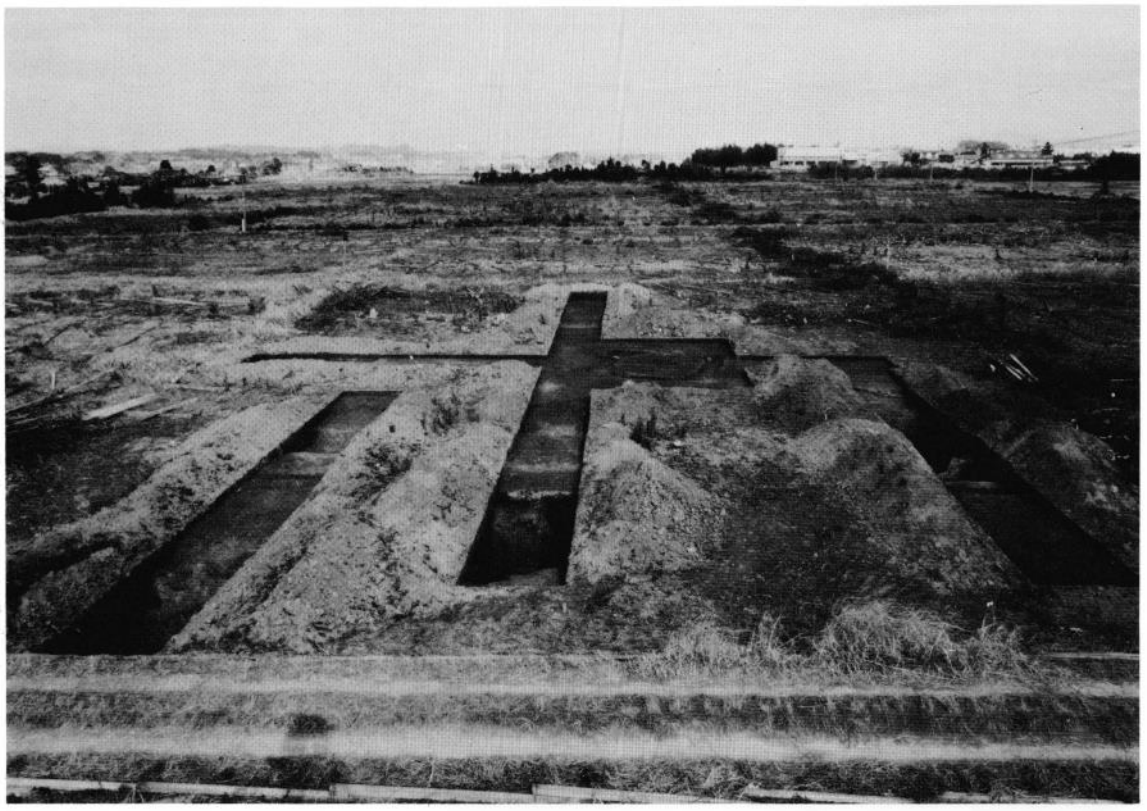
以上のようなことから，本遺跡の方形周溝は上部削平を受けており，規模・形態も前述の各遺構と若干相違する点もあるが，性格的には火葬墳墓ないし火葬場と考えられるのではないかと思われる。

本遺跡の南側を東西に走向する溝状遺構については，方形周溝と直接に関連するものかどうか不明であるが，時期的にさほど開きはないものと考えられる。（櫻井）

註1　渋谷忠章・上野精志『Ⅲ日本各地の墳墓―九州』（新版仏教考古学講座第7巻・墳墓）昭和50年
2　福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―Ⅱ―』　1971
3　森郁夫『Ⅲ日本各地の墳墓―近畿』（新版仏教考古学講座第7巻・墳墓）昭和50年

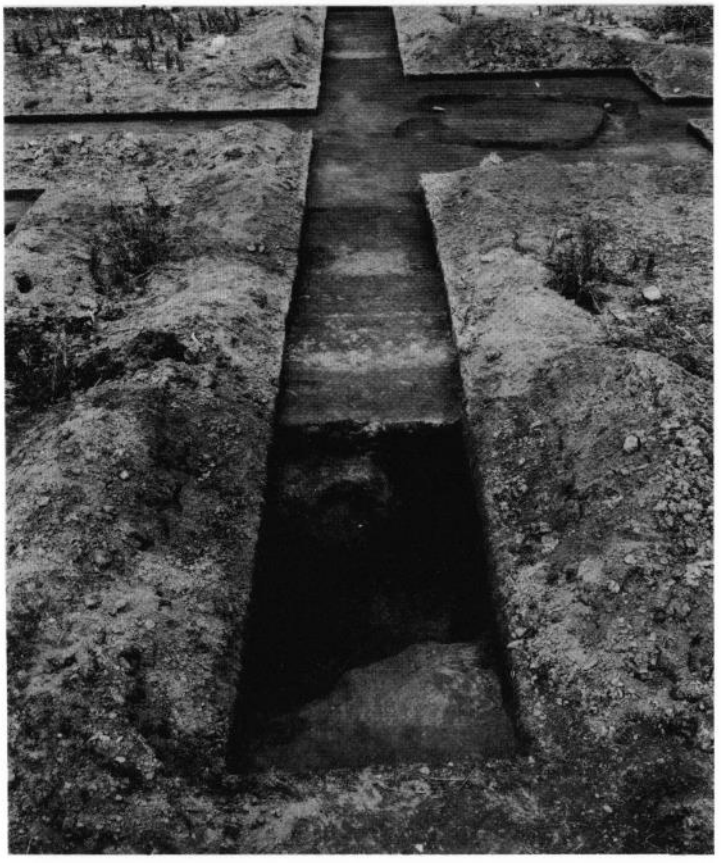
# 図　　版

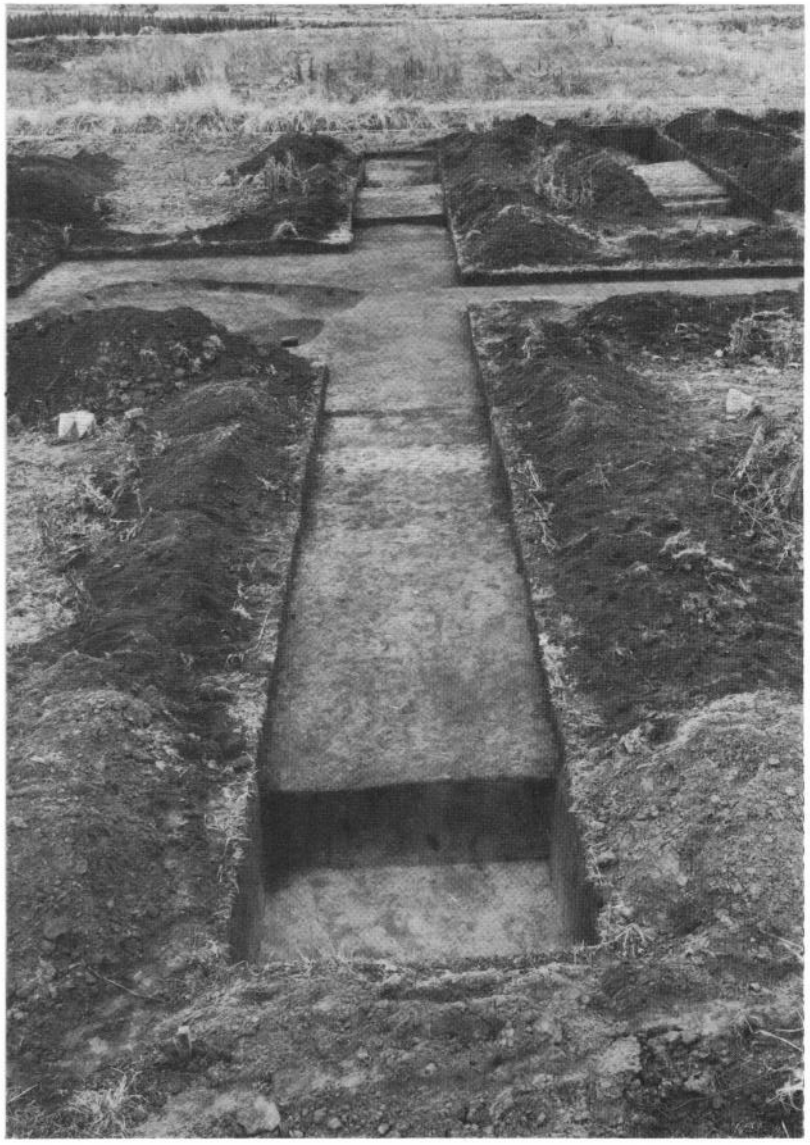
## 立　石　遺　跡



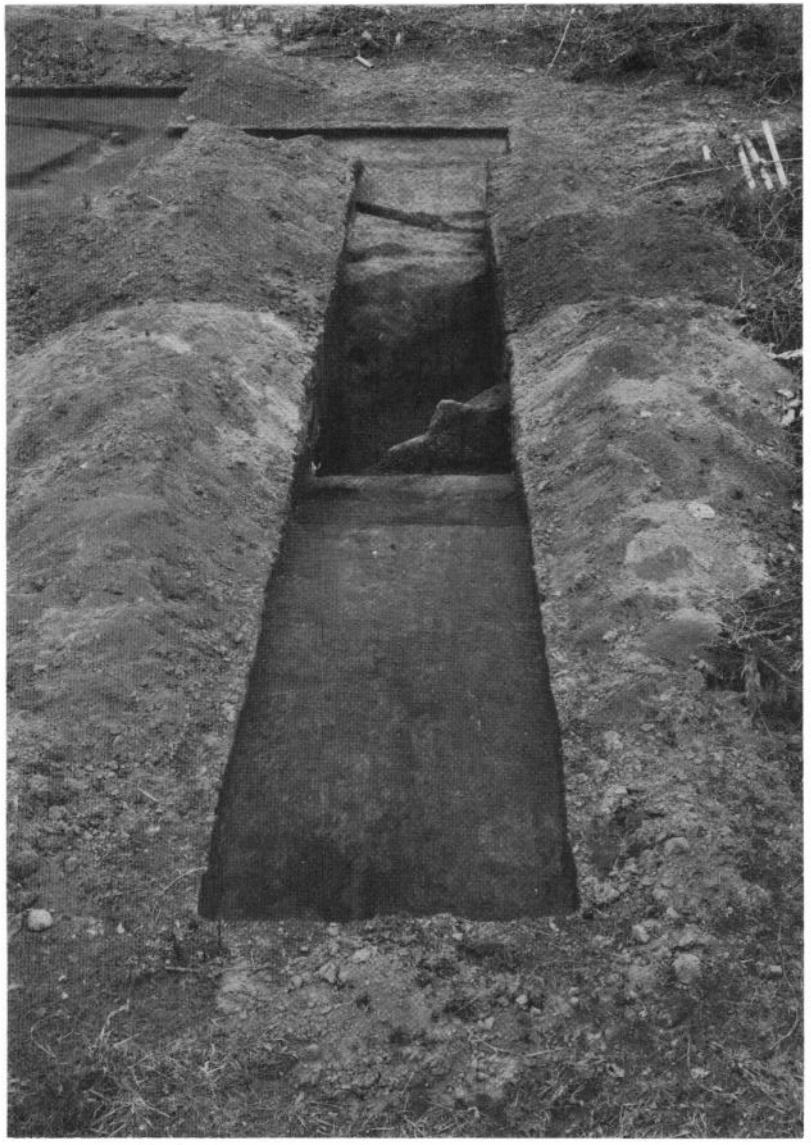
上　立石遺跡調査地区全景

下　溝状遺構





1　中央南北トレンチ全景(南から)



2　東側南北トレンチ全景(南から)

上　方形周溝全景

下　西側南北トレンチ全景

# Ⅷ　立ノ口の石碑の調査

（第36地点）

筑紫郡那珂川町大字中原字立ノ口

# 本　文　目　次

1. はじめに……49

2. 遺構の概要……49

3. おわりに……49

# 図　版　目　次

本文対照頁

図版1　(1)　立ノ口の石碑と観音山（井上裕弘撮影）……49

(2)　石碑前面（井上撮影）……49

(3)　石碑左側面（井上撮影）……49

# 挿　図　目　次

第1図　立ノ口の石碑拓影（八尋恵美子・河鍋美智子・穴井栄子手拓）……50

# Ⅷ　立ノ口の石碑の調査

## 1. はじめに

この石碑は，福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字立ノ口に所在する。中原集落の中央をぬけて，標高169 *m*の観音山の山麓にある真言宗大徳寺に続く主道が，立ノ口付近で道幅2 *m*の農道と交差する。その辻にあたる所にこの石碑は立てられていた。調査は昭和48年8月14日の1日間で実施した。

福岡県教育委員会文化課

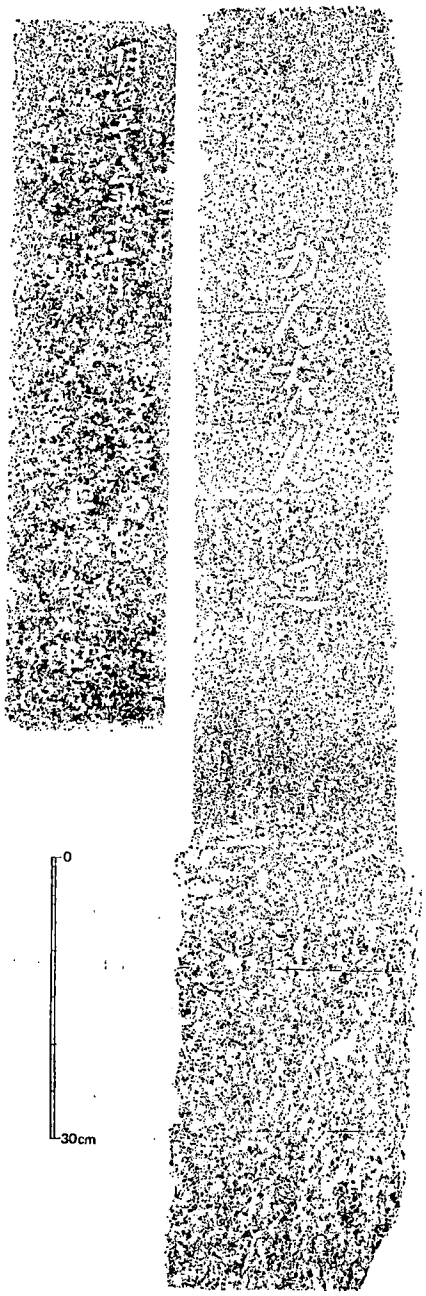
| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 植田　實 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技　師 | 井上裕弘 |

## 2. 遺構の概要

**石　碑**（図版1，第1図）　はいわゆる方柱状をなす切り石のもので，頭部は四角錐の山形をなす。前面には『かんをん道』，左側面には『明治18年12月・博多魚市場 磯部作次郎』と彫刻されている。石碑の高さは地表面から0.92*m*で，埋設された部分を含めると1.40*m*になる。また柱状の一辺は21*cm*の四角形である。石碑の面はきれいに面取りされているが，埋設部は荒わりのままである。石碑前面の『かんをん道』の刻字は黒色塗料で黒く塗りつぶされていたが，大徳寺の僧侶の話によると当初からのものではないらしい。石材は花崗岩である。

## 3. おわりに

この石碑は，観音山山麓にある真言宗大徳寺への道標として明治以降機能してきたものである。左側面に刻まれた『博多魚市場　磯部作次郎』の銘は，この石碑の寄進者を示すものと思




第１図　立ノ口の石碑拓影（1/8）

われる。この大徳寺を含めた観音山は古くからこの地域一帯の民衆の信仰の霊山として広くあがめられてきた。那珂川新四国八十八カ所めぐりの第１番霊地としてこの観音山があったこともこの道標との関連で考える必要があろう。　（井上）

# 図　　版

立ノ口の石碑

1　立ノ口石碑と観音山への道

2　石碑前面

3　石碑左側面

# Ⅸ　井手ノ原A地点遺跡の調査

（第44地点）

筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原

# 本　文　目　次

1. はじめに……51

2. 遺構と遺物……51

3. おわりに……57

# 図　版　目　次

本文対照頁

図版1　(1)　井手ノ原A地点遺跡発掘区全景　南から（井上裕弘撮影）……51

(2)　溝状遺構内土器出土状態（井上撮影）……53

2　(1)　縄文土器（岡紀久夫撮影）……53

(2)　石　器（岡撮影）……54

3　須恵器（岡撮影）……56

# 挿　図　目　次

第1図　井手ノ原A地点遺跡地形図（日本国有鉄道原図，高田弘信作成）……52

第2図　井手ノ原A地点遺跡遺構配置図（井上裕弘・櫻井康治実測，荒武麗子製図）……53

第3図　溝状遺構土層断面図（櫻井実測，河鍋洋子製図）……54

第4図　縄文土器実測図（井上実測，製図）……54

第5図　石器実測図（荒武実測，製図）……55

第6図　須恵器実測図（井上実測，製図）……56

# 表　目　次

表　1　石器計測表（荒武麗子作成）……55

# Ⅸ　井手ノ原A地点遺跡の調査

## 1. はじめに

この遺跡は，福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原に所在する。観音山の山麓からつづく扇状台地の西側緩斜面に位置している。南東には深原遺跡（註1），観音山古墳群（註2），東側には井手ノ原遺跡（註3）が接近している。東側につづく台地との段差が約1.5*m*と大きく，明らかに畑地として利用する近年に開削していることが判る。従って，調査地区の東半での遺構の残存は不可能と考え，遺構確認のためのトレンチを調査地区の西側に本線センターに沿って設定した。また，開削の状況と遺構の残存を確めるために，それに直交するトレンチを6*m*おきに設定した。その結果，調査地区の西半はやはり畑の開削により完全に削平されていたため遺構は確認できなかった。しかし，西側からは奈良時代の溝状遺構2条と時期不明のピットが数個検出された。だが，それもかろうじて遺構の下面を残すのみで，上面の削平が著しいことが判る。

調査は，昭和47年9月26日から10月13日の期間で，一部，井手ノ原B地点遺跡の調査とも併行して実施した。なお，調査関係者は次の通りである。

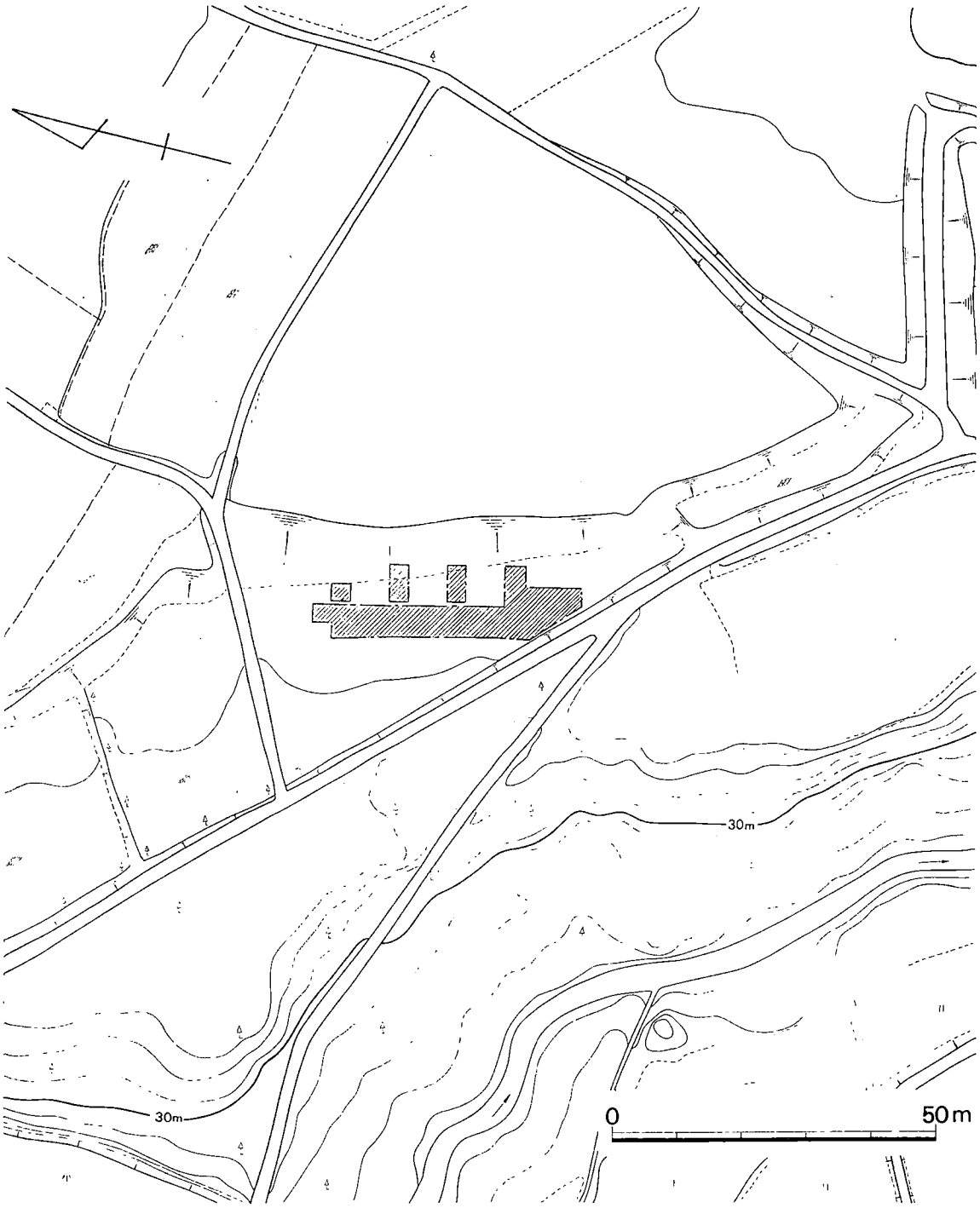
福岡県教育委員会文化課

| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 小川浩一郎 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技　師 | 井上裕弘 |
| | 調査員 | 櫻井康治 |

## 2. 遺構と遺物

### 溝状遺構（図版1，第2・3図）

ほぼ南北に走る溝で2条検出された。東側の溝は溝底をわずかに残すのみで，発掘区南端から8.7*m*の所で消失している。溝の幅は，最も広い所で0.7*m*，深さ3*cm*と極めて浅い断面低平



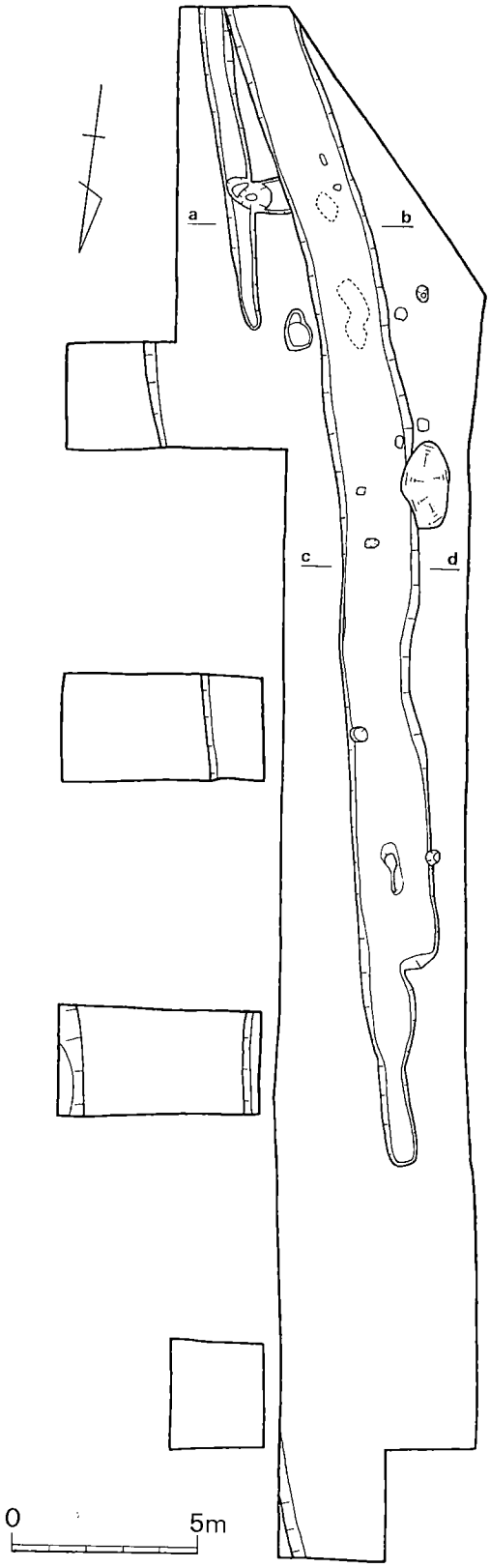

第 1 図　井手ノ原A地点遺跡地形図 (1/1,000)

なU字状をなす溝である。遺物は縄文土器・土師器・須恵器の細片が若干出土したのみである。

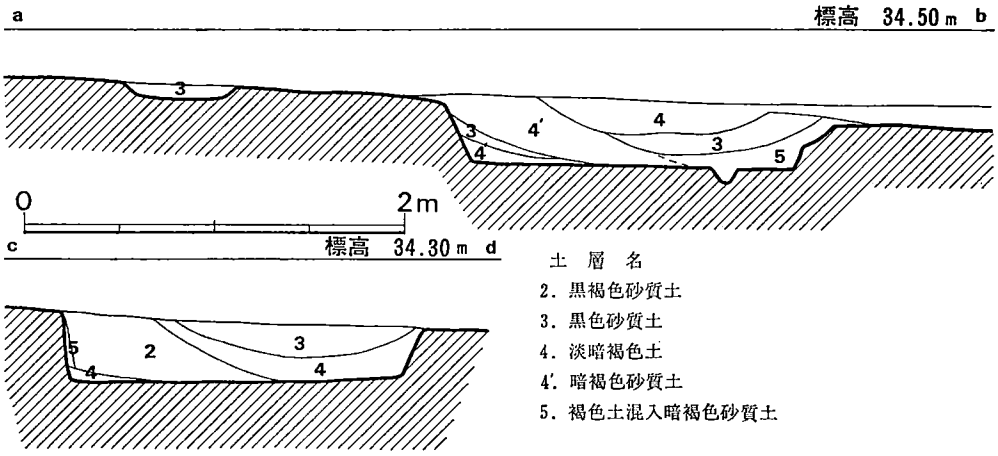
一方，その西側から検出された残りの良い溝は，最も広い所で幅約2.30$m$，深さ35$cm$を測り溝底が平坦な断面逆台形状を呈す。この溝も，発掘区南端から31.5$m$の所で浅くなり消失している。溝内の堆積土は場所によって若干異なるが，上層から黒褐色砂質土が厚く堆積し，その下に黒色土，暗褐色土が堆積している。遺物の大半は溝内南半から検出されたもので，溝底より若干浮いた状態で出土した。遺物としては奈良時代の須恵器・土師器の破片資料である。他に縄文時代後，晩期の土器片・石器等も出土した。

出土遺物（図版2，第4・5図）

**縄文土器**（第4図）　1～5は深鉢形土器，6は浅鉢形土器の破片資料である。1は口縁部が波状をなすと思われる深鉢形土器で，口縁部外面には4条のヘラ描き波条文が施されている薄手の土器である。調整は内外ともナデ仕上げで，色調は暗茶褐色を呈す。2は外面貝殻条痕を施した深鉢で，口縁端部と内面はヨコナデして仕上げた黄灰色を呈す焼成良好な土器である。3は深鉢と思われる胴下半の破片資料で，いわゆる無文土器といえる。胎土には多くの砂粒と雲母を含む茶褐色を呈す土器である。4・5は深鉢形土器の底部の破片資料である。4は底部が外方に強く開くタイプの平底であるのに対し，5は普通の平底である。復原底径は，4が9.6$cm$，5が9.1$cm$

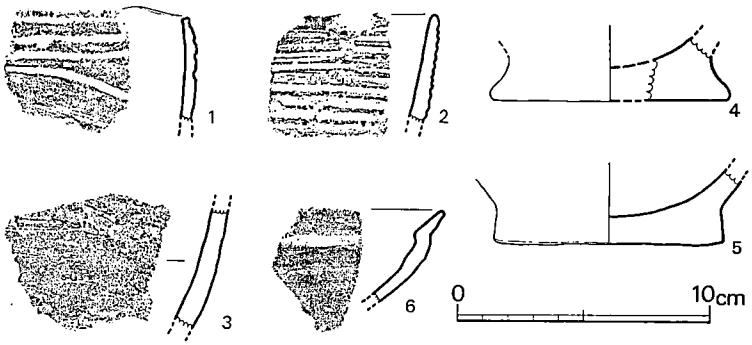



第 2 図　井手ノ原A地点遺跡遺構配置図（1/200）




第 3 図　溝状遺構土層断面図 (1/40)

を測る。色調は両者とも茶褐色を呈し，胎土には多くの砂粒・雲母を含んでいる。6はいわゆる精製の浅鉢で，口縁部内外はヨコナデ，体部内外はナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈し，焼成は良い。これらの土器は，6が晩期を思わせる他は全て後期のものといえよう。　(井上)




第 4 図　出土縄文土器実測図 (1/3)

**石　器**（図版2—2，第5図）

不定形石核（1）　黒曜石製。上下両方向から，ほぼ交互に剝いでいる。

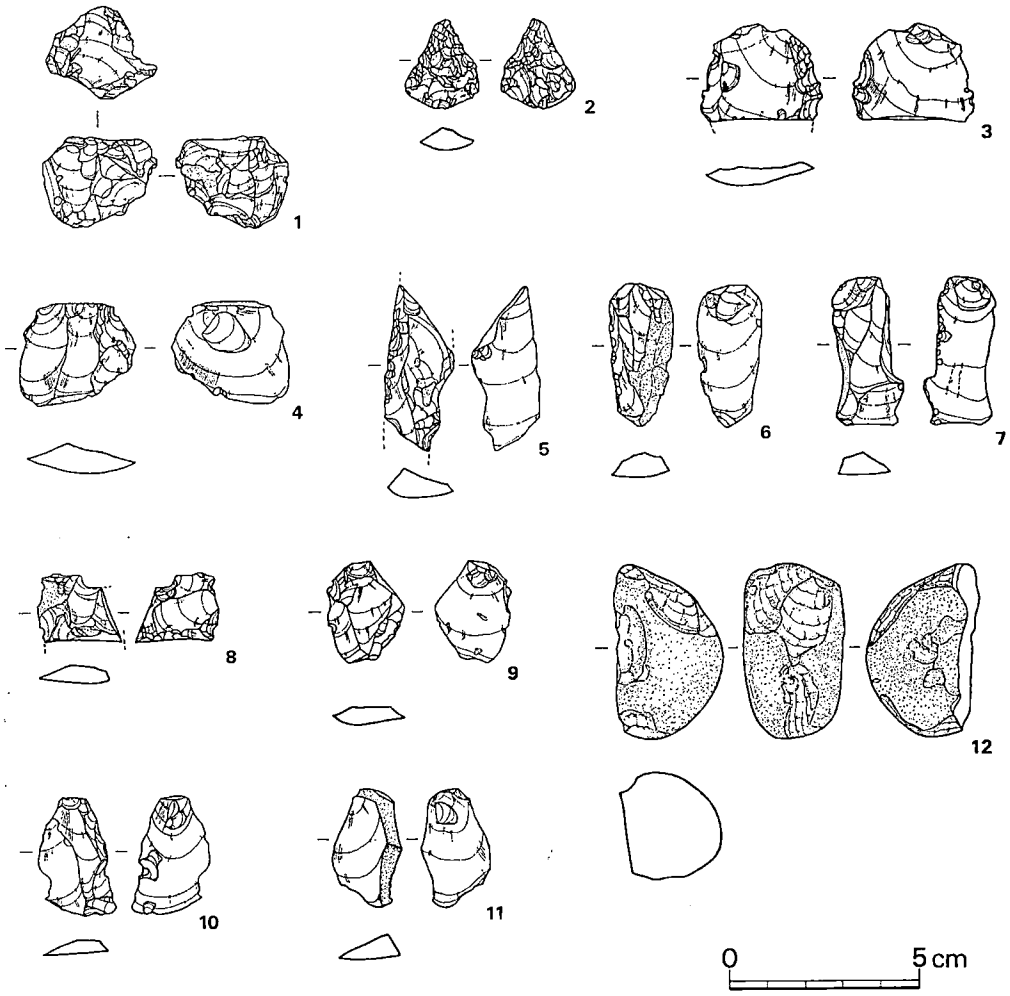
石　鏃（2）　黒曜石製の打製石鏃。基部は丸味を帯びてふくらみ，わずかに凹みがみられる。

二次加工のある剝片（3～11）　3は折断剝片である。主要剝離面側より力を加えて折っている。正面右側辺および裏面左側辺に二次加工を施す。黒曜石製。4も同じく横幅の広い剝片で，石材は黒曜石である。細かい刃こぼれがみられる。5～11は，二次加工，刃こぼれ等のある剝片である。

くぼみ石（12）　円礫の中央に，打撃を加えて凹めている。この凹みは表裏共につけられており，周辺にも加工がみられる。半割している。　(荒武)

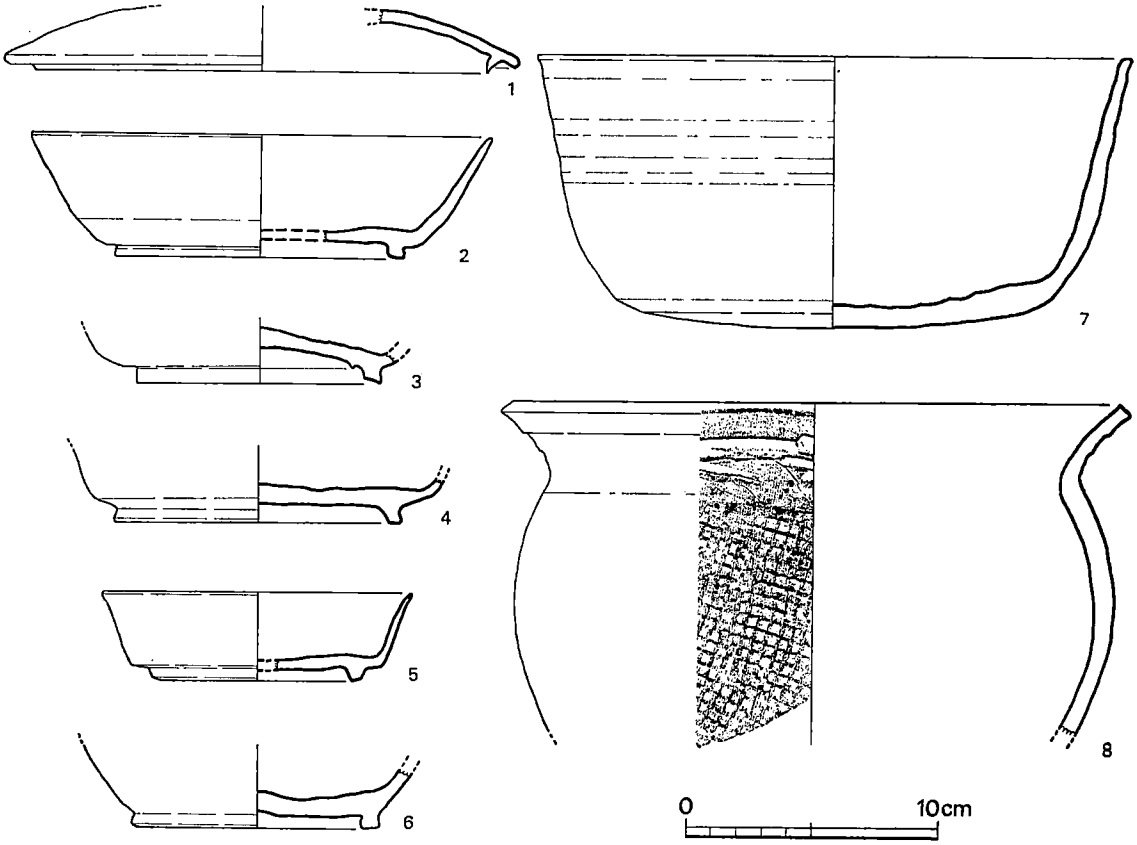
表 1　石 器 計 測 表　（単位mm・g）

| 形　態 | 実測図No. | 出土地点 | 層序 | 長 さ | 幅 | 厚 さ | 重 量 | 石 質 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 不定形石核 | 1 | 溝　内 | 黒色土 | 23.1 | タテ 29.9<br>ヨコ 22.0 | | 12.9 | 黒曜石 |
| 打製石鏃 | 2 | 〃 | 〃 | 22.8 | 中部 16.2<br>最大 19.4 | 6.35 | 1.8 | 〃 |
| 二次加工のある剝片 | 3 | 〃 | 〃 | 25.2 | 28.7 | 4.0 | 3.8 | 〃 |
| | 4 | 〃 | 〃 | 27.4 | 29.1 | 6.9 | 4.9 | 〃 |
| | 5 | 〃 | 〃 | 43.6 | 17.5 | 7.2 | 4.6 | 〃 |
| | 6 | 〃 | 〃 | 37.8 | 16.1 | 5.8 | 4.2 | 〃 |
| | 7 | 〃 | 〃 | 38.9 | 19.0 | 6.5 | 3.8 | 〃 |
| | 8 | 〃 | 〃 | 18.7 | 19.0 | 4.4 | 2.0 | 〃 |
| | 9 | 〃 | 〃 | 27.2 | 19.5 | 4.2 | 2.6 | 〃 |
| | 10 | 〃 | 〃 | 31.1 | 18.0 | 3.1 | 2.4 | 〃 |
| | 11 | 〃 | 〃 | 31.0 | 16.4 | 6.1 | 2.5 | 〃 |
| くぼみ石 | 12 | 〃 | 〃 | 47.0 | 27.4 | 27.9 | 36.4 | 砂　岩 |




第 5 図　石器実測図 (1/2)

**須恵器**（第6図）　1は復原口径17.8㎝，最大径20.3㎝を測る蓋で，低い身受けの返りをもつものである。おそらく扁平な宝珠形のつまみがつくものであろう。口縁部内外はロクロヨコナデ仕上げの茶褐色を呈す焼成良好な土器である。2～6は高台付椀である。高台の付く位置が，底部と体部の屈折部より内側に入るタイプ（2～5）と，屈折部から直接高台に移るタイプ（6）がある。2・3は直に立つ低い高台がつくもので，畳付は内傾気味である。2は体部外面下半が回転ヘラ削り，内底部ナデの他はロクロヨコナデ仕上げである。3は体部内外ロクロヨコナデ，底部内外はナデて仕上げている。色調は2が外面青灰色，内面淡灰色，3は灰色を呈す。4は高台が外方に開くタイプで，畳付は平坦である。底部内外ナデの他はロクロヨコナデ仕上げの淡灰色を呈す土器である。5は高台が断面逆台形状をなすもので，畳付が外傾するタイプである。また，復原口径12.2㎝，器高3.5㎝の小型の椀である。底部内外がナデ調整で，他はロクロヨコナデ仕上げである。色調は灰色を呈す。6は体部と底部の屈折部に高台がつくタイプで，高台の断面は低い方形をなす。体部の屈折部はなく高台から直線に外反する体部がつく椀である。復原高台径9.8㎝を測る。体部外面下半を回転ヘラ削り，外底部ナデの他




第6図　須恵器実測図（1/3）

はロクロヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈す。7・8はいわゆる鉢で，7は平底の底部から立ち気味に外反する直口縁の鉢であるのに対し，8は球形の胴部に「く」字形の口縁部がつくタイプである。7は復原口径23.3㎝，器高10.8㎝を測り，体部下半から外底部は回転ヘラ削り，他はロクロヨコナデで仕上げている。色調は淡灰色を呈す。8は復原口径25㎝を測る。口縁は外面を削り出して肥厚部を形成させている。口縁部内外ロクロヨコナデ，胴部外面正格子の叩き目，内面青海波の叩き目のあとナデて仕上げている。色調は外面淡灰色，内面灰色を呈す。

## 3. おわりに

この遺跡は畑の開削時にその大半が削平されていたために，わずかに溝底付近を残す溝状遺構2条と時期不明のピット数個検出されたのみであった。従って，時期の判る奈良時代の2条の溝がいかなる性格を持つ溝であったかは把握しえない。しかし，観音山山麓から広がる扇状台地の西側斜面に形成されていることを考えると，おそらく東側に広がる平坦な台地上にこの溝と関連する集落遺構等が存在した可能性はあろう。だが，すぐ東側の第50地点（井手の原遺跡の一部）の調査では中世の遺構の存在は確認されたものの，当時代の遺構らしきものは検出されていない。また，その中世の遺構も上面がかなり削平されているので，当時代の遺構があったとしても消失してしまったものかもしれない。

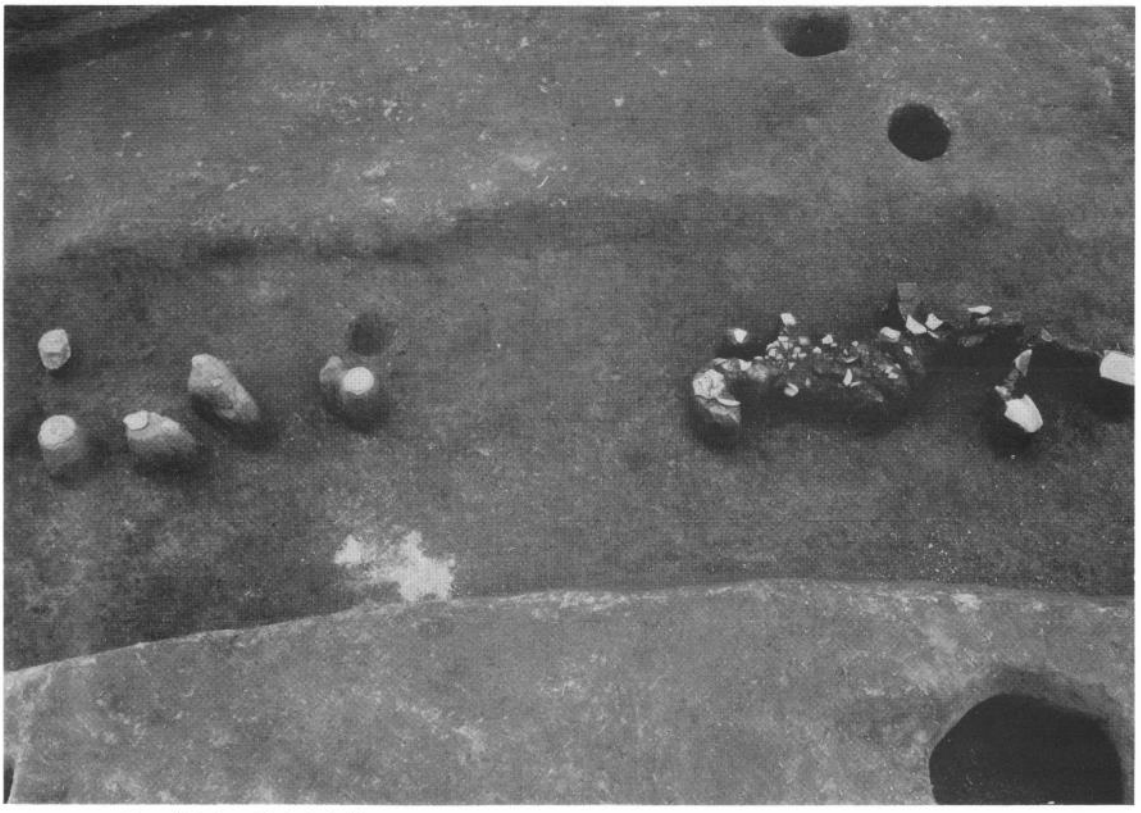
また，溝内覆土中から小片ではあるが縄文時代後・晩期の土器・石器等が出土していることは南側に近接する深原遺跡（註4）の一連のものとして理解していく必要があろう。（井上）

註1　木下修・橘昌信「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」8　福岡県教育委員会　1978
2　柳田康雄・井上裕弘・木下修他「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」5　福岡県教育委員会　1978
3　鷺久嗣郎・井上裕弘「山陽新幹線埋蔵文化財調査報告」2　福岡県教育委員会　1976
4　註1に同じ

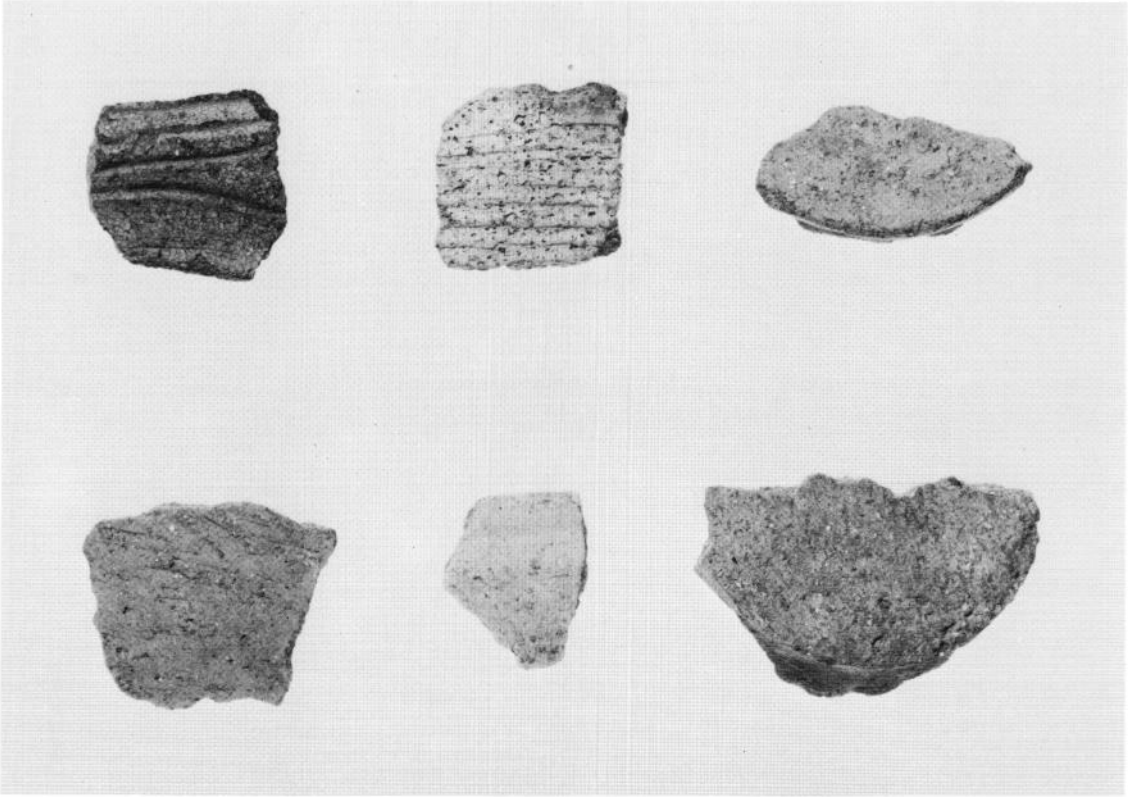
# 図　　版

## 井手ノ原A地点遺跡

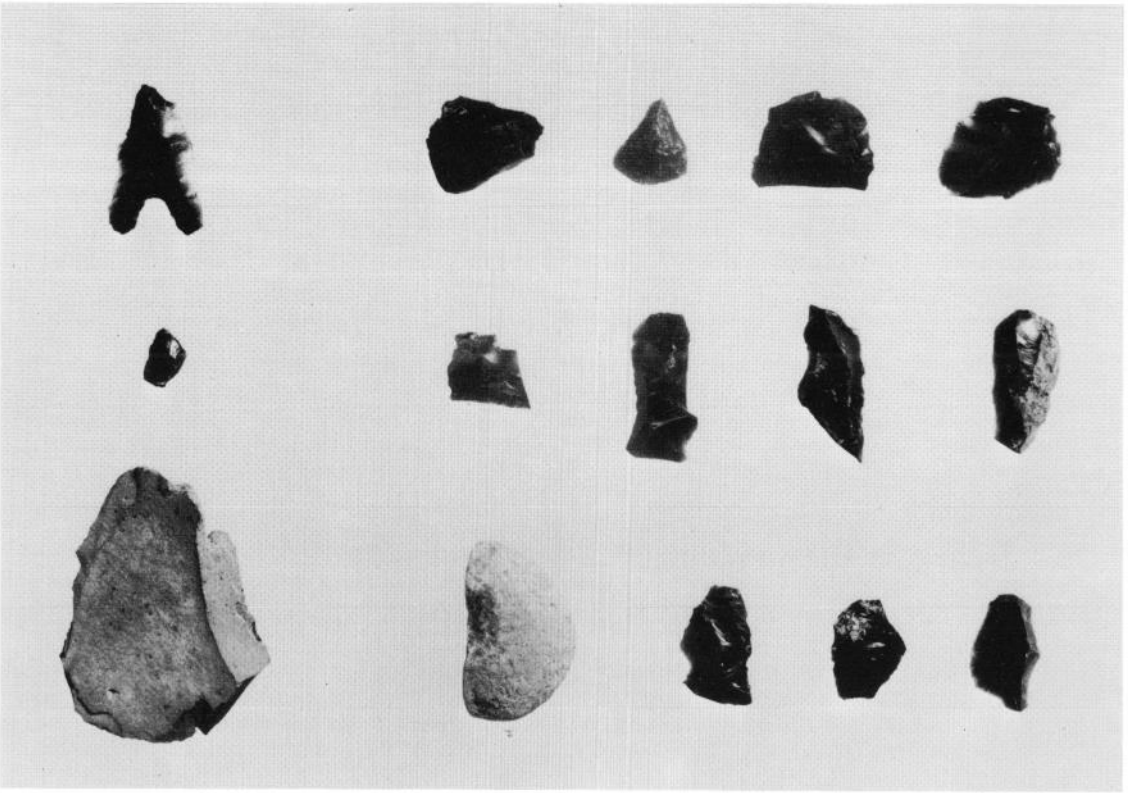
1　井手ノ原Ａ地点遺跡全景(南から)



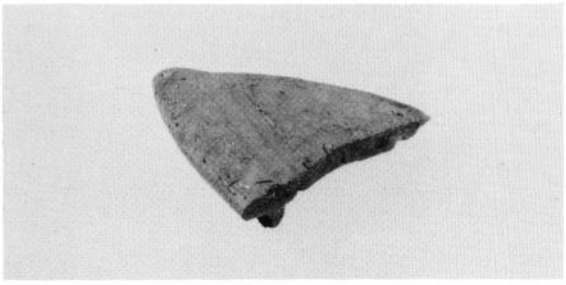
2　溝状遺構内土器出土状態

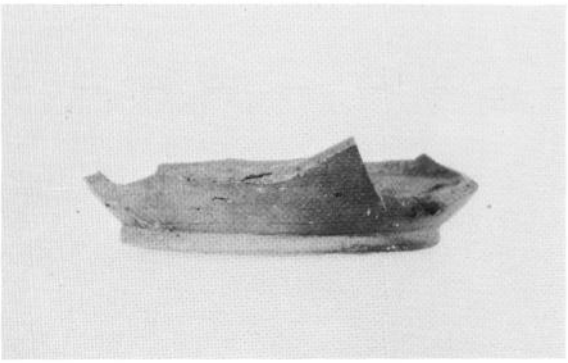


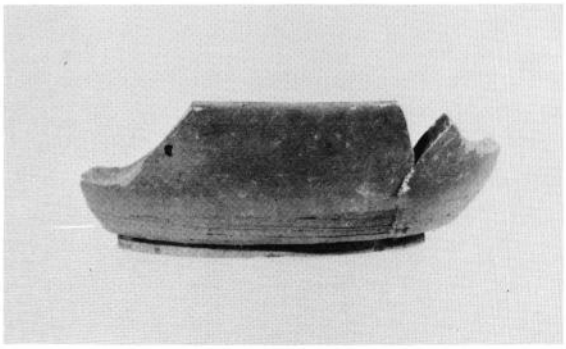
1　縄文土器

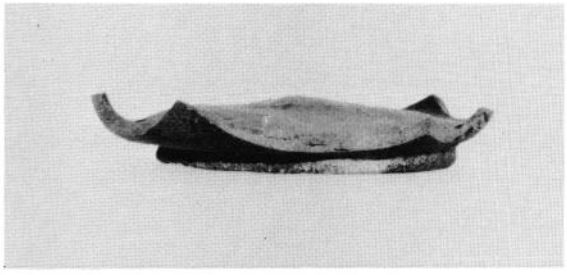


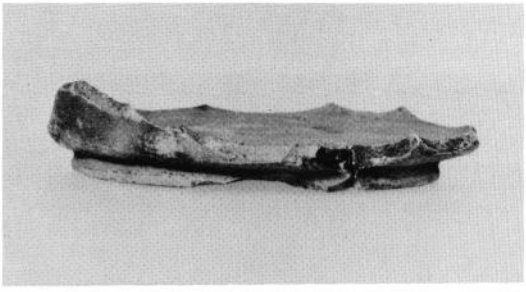
2　石　器











須恵器

# X　井手ノ原B地点遺跡の調査

（第52地点）

筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原

# 本　文　目　次

1. はじめに……59

2. 遺構の概要……59

3. おわりに……62

# 図　版　目　次

本文対照頁

図版1　(1)　井手ノ原B地点遺跡発掘区全景　北から（櫻井康治撮影）……59

(2)　溝状遺構全景　北から（櫻井撮影）……59

# 挿　図　目　次

第1図　井手ノ原B地点遺跡地形図（日本国有鉄道原図，高田弘信作成）……60

第2図　井手ノ原B地点遺跡遺構配置図（井上裕弘・櫻井康治実測，白水千賀子製図）……61

第3図　溝状遺構土層断面図（宮崎貴夫・佐藤晴久実測，白水製図）……62

# X　井手ノ原B地点遺跡の調査

## 1. はじめに

この遺跡は，福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原に所在する。観音山山麓からつづく扇状台地上に位置し，西側には近接して方形の区画溝をもつ中世の集落跡が検出された井手ノ原遺跡がある。この遺跡は当初中世の遺物散布地として登録されていたものである。

調査は昭和47年9月18日から9月28日までの期間で実施した。車輌基地本線センター－563 K 260mを基準点に，本線に平行2本，直行1本の幅3mのトレンチを設定し，遺構の出土状況に応じて拡張した。発掘総面積は452m²である。

なお，調査関係者は下記の通りである。

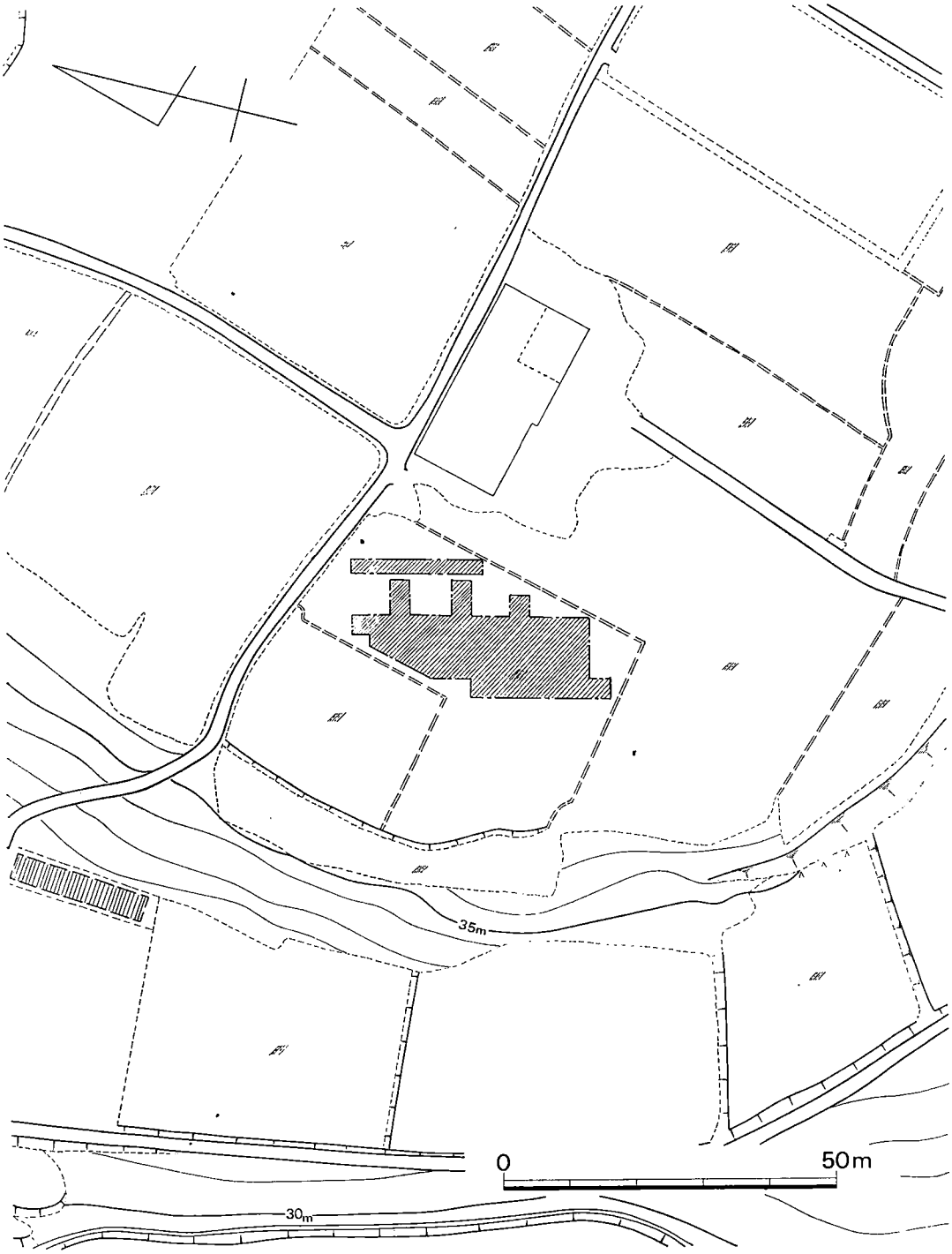
福岡県教育委員会文化課

| | | |
|---|---|---|
| 庶　務 | 主　事 | 小川浩一郎 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技　師 | 井上裕弘 |
| | 調査員 | 櫻井康治 |
| | 調査補助員 | 宮崎貴夫 |
| | 同 | 佐藤晴久 |

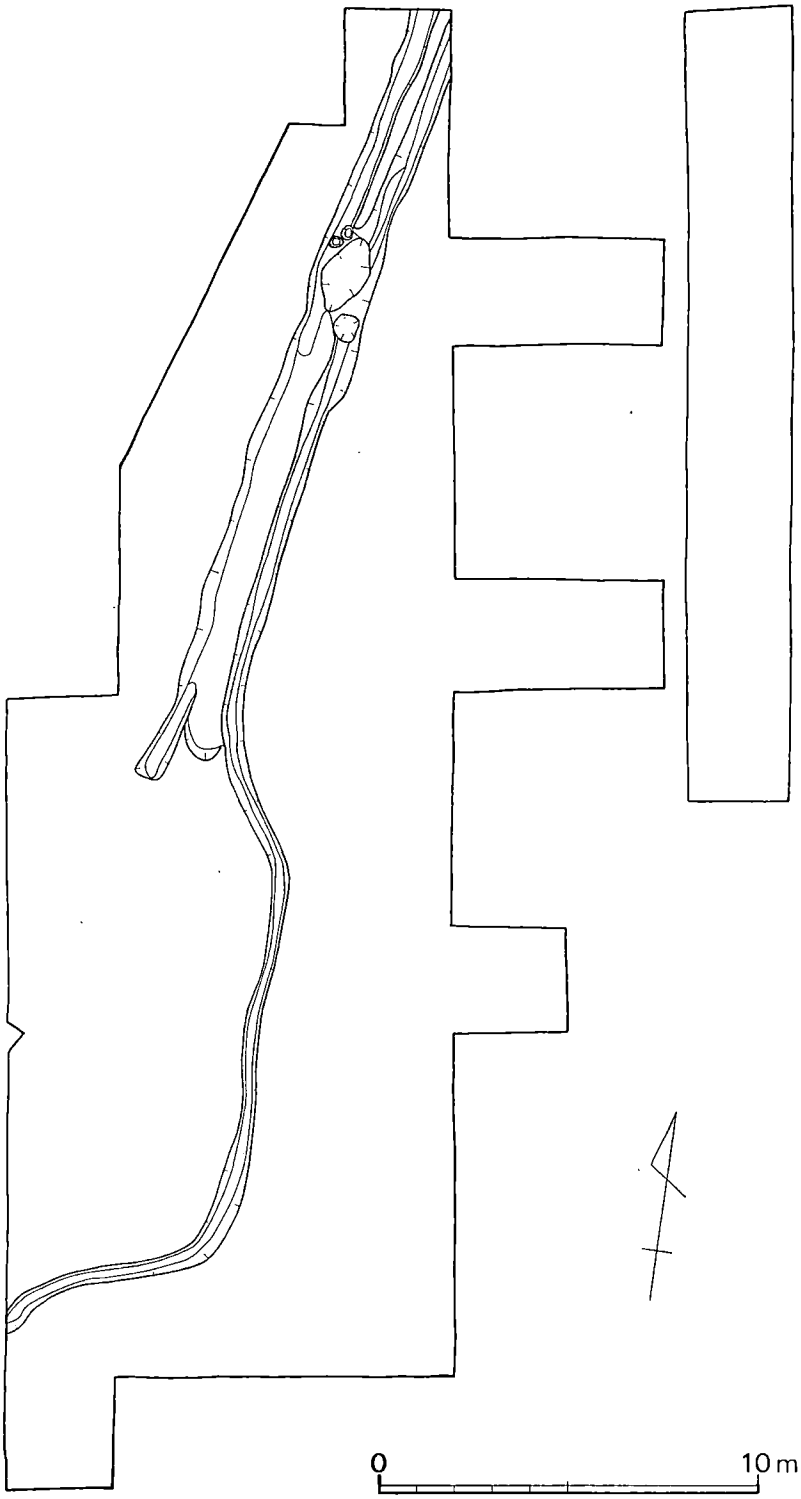
## 2. 遺構の概要

検出された遺構は，溝状遺構2条のみであり，調査区を南北に屈曲しながら続いている（図版1，第2図）。2条の溝は北側から約20mの所まで直線的に並行して走るが，西側の溝は消失してしまい，東側の溝は大きく弯曲しながら続いている。溝の幅は残りの良い北端部で，東側の溝が56cm，西側の溝は42cm，深さは東側が32cm，西側が17cmと浅い。平面発掘時には2条の溝の新旧関係は明瞭でなかったが，土層断面でみるかぎり西側が古く，東側が新しい溝であることが判る。しかし，溝内の堆積土の類似性や出土遺物が両者とも糸切りの土師器杯であり，時間的にはさほど隔たりのない時期に掘削された溝であろう。時期は土器が小片の為明瞭ではないが中世のものと思われる。他に，縄文時代後期の土器片も出土している。

井手ノ原B地点遺跡

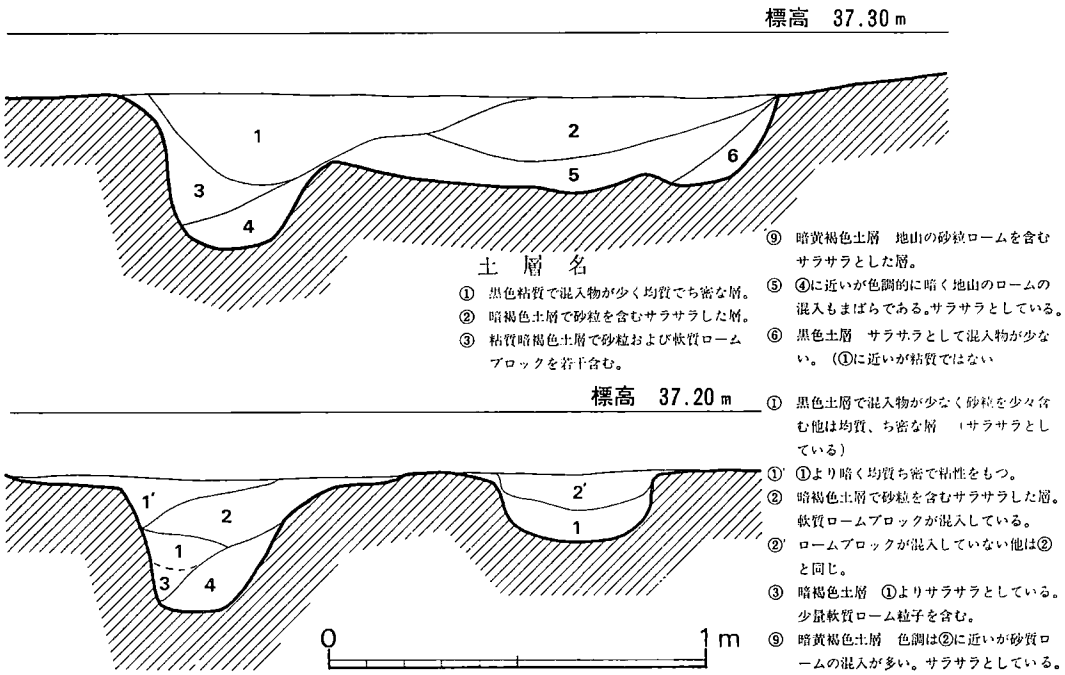



第 1 図　井手ノ原B地点遺跡地形図(1/1,000)




第 2 図　井手ノ原B地点遺跡遺構配置図（1/200）

井手ノ原B地点遺跡



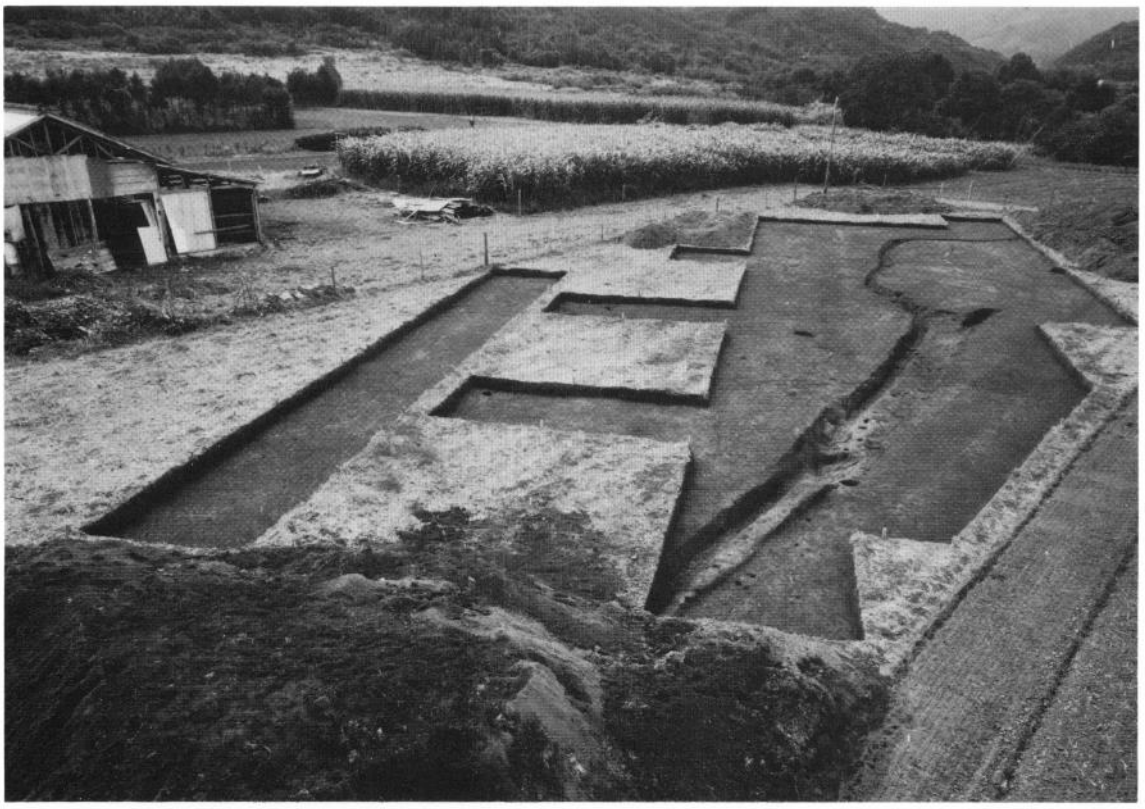

**第 3 図** 溝状遺構土層断面図 (1/20)

## 3. おわりに

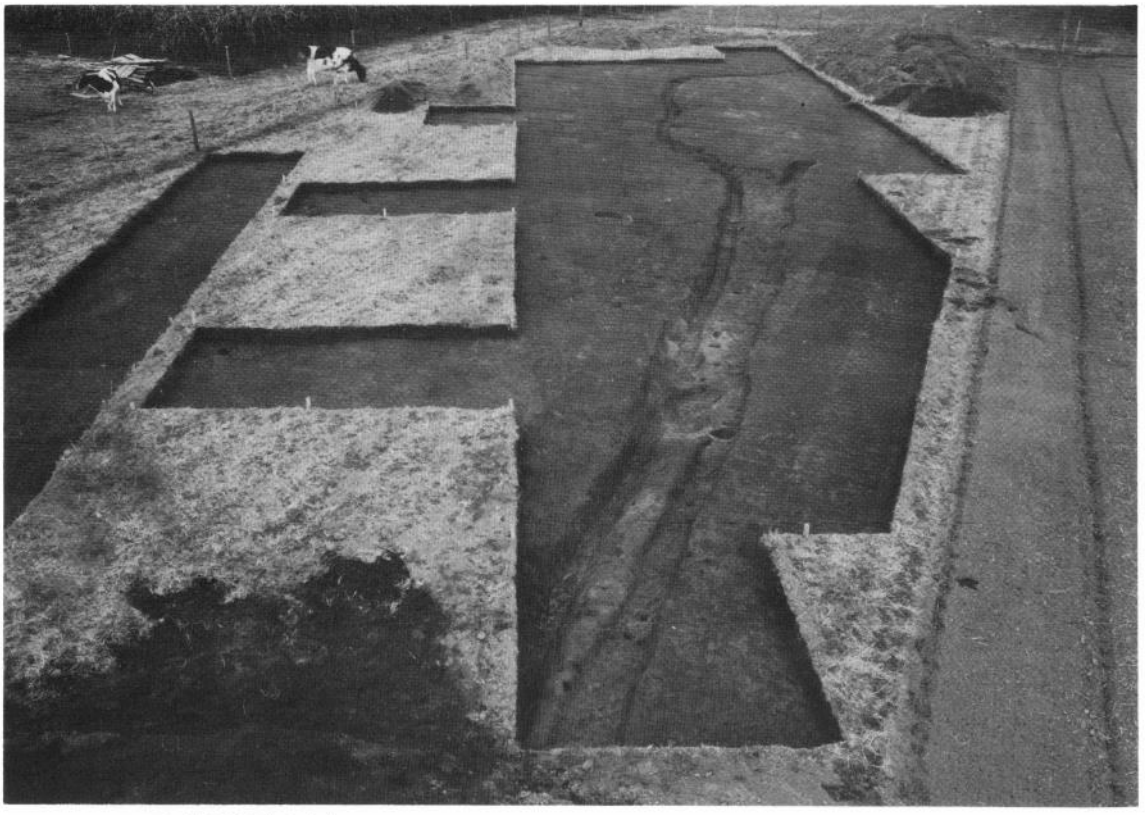
この遺跡も上面がかなり削平されているらしくわずかに浅い溝状遺構2条が検出されたのみであった。しかし，この溝が中世の時期に掘削された可能性が高いことは近接する井手ノ原遺跡の集落跡との関連の中で理解する必要があろう。

# 図　　版

## 井手ノ原B地点遺跡



1　井手ノ原Ｂ地点遺跡発掘区全景（北から）



2　溝状遺構全景（北から）

# XI　第34・53・54・54—1地点の調査

筑紫郡那珂川町大字中原

# 本　文　目　次

1. はじめに……63

2. 調査の概要……65

3. おわりに……66

# 図　版　目　次

本文対照頁

図版 1 (1) 第34地点発掘区全景　東から（井上裕弘撮影）……65

(2) 第54地点発掘区全景　南から（井上撮影）……65

2 (1) 第53地点西側トレンチ全景　北から（井上撮影）……65

(2) 第53地点東側トレンチ全景　北から（井上撮影）……65

# 挿　図　目　次

第 1 図　第34・53・54・54—1地点地形図（日本国有鉄道原図，井上裕弘作成）……64

第 2 図　第34・53・54地点出土土器実測図（井上実測，製図）……65

第 3 図　第54地点出土石鏃実測図（荒武麗子実測，製図）……65

# Ⅺ　第34・53・54・54—1地点の調査

## 1. はじめに

これら4地点は，調査の結果，明瞭な遺構も検出されず，すでに削平・整地されていた地点である。各地点の所在地・調査期間は下記に示す通りである。

第34地点の調査

所 在 地　　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字坂口

調査期間　　昭和47年5月29・30日

第53地点の調査

所 在 地　　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

調査期間　　昭和47年6月2日～10日，8月12日～16日

第54地点の調査

所 在 地　　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

調査期間　　昭和47年5月31日～6月2日，6月24・27日

第54—1地点の調査

所 在 地　　福岡県筑紫郡那珂川町大字中原字鳥ノ巣

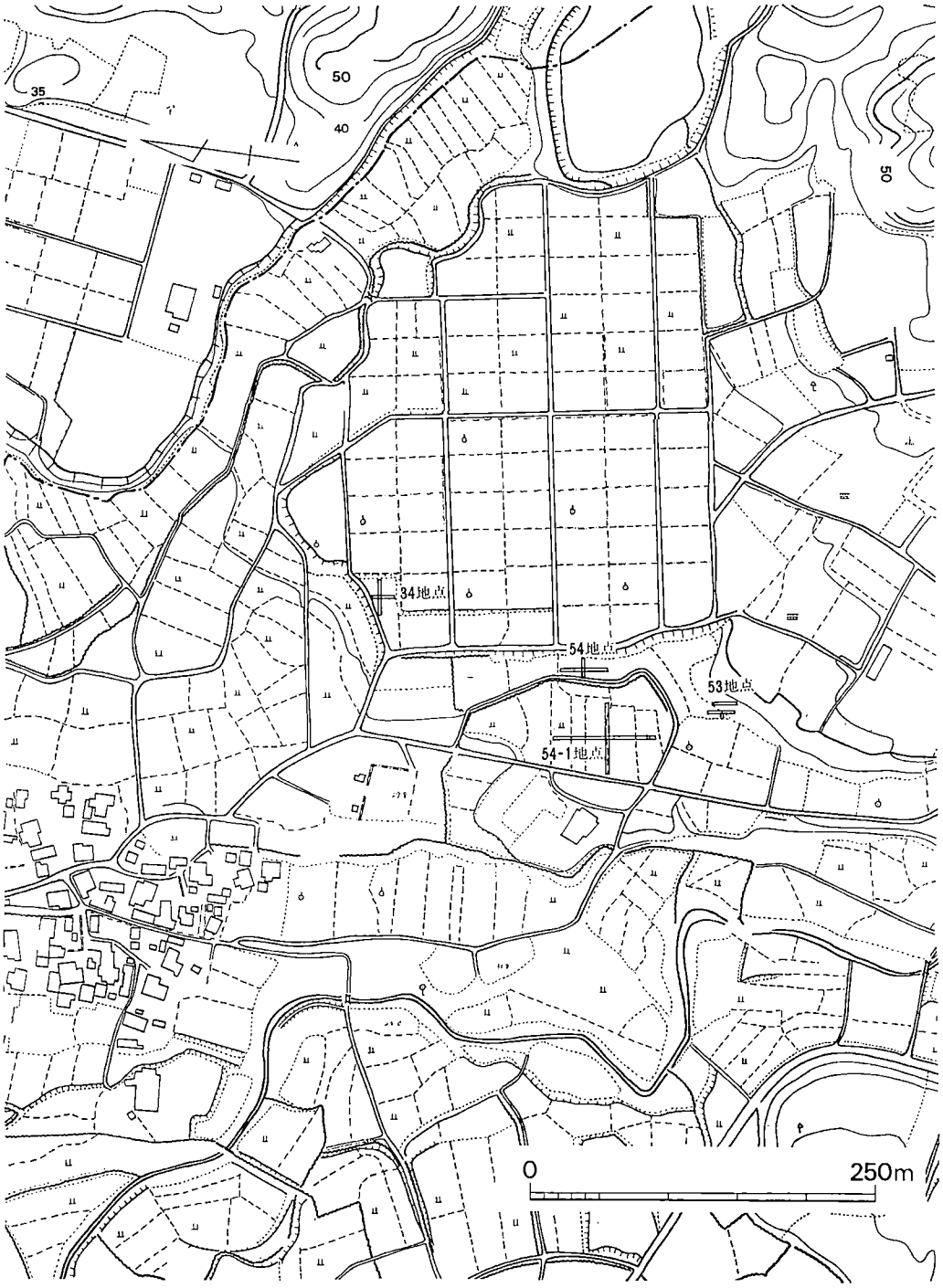
調査期間　　昭和49年3月27・28日

なお，調査関係者は次の通りである。

福岡県教育委員会文化課

| | | |
|---|---|---|
| 庶務担当 | 主　事 | 小川浩一郎 |
| | 主　事 | 加藤俊一 |
| | 嘱　託 | 吉村源七 |
| 発掘調査 | 技　師 | 柳田康雄 |
| | 技　師 | 井上裕弘 |
| | 調査員 | 櫻井康治 |
| | 調査補助員 | 渡辺和子 |
| | 同 | 桑田和義 |

第34・53・54・54—1地点



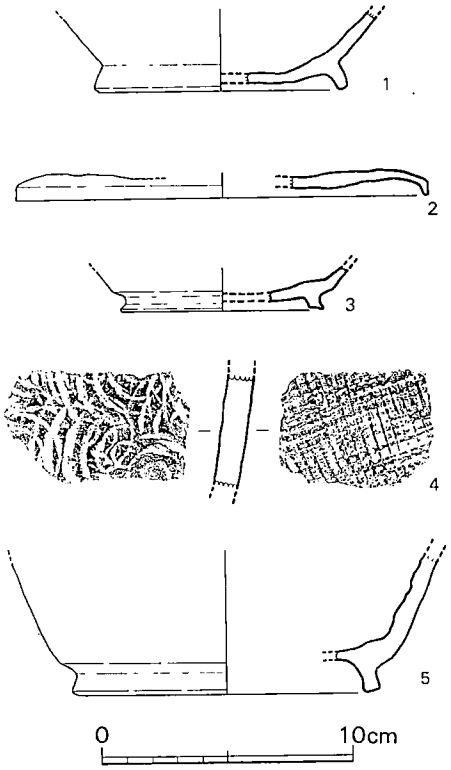

第 1 図　第34・53・54・54—1地点地形図 (1/5,000)

# 2. 調査の概要

各地点とも車輌基地本線センターに沿ったトレンチとそれに直交するトレンチを設定した。第53地点で時期不明の不整形なピット群が検出された他はすでに完全に削平・整地されていたため，遺構は何等検出できなかった。しかし，整地層からは若干ではあるが，土師器・須恵器等の小破片が出土した。他に，第54地点西側の水田から石鏃1点が表採されている。

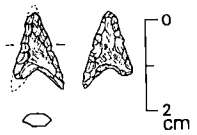
## 整地層出土の遺物（第2・3図）

**土　器**（第2図）　1は高台付の土師器椀で，高台がわずかに外方にふんばるタイプである。復原高台径10㎝を測る。器面は風化が著しく調整は不明。色調淡褐色を呈す。34地点出土。2は須恵器の蓋である。いわゆる身受けの返りをもたず，端部がほぼ直角に折れ曲るものである。天井部外面は回転ヘラ削りされ，平坦面をもっている。おそらく低平な宝珠形のつまみをもつタイプであろう。復原口径16.5㎝を測る。3は高台付の須恵器椀で，高台は低く外方にはねるタイプである。畳付は平坦である。4は須恵器甕の胴部破片で，外面格子目，内面青海波の叩き目を有すものである。色調は青灰色を呈し，焼成良好である。2～4は第53地点出土。5は高台付の須恵器壺の破片資料である。高台はわずかに外方に開く高いもので，畳付は外傾する。体部外面下半回転ヘラ削りの他はロクロヨコナデ仕上げである。色調は青灰色を呈し，胎土焼成とも良好・堅緻な土器である。第54地点出土。



第2図　第34・53・54地点出土土器実測図（1/3）

**石　器**（第3図）　第54地点西側の田より，石鏃を表採した。周辺から剝離が加えられ，中央部分は表裏とも磨っている。石材は黒曜石。長さ約19㎜，幅7.0㎜，厚さ2.5㎜，重量0.4ｇである。



第3図
第54地点出土石鏃実測図（3/5）

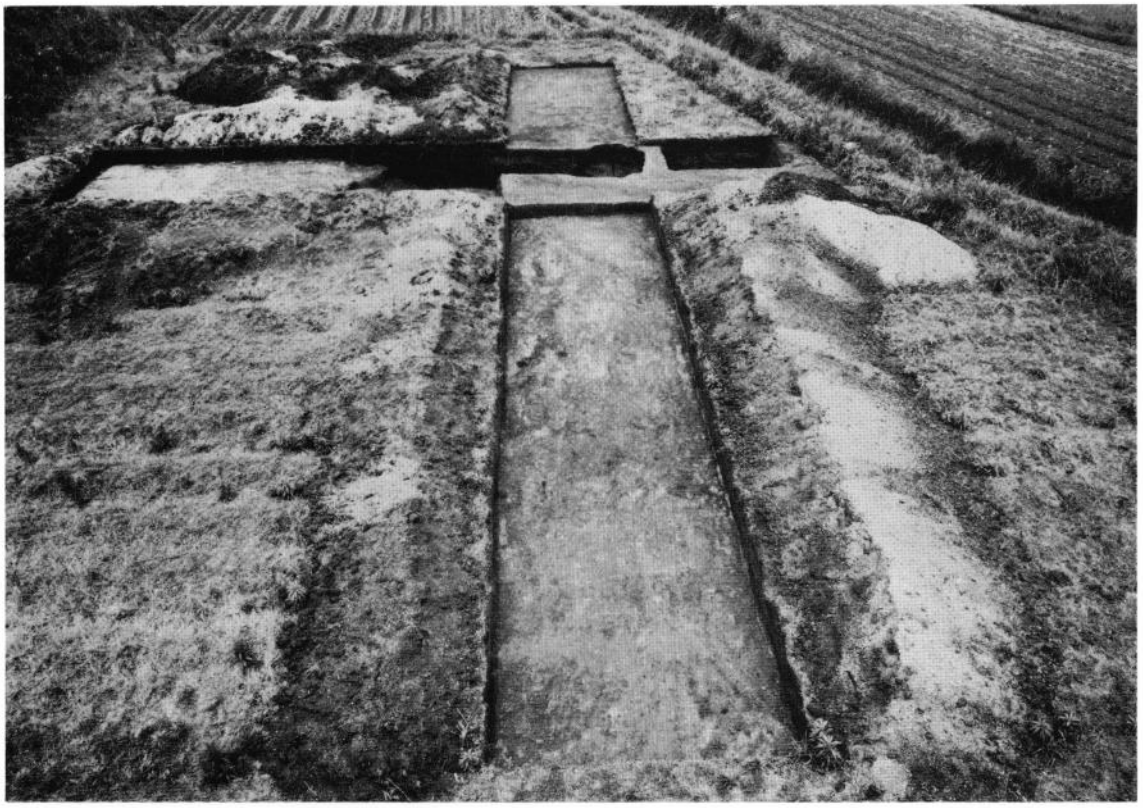
# 3. おわりに

各地点とも完全に近い状態で削平・整地されていたため，明瞭な遺構は何等検出されなかった。また，整地層から出土した遺物も全体に風化が著しく小破片であり，当初からこの地点に包含されていたものかは不明といわざるをえない。特に第54地点は一度整地され，さらに客土されているため，客土とともに他の地点から来た遺物の可能性をもっている。

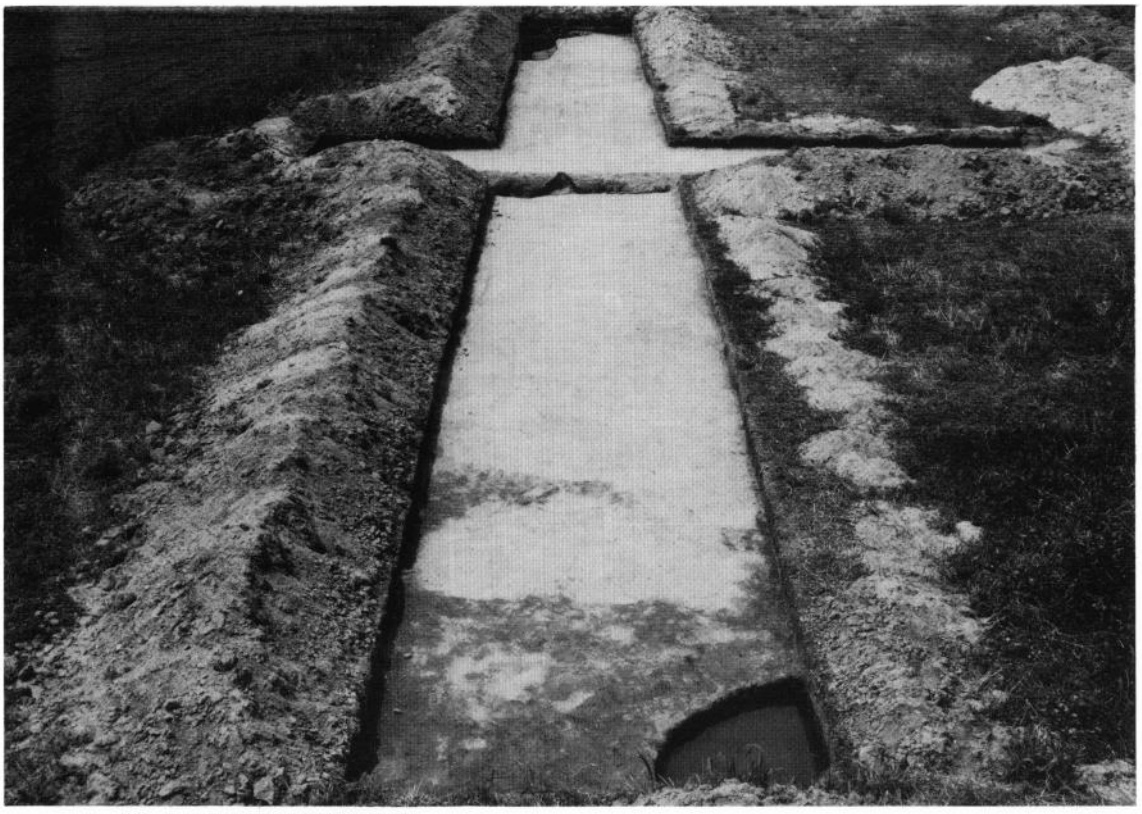
この4地点は，いわゆる縄文時代後，晩期の遺跡として知られる鳥ノ巣遺跡の隣接地域であるため，当初は鳥ノ巣遺跡の範囲と実態を明らかにする目的もかなりあった。しかし，若干の縄文後，晩期の資料とピット群が発見された鳥ノ巣A地点遺跡（34—1地点）を含め，この地域一帯が田・畑の開削でほとんど削平されてしまい鳥ノ巣遺跡の実態が明らかにできなかったことは誠に残念なことである。

# 図　　版

## 第 34・53・54・54—1 地 点



1　第34地点発掘区全景(東から)



2　第54地点発掘区全景(南から)

1　第53地点西側トレンチ全景(北から)

2　第53地点東側トレンチ全景(北から)

# 山陽新幹線関係
# 埋蔵文化財調査報告

## 総　索　引

# 凡　　例

1. これは『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第１集～第13集の索引であり，分冊報告の活用の便を計るために作成した。
2. 第１部には各集の本文目次，第２部には遺構・遺物単位の記載頁を掲載する。
3. 第１部は，第１集から順に配列し，第２部は時代別を基本とした配列になっている。但し時期の不分明な資料についてはおおむねの時代の枠に含め，名称については同様と思われる例を幾つかまとめている。
4. 頁の表示には２種類の字体であらわし，ゴチック体で第一集を，細字体で記述のある頁を示す．なお記述が２頁以上にわたる場合は最初の頁を示した。また第４集・第７集は本文を上巻・下巻に分けているが，第４集の 261頁以降，第７集の 245頁以降は下巻に相当する。
5. この索引は，柳田康雄・井上裕弘・木下修・勝野素子らの協力を得て，小池史哲が作成した。

# 第1集 本文目次


Ⅰ　序　　文……1

1. 調査の経過……1
2. 鞍手地方の遺跡の環境……12
3. 春日・那珂川地区の遺跡の環境……16

Ⅱ　小田山墓地の調査……35

1. はじめに……35
2. 遺　　構……36
3. おわりに……39

Ⅲ　下松尾墓地の調査……41

1. はじめに……41
2. 遺　　構……42
3. おわりに……49

付. 金丸墓地……51

Ⅳ　京尾遺跡の調査……53

1. はじめに……53
2. 遺構と遺物……54
3. おわりに……57

Ⅴ　若宮条里遺構の調査……59

1. はじめに……59
2. 遺構と遺物……60
3. おわりに……62

Ⅵ　田尻遺跡の調査……65

1. はじめに……65
2. 遺構と遺物……68
3. まとめ……90

Ⅶ　別当塚古墳の調査……93

1. はじめに……93

2. 発掘調査……94
3. おわりに……95

Ⅷ 杉園遺跡の調査……97
1. はじめに……97
2. 発掘調査……98
3. おわりに……100

Ⅸ 久山町下山田地区の調査……101
1. はじめに……101
2. 発掘調査……102
3. おわりに……103

Ⅹ 門田2号墳の調査……105
1. はじめに……105
2. 調査の経過……106
3. 墳丘……109
4. 石室……111
5. 周溝……114
6. 中世墓……115
7. 遺物……117
8. まとめ……141

# 第2集本文目次

Ⅰ 序文……1

Ⅱ 第33地点の調査……5
1. はじめに……5
2. 遺構……7
3. 遺物……9
4. おわりに……12

Ⅲ 原古墳群の調査……15
1. 調査の経過……15

2. 古墳の立地と環境……18
3. 1 号 墳……22
4. 2 号 墳……27
5. 円形周溝墓……36
6. 3 号 墳……47
7. 方形周溝墓……52
8. 土 壙 墓……58
9. 住 居 跡……61
10. 中世建物跡……64
11. ま と め……70

Ⅳ 井手ノ原遺跡の調査……79
1. はじめに……79
2. 遺 構……83
3. 遺 物……97
4. ま と め……115

# 第3集本文目次

Ⅰ 序 文……1

Ⅱ 門田遺跡・門田地区の調査……11
1. 調査の経過……11
2. 立地と環境……23
3. 先土器時代の調査……24
4. 弥生時代の遺構と遺物……37
5. 古墳時代の遺構と遺物……102
6. 歴史時代の遺構と遺物……126
7. 門田地区出土鉄滓及び羽口先端溶着鉄滓の調査結果……163
8. おわりに……174

Ⅲ 下原遺跡の調査……177
1. 調査の経過……177
2. 遺跡の立地……177

3. 遺構と遺物…… 178
4. 包含層出土の遺物…… 186
5. まとめ…… 192

Ⅳ 油田遺跡の調査 …… 197
1. はじめに…… 197
2. 遺跡の立地…… 197
3. 調査の経過…… 198
4. 調査概要…… 198
5. 遺構…… 199
6. 遺物…… 199
7. その他の遺物…… 201
8. 所見…… 202

# 第4集本文目次

## 柏田遺跡の調査

Ⅰ 調査の経過 …… 1
1. 第1次調査の経過…… 1
2. 第2次調査の経過…… 2

Ⅱ 遺跡の位置と環境…… 5
Ⅲ 層序…… 8
1. B列の層序…… 8
2. C列の層序…… 9

Ⅳ 先土器時代の遺物…… 10

Ⅴ 縄文時代の遺構と遺物 …… 13
1. 遺構…… 13
2. 遺物…… 24
3. 自然科学系の調査…… 202
4. おわりに…… 217

Ⅵ　古墳時代の遺構と遺物 …… 261
1. 遺　　構 …… 261
2. 遺　　物 …… 267
3. おわりに …… 304

Ⅶ　歴史時代の遺構と遺物 …… 312
1. 遺　　構 …… 312
2. 遺　　物 …… 318
3. おわりに …… 335

# 第5集本文目次

観音山古墳群の調査

Ⅰ　序　　文 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 3
1. 報告にあたって …… 3
2. 調査の経過 …… 5

Ⅲ　各古墳の記録 …… 9
1. 1号墳 …… 9
2. 2号墳 …… 17
3. 3号墳 …… 23
4. 4号墳 …… 26
5. 5号墳 …… 30
6. 6号墳 …… 39
7. 7号墳 …… 47
8. 8号墳 …… 54
9. 9号墳 …… 59
10. 10号墳 …… 64
11. 11号墳 …… 69
12. 12号墳 …… 82
13. 13号墳 …… 98
14. 14号墳 …… 106

15. 15 号 墳…… 114
16. 16 号 墳…… 115
17. 17 号 墳…… 117
18. 18 号 墳…… 119
19. 19 号 墳…… 121
20. 20 号 墳…… 123
21. 21 号 墳…… 131
22. 22 号 墳…… 136
23. 23 号 墳…… 141
24. 24 号 墳…… 147
25. 25 号 墳…… 156
26. 26 号 墳…… 162
27. 27 号 墳…… 166
28. 28 号 墳…… 170
29. 29 号 墳…… 172
30. 30 号 墳…… 176
31. 31 号 墳…… 178

Ⅳ 土 壙 墓 群 …… 179

Ⅴ 後 論 …… 191
1. 観音山古墳群成立の環境…… 191
2. 古墳群の配列…… 196
3. 須恵器について…… 200

Ⅵ 自然科学的分析 …… 206
1. 鉱 滓 の 調 査…… 206
2. 7号土壙墓出土木棺材の樹種名について…… 215

付 録 春日市下白水大塚古墳出土品…… 216

# 第 6 集 本 文 目 次

門田遺跡門田地区甕棺墓群の調査

Ⅰ　序　　文 …… 1

Ⅱ　門田地区の調査 …… 3

1. 調査の経過 …… 3
2. 遺跡の概要 …… 5
3. 甕　棺　墓 …… 6
4. 木　棺　墓 …… 85
5. 土　壙（墓） …… 86
6. 石蓋土壙墓 …… 89
7. 箱式石棺墓 …… 89

Ⅲ　出土人骨と貝輪について …… 97

1. 人　　骨 …… 97
2. 貝　　輪 …… 97

Ⅳ　結　　語 …… 105

# 第7集本文目次

門田遺跡辻田地区の調査

Ⅰ　調査の経過 …… 1

Ⅱ　先土器時代の調査 …… 9

1. 調査の経過 …… 9
2. 調査の内容 …… 9
3. 所　　見 …… 9
4. 辻田地区出土の先土器文化石器 …… 9

Ⅲ　弥生時代の遺構と遺物 …… 19

1. 袋状竪穴 …… 19
2. 竪穴住居跡 …… 137
3. 方形竪穴遺構 …… 204
4. 長方形竪穴遺構 …… 211
5. 円形竪穴遺構 …… 214
6. 長方形土壙 …… 215

7. 屋外炉跡…… 218
8. V字溝…… 220
9. 溝状遺構…… 225
10. 包含層出土の土器・石器・青銅製品…… 226

Ⅳ 古墳時代の遺構と遺物 …… 245
1. 竪穴住居跡…… 245
2. 方形竪穴遺構…… 262
3. 溝状遺構…… 264
4. 包含層出土の遺物…… 264

Ⅴ 歴史時代の遺構と遺物 …… 266
1. 掘立柱建物跡…… 266
2. 柵列…… 272
3. 不整形竪穴遺構…… 274
4. 製鉄炉跡…… 276
5. 溝状遺構…… 276
6. 包含層出土の遺物…… 280

Ⅵ 自然科学系の調査…… 285
1. プラント・オパール分析…… 286
2. 炭化種子・木炭分析…… 291
3. 製鉄関係遺物の分析…… 293

Ⅶ おわりに …… 311
1. 調査の成果と問題点…… 311
2. 袋状竪穴の機能に関する諸問題…… 312
3. 前期末の地域性について…… 318
4. 弥生時代の石器について…… 345
5. 弥生終末～古墳前期の土器群について…… 357

# 第8集本文目次

深原遺跡の調査

Ⅰ 序文 …… 1

1. はじめに……1
2. 調査の経過……2

Ⅱ 立地と環境……6

Ⅲ 調査の概要……8
1. 区割の設定……8
2. 層序……9
3. 遺物の出土状態……12

Ⅳ 縄文時代の遺構と遺物……18
1. 遺構と遺物……18
2. 包含層出土の遺物……39

Ⅴ その他の遺構と遺物……140
1. 先土器時代の遺物……140
2. 古墳時代とその後の遺構……142

Ⅵ まとめ……143

# 第9集 本文目次

門田遺跡辻田地区墓地群の調査

Ⅰ 調査の経過……1

Ⅱ 遺構の概要……9

Ⅲ 弥生時代の墓地……10
1. A群の墓地……10
2. B群の墓地……53

Ⅳ 古墳時代の墓地……84
1. 古墳の配列……84
2. 辻田1号墳……84
3. 辻田2号墳……91
4. 辻田3号墳……97

5. 辻田4号墳……99
6. 土　壙　墓……100
7. ま　と　め……103

V　歴史時代の墓地……107
1. 土　壙　墓……107
2. 火　葬　墓……109
3. 近　世　墓……109
4. ま　と　め……146

VI　自然科学系の調査……151
1. 21号甕棺墓出土の人骨……151
2. 北九州地方における甕棺の胎土分析……151
3. 門田遺跡出土鉄戈の分析調査……155
4. 門田遺跡出土の繊維製品について……160
5. 赤色顔料の分析について……166
6. 門田遺跡出土のガラス玉類の材質について……170

VII　お　わ　り　に……172
1. 調査の成果と問題点……172
2. 甕棺製作技術と工人集団把握への試論……173
3. 甕棺を黒く塗る風習……190

# 第10集　本　文　目　次

原遺跡の調査

I　序　　文……1
1. は　じ　め　に……1
2. 調　査　の　経　過……2
3. 保存に至る経過……5

II　遺　跡　の　概　要……9

III　縄文時代の遺構と遺物……10

1. 層　　序……10
2. 遺　　構……11
3. 遺物の出土状態……11
4. 遺　　物……14
5. 小　　結……23

Ⅳ　弥生時代の遺構と遺物 ……25
1. 甕　棺　墓……25
2. 墓壙内供献土器……89
3. 土　壙　墓……92
4. 溝 状 遺 構……96
5. 祭 祀 遺 構……98
6. 包含層出土の土器…… 103
7. 出土人骨について…… 103
8. 小　　結…… 107

Ⅴ　お わ り に …… 119

# 第11集 本 文 目 次

門田遺跡谷地区の調査

Ⅰ　調 査 の 経 過 …… 1

Ⅱ　遺 跡 の 概 要 …… 7
1. 遺　　構…… 7
2. 層 位 と 遺 物…… 7

Ⅲ　先土器・縄文草創期の遺物 ……11
1. 出 土 状 態……11
2. 出 土 石 器……12
3. 爪 形 文 土 器……23

Ⅳ　縄文・弥生時代の遺構と遺物 ……29
1. V　字　溝……29
2. 大　溝　Ⅰ……29

3. 大　溝　Ⅱ …… 104
4. 旧河川状遺構 …… 107
5. ドングリ貯蔵穴 …… 108
6. 包含層出土の石器 …… 123

Ⅴ　古墳時代の遺構と遺物 …… 125
1. 溝状遺構 …… 125
2. 包含層出土の遺物 …… 125

Ⅵ　歴史時代の遺構と遺物 …… 136
1. 溝状遺構 …… 136
2. 竪穴状遺構 …… 136
3. 包含層出土の遺物 …… 141

Ⅶ　自然科学系の調査 …… 149
1. 門田遺跡谷地区花粉分析結果報告 …… 149
2. 春日市大字上白水門田遺跡谷地区出土の種子類 …… 155
3. 門田遺跡谷地区から出土した木材片の樹種名について …… 159

Ⅷ　おわりに …… 162

# 第12集　本文目次

辻田遺跡の調査

Ⅰ　調査の経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 9

Ⅲ　第Ⅰ区の遺構と遺物 …… 13
1. Ⅰ—1区の調査 …… 13
2. Ⅰ—2区の調査 …… 20
3. 小　結 …… 31

Ⅳ　第Ⅱ区の遺構と遺物 …… 33
1. 層　序 …… 33

2. 縄文時代以前の遺物……34
3. 大　　溝……38
4. 竪穴状遺構……114
5. 土　　壙……115
6. 建　物　跡……126
7. 包含層出土の遺物……130
8. 春日市上白水辻田遺跡の種子類……141
9. 辻田遺跡から出土した木材資料の樹種同定……144
10. 出土遺物の取り上げと保存処理……156
11. 小　　結……158

Ⅴ　第Ⅲ区の遺構と遺物……163
1. 層　　序……163
2. 竪穴住居跡……164
3. 建　物　跡……169
4. 溝状遺構……169
5. 小　　結……170

Ⅵ　第Ⅳ区の遺構と遺物……171
1. 竪穴遺構……171
2. 溝状遺構……171
3. 杭　　列……176
4. 包含層出土の遺物……176
5. 小　　結……177

Ⅶ　おわりに……178

# 第13集 本文目次

Ⅰ　序　　文……1
1. 調査の経過……1
2. 周辺遺跡の遺物……2

Ⅱ　竹原八幡塚古墳の調査……9

1. はじめに……9
2. 古墳の位置と環境……10
3. 古墳の調査と出土品……11
4. おわりに……19

Ⅲ 井手ノ元遺跡の調査……21
1. はじめに……21
2. 遺構と遺物……23
3. おわりに……23

Ⅳ 久保遺跡の調査……25
1. はじめに……25
2. 遺構と遺物……26
3. おわりに……28

Ⅴ 鳥ノ巣A地点遺跡の調査……29
1. はじめに……29
2. 遺構と遺物……29
3. おわりに……34

Ⅵ 鳥ノ巣B地点遺跡の調査……35
1. はじめに……35
2. 層序……35
3. 遺物……37
4. おわりに……39

Ⅶ 立石遺跡の調査……41
1. はじめに……41
2. 遺構と遺物……44
3. おわりに……47

Ⅷ 立ノ口の石碑の調査……49
1. はじめに……49
2. 遺構の概要……49
3. おわりに……49

Ⅸ　井手ノ原A地点遺跡の調査 ……51
1. はじめに……51
2. 遺構と遺物……51
3. おわりに……57

Ⅹ　井手ノ原B地点遺跡の調査 ……59
1. はじめに……59
2. 遺構の概要……59
3. おわりに……62

Ⅺ　第34・53・54・54—1地点の調査……62
1. はじめに……62
2. 調査の概要……65
3. おわりに……66

付　録　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　総索引……67

## 先　土　器　時　代


三稜尖頭器　7—114,
尖頭状石器　11—14,
ナイフ形石器　3—31・34, 4—10, 7—10, 8—141, 11—12, 12—29・36, 13—30・46,
台形石器　3—34, 7—12, 10—18,
台形様石器　8—141, 10—14,
細石刃核　3—28・31, 4—11, 7—12, 8—142, 11—16・105,
細石刃　3—28・34, 4—12, 7—12, 8—142, 10—19, 11—21,
石核打面再生剝片　3—31,
スポール　3—31, 8—142
掻　器　11—21,
削　器　11—123,
彫　器　3—35, 11—21,
縦長剝片　7—9, 8—142,
石　核　11—21,


## 縄　文　時　代


住居跡　4—13・14・18,
竪穴遺構　8—37,
円形竪穴遺構　8—34,
ピット状遺構　8—37, 10—11,
石組炉跡　8—18・144, 10—11,
土　壙　4—20,
炉　跡　4—21,
V字溝　4—23,
溝状遺構　4—21・219,
草創期爪形文土器　11—23・25,
早期山形押型文土器　8—40・146, 10—14,
　格子目押型文土器　8—49・146,
　楕円押型文土器　8—20・51・146, 10—14, 2—97,
　沈線文土器　8—82,
　無文土器　8—82, 10—17, 2—99,
　撚糸文土器　8—86, 10—17,
　縄文土器　8—86, 10—17,

条痕文土器　8—86，10—17，
貝殻文土器　10—17，
前期轟B式土器　8—89，
曽畑式土器　3—186，8—89，11—32，
櫛目状土器　11—31，
沈線文土器　8—90，
手向山式土器　8—93，
塞ノ神式土器　8—93，
中期並木式土器　4—24，
阿高式土器　8—94，
後期深鉢形土器　4—26・27・36・39・60・72・80・221，8—94，13—5・30・53，
鉢形土器　4—27・72・80・221，
浅鉢形土器　4—63・80・222，8—94，
皿形土器　4—39・63・66・72・80・222，
脚　台　4—72，
有文土器　4—40，
無文土器　4—52，
刻み目突帯土器　4—54，
胴　部　4—48，
底　部　4—55・80，
晩期浅鉢形土器　1—62，4—85，2—99，13—37・53，
鉢形土器　4—81・90，8—98，11—32，
深鉢形土器　2—99，8—98，13—30・37，
甕形土器　4—81・88，11—35，
底　部　4—85，
精製土器　12—35，
粗製土器　12—35，
尖頭状石器　1—137，3—67・98，4—91，8—108，10—19，11—38，13—33，
石　槍　1—137，4—91，8—108，10—22，12—37，
石　鏃　1—137，2—100，4—93・224・242，8—19・102，10—19，11—38・39・42・105・123，12—37・29，13—6・31・38・47・54・65，
石　錘　4—189・226・258，8—140，11—55，13—39，
打製石斧　1—139，2—102，4—193・227・258，8—123，11—48，
局部磨製石斧　4—193・227，8—25，10—22，11—51，13—6，
磨製石斧　1—139，2—102，4—193・227，8—35・118，11—45，13—39，
環状石斧　8—123，

石　皿　4—198, 8—24・25・131, 11—106,
磨　石　4—198, 8—25・126, 10—22, 11—53・106, 12—37,
敲　石　8—129, 11—55,
凹　石　11—55, 13—54,
異形局部磨製石器　8—108,
石　錐　4—166, 8—131, 11—53, 13—6,
石　匙　4—182, 8—111, 10—22, 11—42, 12—37, 13—39,
スクレイパー　2—102, 3—188, 12—37, 13—31・39・47,
削　器　4—172・258, 8—35・112, 10—22, 11—44・123, 12—37, 13—6,
掻　器　4—177・258, 8—118, 11—45・123,
サイドブレイド　4—170・239,
彫　器　4—162, 8—137,
台形状石器　4—156・257,
つまみ形石器　4—113・244, 8—139, 12—29, 13—6・33,
刃器状剝片　2—102, 3—188, 4—143・227・231・245, 8—137, 13—6,
石　核　4—158, 8—137, 10—22,
砥　石　4—198・259, 8—131, 10—22, 11—55, 12—31,
礫　器　8—125, 11—106,
玉　石　8—140,
装身具　滑石製玉　4—200,
　　抉状耳飾　7—34,
自然遺物　種　子　4—201,
　　木　炭　4—201,
自然科学系調査　4—202,

## 弥　生　時　代

住居跡　3—90・92, 7—137・138・140・141・143・155・157・158・163・182・183 186・187・193・194・196・198・199・200, 12—13・17・164,
袋状竪穴　3—37・39・44・51・53・54・56・60・63・67・68・69・71・73・75・77・81・83, 7—19・26・27・30・35・38・41・44・45・46・48・51・58・61・62・64・70・73・75・79・84・85・88・94・99・102・108・109・116・119・122・127・131・312,
方形竪穴　3—53・54・60・68・73・77, 7—64・69・84・85・87・106・135・136・313
方形竪穴遺構　7—204・208・209,
長方形竪穴遺構　7—211,
円形竪穴遺構　7—214,
屋外炉跡　7—218,
竪穴状遺構　12—114,

長方形土壙　7—215・218,
土　壙　12—19・115・117・119,
ドングリ貯蔵穴　11—108・112・115・116・118・119・121,
土壙墓　6—86・87・88, 9—40・42・48・55・66・77, 10—93・94・96,
石蓋土壙墓　6—89, 9—48,
木棺墓　6—85, 9—45,
甕棺墓　6—6～35, 9—10・13・16・19・21・25・30・32・34・37・39・53,
10—25・26・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55,
単甕棺　6—15・16・17・21・32, 9—16・19・21・25・34・37・53・55, 10—31・37・38・39・48・51・52・53・55,
接口式甕棺　6—6～35, 9—10・19・25・30・32・37, 10—26・32・34・35・36・37・38・39・40・42・43・44, 45・47・48・49・50・51・54,
挿入式甕棺　6—34, 9—21, 10—34・39・46・52,
覆口式甕棺　6—7・9・16・23, 9—10・13・16・25, 10—36・46・54,
小児用甕棺　6—7～12・16～20・22・23・25・27・28・30～34, 9—10・13・16・19・21 37・39・55, 10—31・32・33・34・35・36・37・38・39・43・44・45・46・47・48・50・52・53・54,
箱式石棺墓　6—89・91・93・94,
祭祀遺構　10—98・101・102・103,
土器溜状遺構　9—49,
V字溝　7—220, 11—29,
大　溝　11—29・104, 12—38,
溝状遺構　7—225, 10—96, 12—17・19・20,
旧河川状遺構　11—107,
前期　壺　3—37・40・46・51・54・56・60・64・68・73・75・81・93, 6—23・24,
7—19・23・28・30・35・38・44・45・51・58・62・64・71・73・76・81・87・88・96・99・105・108・109・119・120・122・128・132・164・167 200・221・226, 9—13・16, 11—64,
甕　3—39・43・46・51・52・56・60・64・69・71・73・75・77・81・90・93,
7—21・23・28・32・35・41・44・46・47・48・51・54・61・62・64・72・75・76・81・84・87・89・96・102・105・108・111・119・121・123・128・132・167・175・199・202・221・227, 9—10, 11—65,
蓋　7—26・30・41・63・78・93・126・167・178, 11—66,
壺　蓋　3—63, 7—233,
無頸壺　3—39, 7—167,
鉢　3—71・75・94, 7—21・25・30・33・35・41・58・61・68・72・78・93・98・105・108・114・119・121・123・130・135・178・232, 9—10・13,

浅鉢形土器　3—39・44・49・53・64・68・73,
高　杯　7—45・78・178・204・221, 11—66,
甑　7—25・30・47・54・83・98・114・119,
器　台　7—178,
中期　壺　2—9・27・32, 7—158・196・204・208・209・221, 9—19・21・45, 10—34 35・39・45・46・51・89・91・104・106・107, 11—66, 12—40・119,
甕　2—9, 6—6～36, 7—137・138・158・198・204・208・209・212・218・219 223, 9—16・19・21・25・30・32・34・35・37・39・49, 10—26・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・89・91・101・103・104・107, 11—68・71, 12—42・119・121,
鉢　6—6・8・10・11・14・18・19・21・24・25, 7—163, 9—30, 10—26・33 38・42・45・48・51・53・54,
無頸壺　10—34・39・44・50・101・102,
椀形土器　10—102・106, 11—68,
高　杯　7—137・209・233, 10—91・104, 11—71,
台付椀　7—163,
器　台　7—208・211・218・224・233, 10—91, 11—72,
支　脚　7—163・208・209・233,
樽形壺　10—36・98・103,
瓢形土器　10—102,
後期　壺　7—144・185・190・193・195・233, 9—54・75, 11—72・106・109・116・119, 12—13・19・42・44・130,
小形壺　7—149・187・190, 12—18,
甕　3—188, 6—7・18・22・24, 7—149・157・185・191・214・225・235, 9—55, 11—78・85・107・112・121, 12—13・14・18・44・46・48・117・130・132,
杯　7—191, 12—14,
椀　7—185・187・191・235, 12—14・18・49・117・132,
鉢　7—185・195・235, 11—87・112, 12—49,
脚付鉢　7—153・191・235, 11—90, 12—49,
高　杯　7—153・187・191・193・214, 11—90・109・112・117・119, 12—17・49 52・117・132,
器　台　7—153・193・194・214・235, 11—90・107・109, 12—52・55・132,
支　脚　7—194・195・235, 11—97, 12—55・132,
石　鏃　3—39・56・60・90・94, 7—33・38・62・63・68・73・75・78・84・94・102・106・114・122・127・131・141・168・180・186・193・208・224 238, 11—39・105, 12—29・177,

磨製石鏃　7—51・75・93・238，11—62，
石　槍　7—138・238，11—38・105・123，12—37，
石　弾　7—26，
石　錘　11—124，12—57，
石庖丁　3—73・98，4—200，7—45・48・61・63・106・114・131・139・143・154 158・183・185・214・224・238，11—51・106・124，12—57，
磨製石斧　3—56・83・98，7—26・33・68・75・87・98・114・127・180・238，11—45・48・51，12—29，
乳棒状石斧　7—38，11—48・106・123，
蛤刃石斧　3—44・51・67，7—51・58・68・75・78・83・98・102・114・119・122・126・131・139・154・180・238，11—48・106・108・123，12—29，
柱状片刃石斧　7—73・114・119・122・131・180・238，11—45・106，
抉入片刃石斧　7—93・135・178，11—45，
扁平片刃石斧　7—37・93・105・114・138・139・224・238，11—48・123，
石　皿　3—98，7—139，11—106，
磨　石　3—51・81・98，7—45・48・73・75・84・87・106・119・131・193・196・200・242，11—53・106・109・124，
敲　石　7—98・119・182，11—55・124，
削　器　7—34・62・63・68・78・83・119・131・154・180・200・224，11—44・105・123，
凹　石　11—55・124，12—30，
砥　石　1—137，3—67・98，7—34・61・69・75・79・84・109・143・157・163・181・193・196・199・204・242，11—55・121・124，12—16・57，
石　錐　7—181，11—53・124，
石　匙　3—51，7—68，11—123，
スクレイパー・掻器　3—51・98，7—62・114，11—45・123，
縦長剝片　7—48・68・79・94・106・114・238，
つまみ形石器　7—200・238，
石　核　7—30・38・48・58・68・79・94・102・106・109・114・119・127・131・135・182・193・199・238，
礫　器　12—57，
磨製石剣　1—139，7—238，11—62，12—55，
石　戈　2—104，11—62，
石製紡錘車　7—109・242，11—58，
円盤状石器　3—51，7—58・94，11—61・124，
軽石製品　7—187，
有孔石製品　11—62，

| | |
|---|---|
| 溶　笵（?） | 11—125, |
| 土製投弾 | 7—135・242・11—61, |
| 土　錘 | 7—158, |
| 土製紡錘車 | 3—54・94, 7—38・41・48・63・79・98・115・181・215・224・242, 11—58, 12—58・59, |
| 円盤状土製品・土製円盤 | 3—94, 7—41・181・224, 11—61・106・124, |
| 有孔土製品 | 7—141・182・193・224・242, |
| 球状土製品 | 7—157・224, |
| 木製平鍬 | 11—97, 12—59, |
| 木製二叉鍬 | 11—97, 12—62, |
| 木製三叉鍬 | 11—97, 12—65, |
| 木製　鋤 | 11—97, 12—74, |
| 木製田下駄 | 12—77, |
| 木製手網枠 | 12—77, |
| 木製　筌 | 12—79, |
| 木製　臼 | 11—100, |
| 木製竪杵 | 12—79, |
| 木製横杵 | 12—81, |
| 木製　槌 | 12—81, |
| 木製斧柄 | 12—83, |
| 木製　盤 | 12—85, |
| 木製　槽 | 12—85, |
| 木製台付槽 | 11—115, |
| 木製杓子 | 11—102, 12—89, |
| 木製ヘラ杓子 | 11—102, 12—89, |
| 木製把手付容器 | 11—101, |
| 木製容器蓋 | 12—92, |
| 曲物底板 | 12—92, |
| 木製　琴 | 12—102, |
| 木製梯子 | 12—103, |
| 木製ねずみ返し | 12—103, |
| 木製矢板 | 12—108, |
| 木製　籠 | 12—109, |
| えぶり状木製品 | 12—75, |
| ふぐし状木製品 | 12—75, |
| つるべ状木製品 | 12—84, |
| 田舟状木製品 | 12—88, |
| 木製紡錘車 | 12—92, |
| 紡織具と考えられる部材 | 12—92, |

円形の小孔を有した板材　12—92,
孔を有した円形板状製品　12—96,
杭　12—108,
角　材　11—109, 12—109,
板　材　11—121, 12—109,
枘・枘孔を有した板材　12—96,
枘・枘孔を有した部材　12—106,
加工中途材　11—115,
板状木製品　11—104,
有孔板状木製品　11—102,
銅　鏃　11—62,
銅鋤先　7—243, 9—32・51, 12—112,
広形銅鉾　3—11, 12—112,
鏡　9—51,
ゴホウラ製貝輪　6—29・33・97,
水晶製ナツメ玉　7—193,
ガラス小玉　7—242, 9—54・57・67・71・81,
ガラス管玉　9—66,
蛇紋岩製勾玉　9—66,
碧玉製管玉　7—140, 11—62,
鉄　鏃　7—143,
鉄　鎌　7—185,
鉄　斧　7—158, 12—112,
刀　子　6—93,
鉄　鉇　7—154・185・194, 12—17,
鉄　剣　9—34・37・51,
鉄　戈　9—34・38・51・155,
不明鉄器　6—93, 7—186,
骨製品　7—243,
人　骨　6—7・8・12・13・14・15・17・21・22・25・26・28・29・33・97,
9—151, 10—107,
繊維製品（布・糸）席　9—160, 10—54,
種　子　11—115, 12—141,
自然科学系の調査　7—285・286・291, 9—151・155・160・166・170, 10—107, 11—149,
12—141・144・156, 13—141・144・156,

## 古　墳　時　代

住居跡　1—68, 2—61・63, 3—103・109・110・178, 4—261, 7—245・256,
円形竪穴遺構　4—262,

方形竪穴遺構　4—262, 7—262,
長方形土壙　4—262・263,
不整円形竪穴　3—112・118・184,
掘立柱建物　4—264・265, 12—168,
円　墳　1—109, 2—22・27・47, 3—102, 5—9・17・23・26・30・39・47・54・59・64・69・82・98・106・114・115・117・119・121・123・131・136・141・147・156・162・166・170・172・176・178, 9—84・91・97・99, 13—11,
方形周溝墓　2—52・54・56,
円形周溝墓　2—37・39・40・46・74,
土壙墓　2—36・59・60・61, 5—179・180・181・183・188, 9—100・101,
木蓋土壙墓　2—52・54,
木棺墓　2—27・37・46・47・56, 5—44,
割竹形木棺墓　2—37・40・46・56,
壺棺墓　3—8,
甕棺墓　3—199,
石棺墓　5—114・115・119・121・141・170・176・178,
竪穴式石室　2—22, 9—99,
竪穴系横口式石室　9—91・97, 13—14,
横穴式石室　1—105, 3—102, 5—9・17・23・30・39・47・54・59・64・69・82・98・106・117・123・131・136・141・147・156・162・166・172, 9—87,
配石遺構　5—45,
祭祀遺構　5—45,
溝状遺構　1—72・113, 11—125,
旧河川状遺構　4—265,
土師器　壺　1—72・78, 2—32・39, 3—9・178・184・189・201, 4—267・274・278・283・290, 7—245・257, 11—125,
短頸壺　1—135,
小型壺　3—178・189, 4—267・279・283・291, 7—245・257, 11—127,
甕形土器　1—69・75, 2—26・60・104, 3—104・111・179・184・199, 4—270・274・276・279・280・285・292, 5—15・53・104・131, 7—249・257・264, 9—90, 11—127,
把手付甕　1—69・75,
坩　2—33, 5—89,
鉢　4—271・279・296, 5—43・78,
椀　1—72・78, 2—62, 4—271・276・288・295, 5—13・104, 7—257, 9—90,
杯　3—107・184・191, 4—271・276・279・288, 5—25・53・68・140・145, 7—253・257,

把手付椀　3—107・140,
高　杯　1—79・134・136, 2—33, 3—180・185・191, 4—271・276・279・280・283・288・296, 5—30・78・113・131, 7—253・259・264, 11—130,
大　皿　5—145,
盤　5—13,
甑　1—69・78, 2—9, 3—107, 4—289, 5—35,
器　台　4—289・299, 7—256・261, 11—132,
支　脚　2—63,
手捏土器　1—79, 3—181・185・191, 4—271, 5—30・35・114, 11—127,
須恵器　壺　1—83・133, 5—22・89・104・130・135・139・165, 7—262, 9—90, 11—135,
短頸壺　1—83・131, 5—57・77, 9—90,
台付長頸壺　1—133, 4—299, 5—43・77・112,
台付壺　5—88,
長頸壺　5—68・77・88, 13—37,
細頸壺　5—88,
坩　5—111・129,
大　甕　5—22・53・139,
甕　1—72・86・134, 3—119, 5—13・43・58・78・89・104・130・161・165・169・175・177, 7—264, 11—135,
鉢　5—130,
瑞　5—104・111, 9—90,
横　瓶　5—89・113・139, 9—90,
平　瓶　1—133, 5—29・35・43・62・77・89・102・115・135・145・165・169,
提　瓶　9—90,
高　杯　1—82・131, 3—118, 5—13・41・53・68・77・102・111・128・145・160・165・169, 9—90, 11—134,
器　台　1—82,
焼　台　11—135,
盤　5—62, 11—134,
盌　1—131,
椀　3—108, 9—90,
台付椀　1—131, 7—262・265, 11—134,
杯　身　1—72・80・131, 2—61, 3—108・109・111・113・118・119, 5—13・21・25・28・34・41・52・57・62・67・74・87・102・109・120・128・134・138・144・159・164・167・175・265, 9—88・101, 11—132,

杯　蓋　1—72・80・131・135，3—108・109・111・112・113，4—229，5—12・19・26・32・41・50・56・59・66・72・86・102・109・120・123・127・134・136・142・157・163・166・177・265，9—88，11—132，
有高台杯　3—115，
埴　輪　1—107，11—135，13—9，
石　錘　4—301，11—136，
砥　石　3—108・111・181，4—302，7—261，
有孔石製品　11—136，
土　錘　4—301，11—136，
土製円板　4—303，
土製勾玉　4—302，
木製二叉鍬　4—301，
ふぐし状木製品　4—301，
漆塗木製品　4—301，
有孔板状木製品　4—301，
杭状木製品　4—301，
鉄鋤先　5—46，
鉄　斧　1—128，9—99，
鉄　鎌　3—108，7—261，
　鐏　1—130，
鉄　鏃　1—126，5—15・30・79・91・170，7—261，9—97・100，13—17，
鉄　剣　2—32，13—17，
鉄　矛　1—130，
金　槌　1—128，
直　刀　1—128，13—17，
刀　子　1—128，5—37・43・91・170，7—261，9—88・97，
鉄　釘　5—37・44・59・80・94・105，
短　甲　2—25，
馬具類　1—130・91，13—19，
帯金具　5—15，13—19，
鞘　尻　5—91，
足金具　5—91，
留　具　5—94，13—19，
　鞍　13—18，

鏃状鉄製品　5—94,
楔状鉄製品　5—94,
不明金具　1—130, 5—104,
銅　釧　1—126,
耳　環　1—126, 5—15・23・79・89・101・165・170・183, 9—88,
管　玉　7—256,
碧玉製管玉　1—126, 9—88・94,
ガラス製丸玉　1—125, 5—89, 9—88・95,
滑石製管玉　5—46,
ガラス製小玉　1—17, 7—261, 9—88・95,
滑石製勾玉　2—42, 5—46,
蛇紋岩製勾玉　12—114,
滑石製小玉　1—117, 2—44, 5—46,
青銅製丸玉　9—95,
滑石製模造鏡　11—136,
自然遺物　1—86,
自然科学系の調査　5—206,

## 歴　史　時　代

住居跡　3—143・146・147,
方形竪穴遺構　2—90・93・95, 3—148,
不整形竪穴　2—93, 7—274・275,
竪穴状遺構　11—136,
掘立柱建物　1—87, 2—64・66・67・85・86・87・90・95, 3—137・141・142, 4—312 313・314・317, 7—266・267・269・270・271・272・273, 12—126・127・129,
柵　列　3—135, 7—272,
製鉄炉跡　7—276,
配石遺構　1—54・56,
土　壙　12—121・124・126・23・25,
方形区画溝　2—83・94,
ピット状遺構　12—27,
張り出し遺構　2—84・85・94・95,
溝状遺構　2—83・96・97, 4—317・318, 7—276・278・279, 11—136, 12—169・20 21・22・23, 13—26・51・59,
土壙墓　1—115, 3—135, 5—185, 9—107・147,
木棺墓　1—115, 3—126, 5—185,
火葬墓　9—109,

石積遺構　8—142,
不明溝状遺構　2—7, 3—199,
自然科学系の調査　7—293, 13—27,
土師器　壺　3—129,
　高台付椀　3—129, 4—321, 5—16・161, 7—280, 11—137,
　皿　1—139, 2—105, 3—130・145・149・152・191, 4—321, 5—43, 7—280, 9—107・109,
　小　皿　1—87, 2—10・67, 5—146, 12—129・21・22・23・25・28・29,
　杯　2—10・67・105, 3—150・153・191, 4—323, 5—16・146・161・175, 7—278・282, 11—137・134, 12—122・21・25・28,
　擂　鉢　2—10・67・109,
　甕　12—122,
　高台付杯　2—67,
　托　2—107, 12—137,
　内黒土師器　12—22,
　土　鍋　2—107, 5—68,
　湯　釜　2—67・107,
土師質　杯　5—97・165,
　土　鍋　3—154, 4—328, 5—97, 11—144,
　擂　鉢　3—154・191, 4—328,
　湯　釜　7—282,
　火　舎　3—161,
黒色土器　11—140, 12—29,
瓦器　椀　11—140, 12—137,
瓦質土器　高台付椀　7—282,
　土　鍋　3—154, 4—328, 5—97, 11—144,
　擂　鉢　4—328, 5—97, 7—283,
　湯　釜　4—330,
　火鉢（火舎）　2—110, 4—330,
　托　7—282,
軒丸瓦（飛鳥・奈良）　4—318, 11—141
丸　瓦（　〃　）　2—34, 3—151, 4—320, 7—280, 11—141, 12—138,
平　瓦（　〃　）　3—134・151, 4—320, 7—280, 11—141, 12—138, 13—27,
丸　瓦（中世）　2—68,
　塼　12—29,
平　瓦　2—68, 3—151, 12—138,

須恵器杯蓋　4—324, 12—133・135, 13—56・65,
杯　身　4—324, 12—135, 13—26,
椀　1—135, 12—135, 13—26・56・65,
托　12—21,
坩　12—135,
白磁　壺　3—154,
皿　3—154, 4—332, 7—278・283,
高台付椀　1—139, 3—154, 4—332, 7—283, 11—144, 12—21・27・138, 13—33,
青磁　皿　1—139, 3—145・147・150・159, 4—334, 7—285,
長胴壺　5—97,
高台付椀　1—139, 2—110, 3—147・150, 4—334, 5—16, 7—275・278・280・285, 12—25・138,
青白磁　椀　7—285,
合　子　3—145,
陶器　短頸壺　1—141, 3—160,
甕　2—110,
擂　鉢　2—110, 7—283,
湯　釜　11—144,
緑釉陶器高台付椀　11—144, 12—137,
石　錘　3—101,
石　臼　2—114,
石　鍋　5—97, 7—26, 11—147,
砥　石　2—112, 3—147, 7—270,
人形状土製品　5—219,
板状土製品　5—216,
土　鈴　5—516,
人面・獣形土製品　5—35,
有孔板状木製品　11—147,
柄を有した角材　11—149,
板　材　11—149,
瓢容器　12—124,
木簡及び短冊形木製品　12—110,
木製下駄　12—124,
高台付椀　2—11,
木棺材　3—133, 5—215,
鉄器　紡　錘　3—128,
刀　子　3—128, 5—185,
鉄　釘　1—141, 3—130, 5—187,
鉄庖丁　5—94, 9—122,

| | |
|---|---|
| 鏨状鉄器 | 5—95, |
| 煙管吸口 | 5—95, |
| 鉄利器 | 5—187, |
| 鉄　錐 | 5—185, |
| 鉄　滓 | 3—163, 5—206・212・213, 7—276, |
| 羽　口 | 3—165, |
| 青銅器　六花鏡 | 1—115, |
| 　　八稜鏡 | 3—127, |
| 皇宋通寶 | 1—56, |
| 水晶製垂飾玉 | 5—185, |
| 人　骨 | 3—135, |
| 骨製品 | 12—140, |


## 近　　世


| | |
|---|---|
| 石畳遺構 | 8—142, |
| 積石墓 | 1—46, |
| 近世墓 | 1—36～42, 9—109・110・114・122・138・146, |
| 甕棺墓 | 9—110・114・138・139・147, |
| 木棺（桶）墓 | 9—109・114, |
| 墓標（碑） | 1—36・38・43・46・47, 9—109・110・114・122・138・147, |
| 土　瓶 | 9—122・138・114・140・149, |
| 茶　椀 | 9—114, |
| 陶磁器　皿 | 9—150, |
| 灯明皿 | 9—114, |
| 香　焚 | 9—114, |
| 珠　数 | 9—150, |
| 櫛（ツゲ） | 9—150, |
| 竹　筒 | 9—110, |
| 革製煙管入れ | 9—150, |
| 寛永通寶 | 3—161, 5—72, |
| 煙　管 | 9—150, |
| 足　袋（銅製ハゼ） | 9—150, |
| 古銭・寛銭 | 9—109・110・114・144・146・150, |
| 鉄　瓶 | 9—150, |
| 人　骨 | 9—114, |

| | |
|---|---|
| 鞍手地方の遺跡の環境 | 1—12, |
| 鞍手地区主要遺跡地名表 | 1—14, |
| 鞍手地方遺跡分布図 | 1—折込み(14—15) |
| 春日・那珂川地区の遺跡の環境 | 1—16, |
| 春日・那珂川地区遺跡地名表 | 1—27, |
| 春日・那珂川地区遺跡分布図 | 1—折込み(26—27) |
| 春日・那珂川地区先土器時代遺跡地名表 | 3—36, 7—18, |
| 春日・那珂川地区先土器・縄文時代遺跡地名表 | 8—7, |
| 春日・那珂川地区縄文時代遺跡分布図 | 4—折込み(6—7) |
| 春日・那珂川地区縄文時代遺跡地名表 | 4—7, |
| 梶原川流域縄文時代遺跡分布図 | 4—付図1 |
| 春日・那珂川地区古墳時代地名表 | 2—19, |
| 春日・那珂川町地区の古墳時代遺跡分布図 | 2—折込み(18—19) |
| 春日・那珂川地区古墳時代遺跡地名表 | 5—192, |
| 春日・那珂川地区の古墳時代遺跡分布図 | 5—折込み(194—195) |
| 春日・那珂川地区歴史時代遺跡地名表 | 2—81, |
| 春日・那珂川地区歴史時代遺跡分布図 | 2—折込み(80—81) |

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告
第 13 集
昭和54年3月31日
発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6-29
印　刷　隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町1-1

# 九州縦貫自動車道関係
# 埋蔵文化財調査報告

— XXIII —

## 付　　図

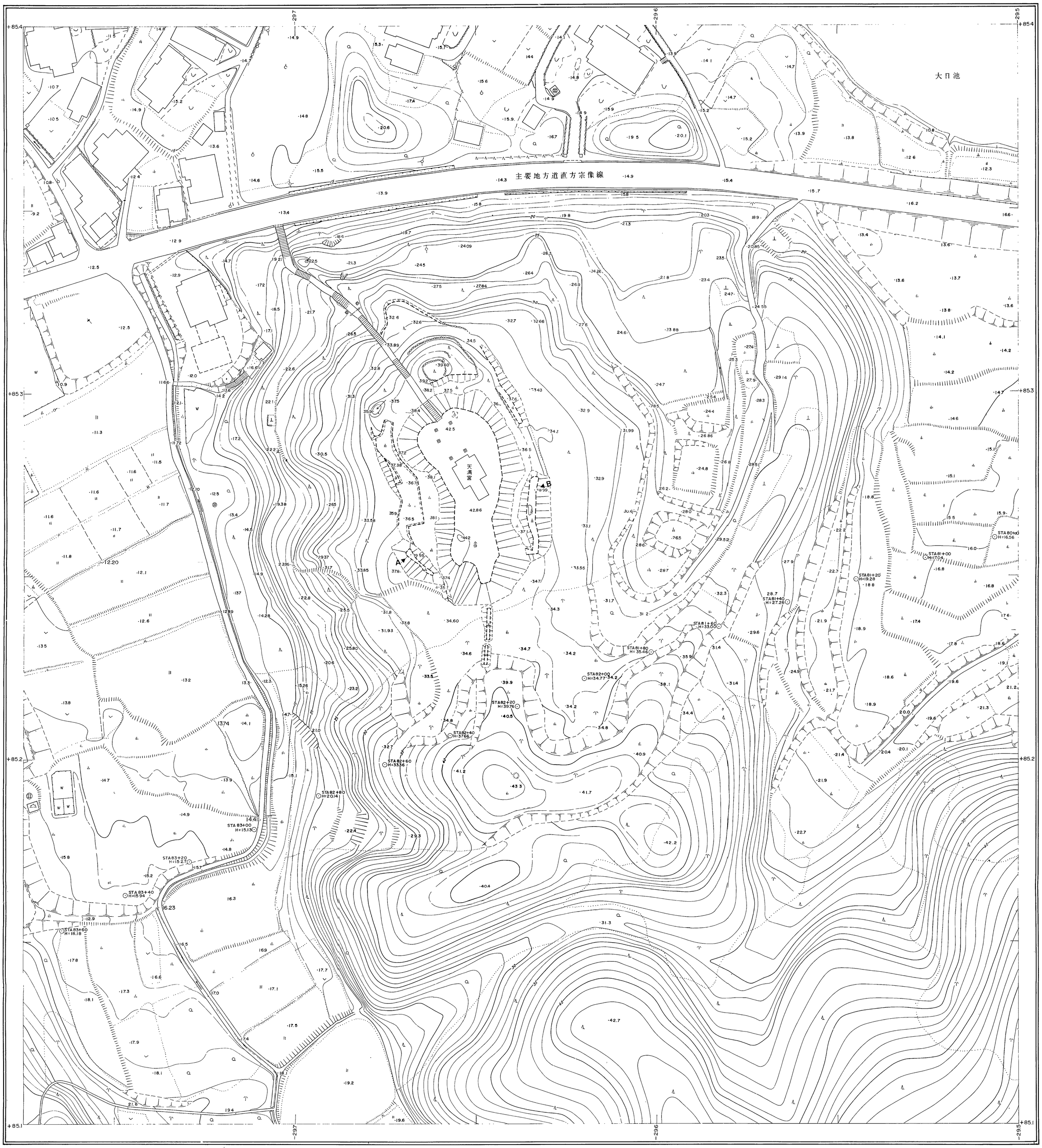
Fig. 7　音丸城遺跡地形実測図（縮尺 1:500）

Fig.24　音丸城遺跡字図（縮尺1:1000）

1 9 7 8

福岡県教育委員会

# Fig. 7. 音丸城遺跡地形実測図（鞍手郡鞍手町新北）

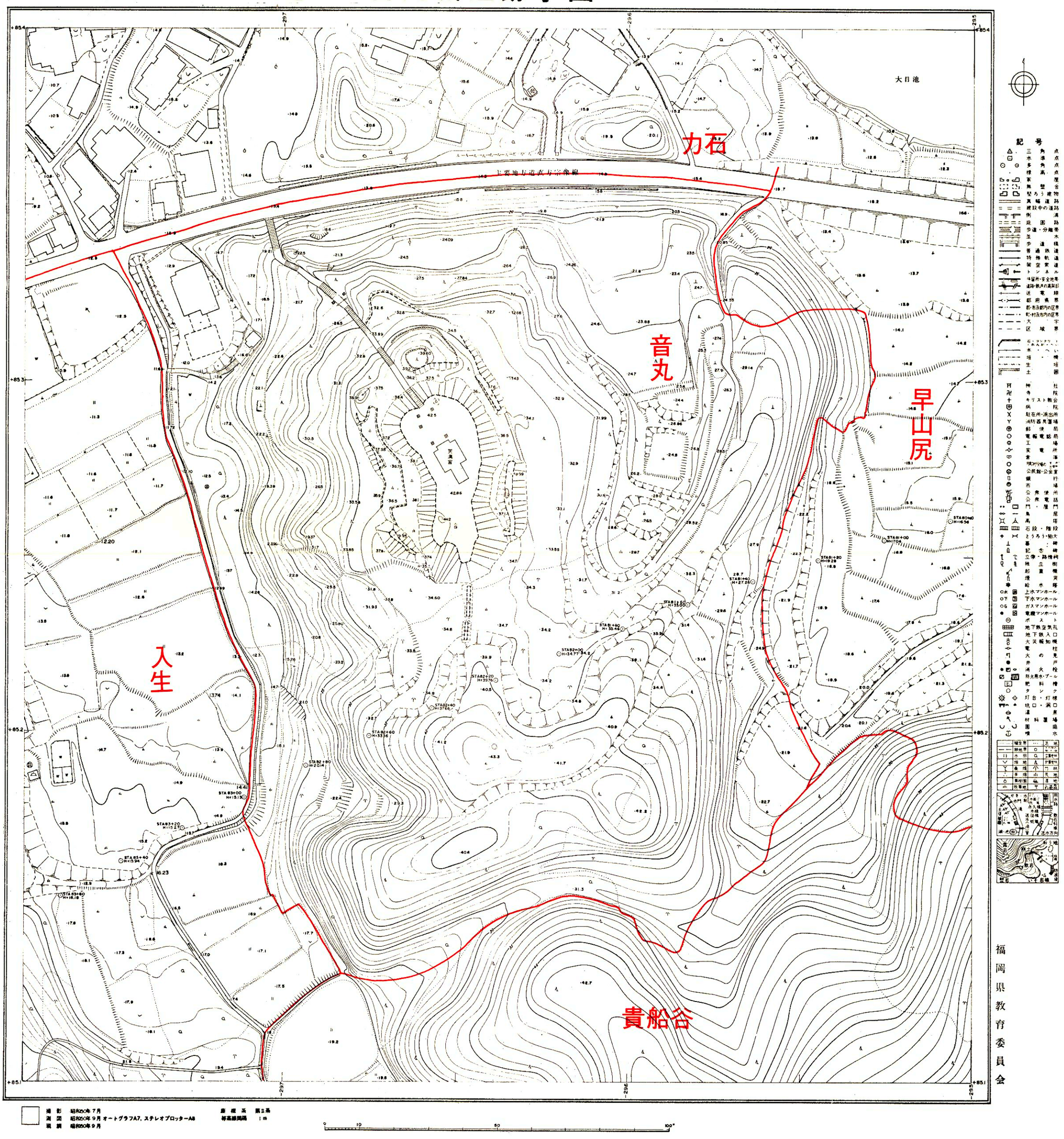



撮　影　昭和50年7月
測　図　昭和50年9月 オートグラフA7, ステレオプロッターA8
現　調　昭和50年9月

座 標 系　第Ⅱ系
等高線間隔　1m

1：500

0　10　50　100m

福岡県教育委員会

# Fig.26. 音丸城遺跡字図（鞍手郡鞍手町新北）